

テイルズオブプラネタ
リア～星空が運命を照
らすRPG～

莉愛(マンガ描きたい)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地上の女神エレーナによって守られた世界：プラネティア。その世界はエルフやハーフェルフ………水の中でも呼吸できる種族『人魚族』や『鳳凰族』と言った伝説の種族や不老不死が特徴な天使と悪魔のハーフである種族『天魔族』などが存在する。

プラネティアのクロトマーガ森林の奥にある村で村長の息子として育てられた風の使い手である青年エンデ。彼は一緒に育って来た妹のリンネと共にフェーン王国中で新たな住処を目指して旅をしていた。そんな中、森の中で光の魔術の使い手の幼馴染であり婚約者の王女……リリルテーゼと合流する。彼女は滅多にない奇跡の魔法『治癒術』を持っていて、次の女神となる大天使と呼ばれていた。

猫の様な魔物のフランと猫耳帽子を被った一人前の騎士を目指す見習い騎士の少年……ラディヤやハーフェルフの女性……ルルーと出会い、リンネに裏切られたエンデは鳳凰族の女性メリーと出会い……火山のワイバーンとなっていたメリーの亡き夫ジャックの想いを知る……。フェーネス王国での幼き頃からの友人チロルや女王ディアナやマーガレッタとの再会とリルナから明かされたそれぞれの大精霊と小人妖精を遣わせた6の王の存在……。それらを知るためにエンデは仲間達と共にチロルの故郷へと旅立ち……チロルの父親の元を訪れ安息を手に入れたのは束の間……リルナは襲撃に遭い連れ去られてしまう……。助けに向かったエンデ達を待ち受けていたのはフリーゼ帝国の幹部と呼ばれている妖術師ナタリーであり、彼女の魔法の前に手も足も出ない……。しかし、エンデが風の王ウエンディが遣わせた小人妖精ジュピターと契約を果たし……ナタリー達の撃退に成功した。新たな仲間を求めてエンデ達は闘技場を始め……ギルティーツ大陸へと旅立つて行く……。

星空が運命を照らすRPG

T A L E S O F P L A N E T A R I A

【注意事項】

これはオリジナルテイルズ作品です。

台本形式で台詞を書きます。

荒らしとか下ネタはほどほどにお願いします。

元々はpixivでやってました。

以上の事が駄目な人はこの小説を読まない事を強く推奨します。

それでも構わないのでしたら、ゆっくり読んでみてくださいね。

キャラ絵や感想をお待ちしてます！

pixiv版はこちらから

<http://www.pixiv.net/series.php?id=629>

目次

地上編

チャプター1：全ての始まり	1
チャプター2：再会	18
チャプター3：女神の力が眠る国	26
チャプター4：リルナの秘密	36
チャプター5：アジトへ潜入	43
チャプター6：旅立ち	52
チャプター7：人魚の住む里	62
チャプター8：少年に与えられた使命	70
チャプター9：海辺の洞窟	74

チャプター10：リンネの裏切り	81
チャプター11：ハーフエルフの少女	86
チャプター12：次の旅路へ	94
チャプター13：ハーフエルフの森	98
チャプター14：失踪したリルナ達	106
チャプター15：風の王の神殿	111
チャプター16：救出と出会い	117

チャプター17：帰還と旅立ち

122

チャプター18：音楽の街・ウイスタリ

ア

チャプター19：少年の事情

131 126

チャプター20：湖畔に眠る遺跡

138

チャプター21：石版と謎の女性と幼

き少女

144

チャプター22：少年の旅立ち

154

チャプター23：王女の帰還

159

チャプター24：再会と世界の危機と

部下の裏切りと

チャプター25：逃亡の末に導くモノ

177

チャプター26：国境を越えて

188

チャプター27：火山に響く獣の悲し

み

198

チャプター28：火山を護る獣…姿形

違えど大切な人を護る者

207

チャプター29：まだ見ぬ大地と雪の

降る村

221

チャプター30：忍び寄る魔の手

230

チャプター31：エンデの覚醒とチロルの想い	237	メインキャラクター紹介	284
チャプター32：焔の少女と闘技場		敵キャラクター紹介	304
245		サブキャラクター紹介	312
チャプター33：闘技開始！	254	外伝	
チャプター34：天魔の少女	260	エンデ編チャプター1：少年の日々	
チャプター35：天使と魔族の棲む箱		317	
舟	266	リルナ編チャプター1：産まれた王女	322
チャプター36：町長クラリス			
271			
戦闘ボイス&用語集&PV&主題歌集			
戦闘ボイス紹介	275		
メインキャラ&敵キャラ&サブキャラ集			

地上編

チャプター1：全ての始まり

星々が飛び交う世界：プラネティア。

そこには…たくさんの生物が行ったり来たりする…

夜になると、星は光だし。

夜を照らす光となる。

だがたまに、星と共に災厄の種子を従えし悪しき者がプラネティアを征服しに來たりする時もある。

私達の世界から、約100年前の事…

世界にプラネティアを征服するために悪しき者が襲來した事を知った私の祖先の女神は…

女神の使いに災厄の殲滅を命じた

そして…厄災を殲滅し、戦に終止符を打った女神の使いは女神と共に世界に平和を齎した

だが…

??? 「どうして…、この世界は…どうなってしまうんだ…」

滅びたはずの厄災が…今一度プラネティアを我が物にせんと…深き闇の底から這い上がるようにしていた。

★

ザー……………

雨が降り…雷が鳴る中…2人の男女が逃げていた…

? 「はあ…はあ…エンデ…ごめんなさい…私のせいでこんな事に…!」

エンデ 「何でリルナが謝ってるんだよ。別にお前が悪いわけじゃないんだから、謝る必要はねえだろ」

リルナ 「エンデ…」

静まり返った様な敵国の城下町…。

これは青年の…エンデのこれから起きる出来事の夢である

隣にはエンデが守るべき女性…リルナがいた

どうやらエンデはリルナを助け出して、仲間と合流する気でいた
エンデ「よし：追手はいないようだな：今のうちに逃げるぞ！」

リルナ「分かりました」

そして二人が駆け出そうとすると。

ドスッ！

リルナの右肩に敵兵士が撃つたと思われる矢が当たっていた。

リルナ「きやあっ！」

エンデ「リルナっ！」

二人が気が付いた時にはすでに囲まれていた。

兵士A「逃がさんぞ！」

兵士B「抵抗はやめて、大人しく降参しろ！」

リルナ「エンデ：どうするんですか：？」

エンデ「こうなったら：リルナ、お前だけでも逃げろ！」

リルナ「そんなっ：あなたが殺されてしまいます！」

エンデ「大丈夫だ：俺は絶対にお前の所に辿り着いて見せる：だから逃げろ！」

リルナ「分かりました：エンデも無事で逃げてくださいね！」

そう言うとりルナは仲間の待つ入り口付近まで走り出した。

リルナが走り去って行くのを確認したエンデは双剣を抜いた。

エンデ「さあてと、俺の力を見せてやるよ！」

兵士長「何をするつもりだ……？」

囲まれる中、エンデは二つの刃に風を纏わせて兵士に向けて走り出す。

エンデ「見せてやるぜ！風の轟を！はああああああつ！！風神滅牙斬っ！！」

エンデは秘奥義を使って一瞬にして敵兵士達を切り裂き、敵兵士達は倒れた。

エンデ「ふう……片付いたな。さて、リルナの所に向かうとするか。」

弓兵士「行かせぬぞっ……！」

剣をしまったエンデは入り口に向かって歩き出した。

だが………。

ドスッ！

最後の力を振り絞った弓使いの敵兵士が撃った矢がエンデの体を貫いた。

エンデ「ごふっ」

矢に体を貫かれたエンデは吐血し、そのまま倒れた。

エンデ「やつ……ちまったか……強く……生き……ろよ……リル……ナ……皆……」

その言葉を残してエンデは瞳を閉じた。

何処かからこの夢の様子を謎の存在が見ていた。

？「これが…あの男の起こる出来事か…」

？「ええ…この様な事が起きれば彼はあなたと契約できなくなってしまうわ…どうするのケイオス？」

ケイオス「そうだな…我らの力でこの様な事を起きなくさせれば良いのだ。どうだベルセフォネよ…素晴らしい策だとは思わぬか？」

ベルセフォネ「そうね…そうしましょう。…あなた達もそれでいいよね？」

？「俺はそれで構わない。お前はどうかアクア」

アクア「私もそれで構わないわ…ウエンデイは？」

ウエンデイ「別に構いませんよ。デイーニャ…君は？」

デイーニャ「それで…構わない…」

ベルセフォネ「決まりね」

2人の後ろで次々と謎の存在が集まって来て、闇の王と呼ばれる存在と光の王と呼ばれる二人はこの夢を消した。



く自然に囲まれた小さき村・クロトマーガく

エンデ「……………」

ここはフェーンズ領にある村・クロトマーガ……。たくさんの自然や生物……。川には魚や鳥がいっぱい集まって来る……。森の外からはたくさんの観光客も訪れ……。活気のある村である……。

そこに一人の青年が木の枝で空を見上げていた。彼の名はエンデイル・リアステイン。クロトマーガの村長の息子である。

エンデ「あの声の正体……一体誰だったんだろう……それに、あの夢は一体なんだったんだ……？」

呟いていると、人間の少女の声がした。

この少女はエンデを探していた。

??「エンデええ！何処にいるの〜!？」

エンデ「(おっ……リンネだ……驚かしてやろうっと)」

バキッ!

エンデ「は…?」

ドテツ!

リンネと言う少女を驚かそうと考えたエンデは木の枝から立ち上がった瞬間に、木の枝が折れて落ちてしまった。

リンネ「大丈夫!?!」

エンデ「痛つてえく…」

エンデは落ちた後が痛そうだったが、平気な顔をしていた。

エンデの母親が他界してからは、このリンネとは家族の様に過ごした。

まるでエンデとリンネは、兄妹の様だった。

リンネ「そう言えば、今日は魔物退治だつて!」

エンデ「マジで!?!って言うかリンネって剣は持てるのか?」

リンネは「剣は持てないけどナイフなら持てるよ!」とすこし逆切れ気味に言った。

エンデ「分かったよ。じゃあ早く行こうぜ?」

リンネ「うん!」

リンネは部屋に戻り、見送りの支度をして戻つて来た。

彼女はエンデと一緒に魔物退治をするのが楽しくてしょうがないのだ…。

リンネ「じゃあ行こつか。」

エンデ「だな。」

準備が出来た二人はリアステイン家を出た。

エンデにとっては母親が死んでから、リンネという事が毎日に思っていた。

そう、今の彼の隣にはリンネがいて、魔物退治をして、村の仕事をして。

それこそが彼の毎日の日課だった。

★

リンネ「ここだっけ？」

エンデ「お前、本当に頑張れるのか？」

リンネ「当たり前だよ。私、リアステイン家の娘だもん！」

エンデ「そっか。じゃあ気を付けてろよ」

リンネ「ええ。エンデも気を付けてね！」

エンデ「ああ!!」

目的地の場所でエンデとリンネは魔物退治をした。

その帰り道：2人はとある場所を訪れた。

エンデ「着いた着いた：ここによく、母さんの病気がよくなるために父さんとお祈り

しに来たっけなあ……」

リンネ「大きい木だねえ……」

エンデ「だろ？ずつとリンネをここに連れて来ようと思つてたんだよなあ……」

この森には一本の木が存在する……奇跡の大樹と呼ばれる大樹だ……。

エンデ達の村を作ったのはそう、大樹自身なのである……

昔……エンデは父親と共にこの大樹の元を訪れ、母親の病気がよくなる様にとお祈りをした事があり、その木をリンネに見せたかったのだ。

リンネ「奇跡の大樹様……いつも我らを見守ってくださり……ありがとうございます」

エンデ「これからもどうぞ……よろしくお願いします」

2人はお参りを済ませ、クロートマーガに帰った。

★

村長「おお……エンデにリンネ、帰ったか」

エンデ「ただいま……父さん」

リンネ「お父さん。ただいま」

村長「もう夕飯は出来ておるぞ」

村長はテーブルの上に今日の夕飯を置いた。

村長「今日の夕飯はエンデの大好きなシチューだ。」

リンネ「お父さんが作ったの!？」

村長「ああ：マリンが病気にかかる前に教わったからな」

エンデ「そうなのか：」

村長「早く食べてしまおうか：シチューが冷めてしまうぞ：」

リンネ「そうね：早く食べよう」

エンデ達は夕飯を食べ始める。

エンデ「そう言えば父さん：」

村長「何だ？」

エンデ「今日、魔物退治の帰りにリンネに奇跡の大樹を見せて来たんだ」

村長「どうだったリンネ：奇跡の大樹様、大きかったろう？」

リンネ「うん！」

村長「そうか：：気に入って頂けて良かった」

エンデ「リンネは小さい頃から始めてみる物には好奇心がわくんだよな」

村長「二人共、夕飯食べたらもう寝なさい：明日も任務じゃからな」

エンデ「分かったよ父さん」

夕飯を食べ終わったエンデとリンネは部屋に戻った。

★

く村へ続く森く

エンデ「おっ…いたいた。」

翌朝、エンデは森の中で、猪の子供を見つけた。

そうエンデはリンネには内緒で狩りを始めていた。

エンデ「猪は上手いんだよなあく」

エンデは歩いて行く猪の子供を追いかけた。

しかし、追いかけた先には親がいた。

エンデ「あつやべ…親がいるじゃん…」

エンデは少しショックを受けた。

その直後にウルフやオタオタに猪親子が襲われていた。

イノシシ親子「プギー!!」

エンデ「あつ危ない…！猪親子を助けなきゃ！」

エンデは猪親子の前に立つと双剣を抜き、猪親子を助けるために魔物退治を始めた。

★

エンデ「魔神剣っ!!」

ウルフ「ぎやうっ!!」

エンデがウルフに衝撃波を放ち、ウルフが悲鳴をあげながら倒れた。

エンデ「まだまだ! 裂空斬っ!!」

オタオタ「ピギユ!」

二体のオタオタに縦に回転斬を放ち、転じた。

エンデ「これで終わりだ! 瞬迅剣っ!!」

エンデが剣でウルフに剣技で止めを刺し、無事に任務を終えた。

★

エンデ「ふう…」

エンデが剣を鞘にしまうと、猪親子がエンデに寄って来た。

エンデ「何だ：？俺に助けてくれてありがとうって言いたいのか？」

親猪はエンデになでなでされて嬉しそうだった。

エンデ「次は魔物に襲われない様に気を付けて帰れよ？」

エンデは猪親子を森の奥へ逃がすと、猪親子は満足そうに森に帰って行った。

エンデ「さてと：帰るかな。」

すると、草むらがゆさゆさと揺れた。

新手の魔物でも現れたのか。

エンデ「なっ：何だ？」

音は近くなった。

エンデ「新手の魔物か：！？」

エンデは威嚇をするために武器をとろうとした。

しかし、草むらから出て来たのは魔物ではなくリンネだった。

エンデ「リンネっ！こんな所で何してんだ？」

リンネ「あっエンデ：急いでクロトマーガに戻って！」

エンデ「どうしたんだ？」

リンネ「村人が一人、追い出させる事になったの！」

エンデ「何だどっ！？」

嫌な予感を察知したエンデはリンネと一緒にクロトマーガに戻った。

★

女性A「あなた…」

子供「パパア…」

二人がクロトマーガに戻った時には、村人が追い出された後だった。

エンデ「なあ、どうなってんだ？」

エンデは近くにいた村人に何が起きているのかを聞いた。

村人A「ああ何かね…村人が新しい『掟』を破ったから追い出されたらしいよ。」

エンデ「掟？」

子供A「うん…村長がこの村に新しく掟を追加したんだって」

エンデ「その新たな掟って何だ？」

子供B「この村に他の村から来た人を村に入れてはいけないと言う掟なんだって」

そう…エンデの父親はこの村に新たに『他の村から来た者を村には入れてはいけない』と言う掟を作ったのだった

その酷い光景を見たリンネは涙を流した

エンデ「リンネ…？」

リンネ「村に他の村から来た人を入れないなんて事をする人なんて…大嫌い！」

エンデ「ああ…俺もだ」

雨の中、二人は二人でリアステイン家に帰った。

★

夜になった。

エンデはリンネのいる部屋の扉をノックする。

エンデ「リンネ…起きてるか？」

リンネ「うん…起きてるよ」

エンデ「今…ここを出るぞ」

リンネ「分かった。もう準備は済ませてあるよ」

荷物を持ったエンデは、リンネと共にリアステイン家を出た。

リンネ「ねえエンデ…クロトマーガを出て…本当に良かったの？」

エンデ「ああ…俺はすぐに掟を付ける様な奴らは大嫌いだから…」

リンネ「そうなんだ。」

エンデ「ああ…あつ、ここから出るぞ。」

リンネ「うん。」

エンデが梯子を取り出すと、梯子を柵に掛けてクロトマーガを出た。

リンネ「私…クロトマーガを出て良かったのかな…」

エンデ「ああ大丈夫だ。お前は出なきやいけなかったからな。それに…」

リンネ「それに…？」

エンデ「お前には俺が付いている。だから出てもおかしくないさ。」

リンネ「エンデ…」

森の出口が見えた。

リンネ「あつ、出口だよ！」

エンデはリンネの横に立って朝日を見た。

リンネ「綺麗だね…！」

エンデ「ああ…綺麗だな。」

エンデとリンネが見た朝日はとても綺麗だった。

エンデ「行こうぜリンネ。」

リンネ「うん！」

二人は、新たな住処を探すために歩き出した。

チャプター2へ続く。

【おまけ】

初めまして。yukimiyaです！

初めてあげる作品なので、すこしあれれ？つてなるかもしれませんが温かく見てやってください。

コメント、評価はお待ちしています！荒らしだけは絶対にしないでください。

チャプター 2：再会

エンデ「リンネ、今俺たちが何処にいるか分かるか？」

リンネ「そうだね…丁度クロトマーガ街道にいるね」

安定した生活を手に入れるべく、新たな村に向かってクロトマーガを出たエンデとリンネは東クロトマーガ街道を歩いていた。

エンデ「リンネ、故郷を出てから結構歩いたな。」

リンネ「そうだね。少し休もう」

二人は森の中の木の影で休むために歩き出した。

すると女性が歩いて来て…エンデとすれ違いざまにこう言った…『もう一つの世界の女神となる少女を助けて…』と…。その事を聞いた瞬間、エンデは立ち止まって振り向いたが女性の姿は見当たらなかった。

リンネ「どうしたのエンデ？」

エンデ「何でもねえ…早く行こうぜ！」

リンネ「うん！」

2人は歩き出した。

エンデは考えた：『あの女性は誰なのだろう…』と…。

★

くフエーネスの森く

ピピピ……

エンデ「風が気持ちいいな…」

リンネ「鳥の鳴き声も聞こえて…良い所だね…」

エンデ「ここで休憩を取って正解だったな」

リンネ「そうだね…」

2人は木の下で疲れを癒していた。

そう…フエーネスの森は風が気持ち良くて…自然も空気も川も綺麗な素敵な場所なのだ…ピクニックにはちょうどいい場所である。

リンネ「そう言えばエンデ。フエーネス王国の王女様って知ってるかな？」

エンデ「どうした急に…」

リンネ「気になったの」

リンネはフェーネス王国の姫が気になったため、知っているかどうかをエンデに聞いた。

エンデ「俺は幼馴染だから知ってるが…リンネは知らないのか？」

リンネ「とても美しくて可憐な王女様とは聞いているけど、実はその王女様は…もう一つの世界の女神として降臨するためにこの世界に来た大天使と呼ばれるほど有名な天使のお姫様なの」

驚く事にフェーネス王国の姫は大天使と呼ばれるほど有名な天使の姫だと言う。でもエンデは天使は名前だけしか知らなかった。

エンデ「天使？本でしか見た事がないな」

リンネ「そう、じゃあ教えてあげる。大天使はもう一つの世界の女神になるために女天使に与えられる使命なの。そしてフェーネス王国の王女様はもう一つの世界の女神になるためにこの世界に舞い降りたの。」

エンデ「(もしかして、リルナの事か!?)」

すると、何かが走って来る音が聞こえた

その直後にリンネは草むらに隠れた

リンネ「(エンデ…早く隠れて!)」

エンデ「(ああ!)」

エンデはリンネの言う通りに隠れた。

するとその直後に、フードを被った女性と兵士が二人走って来た。

兵士A「もういい加減に戻られてはどうぞですか!」

兵士B「急にいなくなられては…乳母様も女王陛下もチロル隊長も民も皆…心配され

ますぞりリルテーゼ様…」

?「嫌です!私は今…この世界に何が起きているのかを知りたいのです!」

兵士B「しかし!」

2人の兵士と少女は話していた。

エンデとリンネは草むらの中で話をしていた。

リンネ「あの少女達…何を話してるんだらう…」

エンデ「さあな…ってか、今の兵士…リリルテーゼって言ったな…」

3人の話の決着はつかずに、遂に強行手段にして…少女の手を掴む。

？「放してください…！王女の命令が聞けないのですか!？」

兵士「さあ戻りますぞ姫様」

？「(チロル…!）」

草むらで話を聞いていたエンデは我慢の限界になり、飛び出した。

エンデ「おい！待てよ！」

兵士A「何だね君は…」

エンデ「お前らの大事なりルナ王女が嫌がつてるだろ！」

兵士B「君…今…リルナ王女と言ったか？」

兵士A「何故君が…リルナーゼ姫様のあだ名を知っているのかね？」

エンデ「おじさん達…もう忘れたの？俺はあのマリン夫人の息子だよ」

その事を聞いた瞬間、兵士2人と少女は驚いた。

兵士B「まさか…エンデ君かい!？」

エンデ「そうだぜ。久し振りだなおじさん達」

？「エンデ…なの？」

エンデ「久し振りだなリルナ」

4人で話していると、リンネも出て来た。

リンネ「そもそも、どうしてこんな所で一国の姫様と兵士が口喧嘩してたの？」

兵士A「姫様はこの世界に起きてる事を知りたいと言って女王陛下にも乳母様にもチロル隊長にも何も言わずに：旅立とうとしていたのだよ」

兵士B「我々は必死に止めようと思いました：姫様は森へと逃げ出したと言う事なのだよ：」

エンデ「全く：ダメだろリルナ：ディアナさん達に言ってから行かないと：」

リルナ「ごめんなさい：」

リンネ「そもそもドレス姿で武器も持たないで：魔物に襲われたらどうするの？」

兵士A「リンネさんの言う通りですぞ」

エンデ「俺らが一緒に行くから、一緒にフェーネスに帰ろうぜ？」

リルナ「はい：」

3人と兵士達はフェーネス王国に戻る事にした。

★

リンネ「はあ：はあ：ここまで来れば休めるね：」

エンデ「そうだな：」

山頂から歩いたエンデとリンネとリルナと兵士達は疲れたので、道中で見つけた山小屋で休憩を取っていた。

エンデ「なあ…このまま寝てていいか？」

リンネ「だめ、ちゃんと起きてて！」

どうやらエンデとリンネとリルナと兵士達はリルナの母親や乳母達に心配をかけまといと森の出口まで急いでいた。エンデは魔物と戦いながら来たために疲れが出て、いかにも眠そうだった。

エンデ「マジか！って言うか、お前達は大丈夫か？」

兵士B「我々は何の問題もございません」

どうやらリルナも兵士達も平気らしい。

エンデ「そっか。良かった」

リンネ「何か話したい事はある？」

エンデとリンネはリルナに聞き出した。

リルナ「エンデの隣のあなた、お名前は？」

エンデ「こっちは俺の妹のリンネさ」

リンネ「リンネ・リアステインだよ。あなたは？」

リルナ「私はリルルターゼと申します…よろしくお願いします。」
リンネ「よろしくね。」

リルナ「それと…さつきはごめんなさい…急に変な事に巻き込んだりやって…」
エンデ「気にするな。つてか喋つてないでここを出るぞ。ディアナさんに心配をかけたくないしな」

リルナ「そうですね。まずは森を抜けましょう、それでどうするかを考えましょう」
リンネ「そうだね」
兵士達「その通りですな」

こうして5人は山小屋を出てフェーネス街道を歩き出した。

チャプター3へ続く。

チャプター3：女神の力が眠る国

エンデ「ここって魔物が多いよな」

リルナ「そうですね。そう言えば、エンデは戦い方って知ってるのですか？」

エンデ「知ってるさ。親父に稽古を付けてもらったからね」

休憩中に兵士を説得してリルナを救ったエンデとリンネはリルナと兵士達と共に森の中を急いだが、疲れたために道中の山小屋で休憩を取った。そして次の目的地であるフェーンネス王国を目指して先を急ぐエンデとリンネはリルナを魔物から守り、魔物を倒しながらフェーンネスの森の出口を目指していた。

エンデ「なあ…ちよつと聞きたい事があるんだが。」

兵士A「どうかしたかな？」

エンデ「リルナって何者なんだ？」

兵士B「どうしたのだねいきなり…」

エンデ「リンネの言っていた事が気になって…」

彼らが休憩中の時にリルナが旅に出ようとしていた事が気になったエンデは、兵士に聞いてみた。

兵士A「リルナーゼ姫様は…もう一つの世界の女神となるためにこの世界に舞い降りた大天使と言う有名な天使の姫なのだよ…」

エンデ「もう一つの世界の女神となるためにこの世界に舞い降りた天使の姫え!？」

リンネ「私がエンデに教えた事と同じだ…」

エンデが気になったリルナの正体ももう一つの世界の女神になるためにこの世界に舞い降りた大天使と言う有名な天使の姫である事にエンデは驚いた。エンデはすぐに落ち着き、兵士に再び質問した。

エンデ「それで、次の女神になるためには何が必要なんだ？」

兵士B「分からん…だが何処か方法があるはずだ…」

リンネ「そうなんだ」

リルナ「あつ出口ですよ！」

長らく歩いていると、フェーネスの森の出口を見つけた5人はフェーネスの森の出口に辿り着いた。

リルナ「あつあそこに馬車のおじさんがいますよ！乗せて行ってもらいましょうよ

！」

エンデ「だな。」

リンネ「そうだね！」

兵士「その馬車人。我らはフェーネス王国に行きたいのだが乗せて行ってもらえな
いか？」

馬車のおじさん「ああ構わないよ。馬車代を四人分持っているならね。」

エンデ「馬車代？持っているぜ。」

リンネ「私も持つてるよ。」

兵士「我らもありますよ。姫様は？」

リルナ「何がです？」

エンデ「馬車代だ。持っているのか？」

リルナ「ちよつと待っててくださいね…？」

そう言うとりルナは宝石を出した。

馬車のおじさん「これは大したモノだねえ…よし、乗って行きな！」

5人は馬車代を払うと、フェーネス王国に向かった。

「女神の銅像が聳え立つ国・フェーンネス王国」
フェーンネス王国の城下町は毎日賑わっている…。

それは…リルナの母親であるディアナが女王として…この国を統べているからである…

エンデ「フェーンネス王国も変わらねえな」

リルナ「帰って来れて良かったです…」

リンネ「城下町が賑やかで羨ましいなあ…」

兵士「そうだろうか？」

エンデ「よし、そうと決まったら早速街巡りしようぜ！」
早速エンデ達は街巡りをした。

この城下町の名物であるアイスキャンディーを食べたり、武器屋で新しい武器を買ったり防具屋で新しい防具を買ったりなどして楽しんでいた

エンデ「楽しかったな」

リルナ「そうですね〜！」

リンネ「こんなに賑やかだとは思ってもいなかったよ〜！」

兵士「本当ですね」

エンデ達がのんびり話していると、ロープを羽織った女性がエンデにぶつかった。

??「きゃっ！」

エンデ「うおっ!？」

ぶつかった女性は尻餅をついた。

エンデ「大丈夫か？」

？「あつ…ありがとうございます。」

女性がエンデの手を取ろうとしたら、急に風が吹いてきた。

女性が『きゃ!』と言ったその直後に女性のフードが風によって外れた。

エンデはその女性の顔を見た瞬間に驚いた。

エンデ「ディアナさん…!？」

リルナ「お母様!？」

兵士「何故あなた様が城下町に…」

リンネ「えっ…女王様…!？」

リルナ「どうしてお母様がここにいらっしゃるんですか…!？」

ディアナ「実は…」

ローブを羽織った女性の正体はフェーネス王国の王妃様でありエンデの母親の友人でありリルナの母親のディアナだった。ディアナが城下町にいるのかを話そうとしたその瞬間、黒いマントを羽織った男達が走ってきた

黒マントA「いたぞ！あそこだっ！」

黒マントB「親子を逃がすなっ！」

リンネ「ねえあの人達って何者なの？」

兵士「分からんが…とりあえずリルルテーゼ様とディアナ様を狙っているのは確かかな…どうするかエンデ君？」

エンデ「そうだな…ここだと面倒だが…戦うぞ！」

リンネ「うん！」

エンデはリルナとディアナを下がらせ、リンネは武器を取り…兵士に護衛部隊を呼びに行かせた。

黒マントA「やるつもりだなこのガキ共…」

黒マントB「良いだろう…力の差を見せてやる」

黒マントも武器を取る

エンデ「俺がガキだと…？ふざけんなっ！俺はもう20歳だ！」

リンネ「私…19歳なのにつ…！」

エンデとリンネは『ガキ』と言われて頭にきたらしく、エンデは双剣を引き抜いてリンネは拳を構えて、相当やる気でした

エンデ「行くぞっ!!魔神剣っ!!」

リンネ「三散華っ!!」

2人の技が黒マントAに炸裂し、黒マントAに重傷を負わせた。

黒マントA「ぐわっ！」

黒マントB「何っ!？」

エンデ「後はてめえだけだ…」

エンデ達は黒マントBに武器を向けた。

黒マントB「ちっ…こうなったら！お前ら出てこい！あの女を捕えろ！」

黒マントBの合図に合わせて彼らの仲間と思われる残りの黒いマントを羽織った男

達が現れ、親子に襲い掛かる。

エンデ「しまった…リルナっ！ディアナさんっ！」

リルナ「……………！」

？「はっ！」

リルナとディアナは絶体絶命に落ちたかと思われたが、なんと一人の女性がリルナとディアナを守るかのように前に立ち、黒マントを斬り倒した

エンデ「良かった…」

？「お怪我はありませんか？」

リルナ「あっ…ありがとうございます」

女性は薙刀を構えた状態でリルナに話しかけた。

リンネ「あなたは何者なの？」

エンデ「誰なんだ…」

二人は女性の勇士に目を輝かせていて、黒マントBには気付いていない。

黒マントB「（これって俺に気付いてない…？って事は、チャンスだ！）」

気付いてないと思った黒マントBはリンネの隙を見て後ろに回り込んだ。

それに兵士は気付いた。

？「リンネさんっ！！後ろですっ！」

リンネ「あっ……!」

黒マントB「死ねえ!」

リンネが気が付くと黒マントBが後ろにいた。剣を振りかざした。

エンデ「させるかよっ! 裂空斬っ!!」

エンデの攻撃でリンネは守られたが黒マントBは倒れず、さらに味方を呼んでしまっ
た。

エンデ「うわっ 仲間が出てきやがった!」

リルナ「どうするんですか!?!」

リンネ「これはどうしようもなく、逃げるしかないよ!」

ディアナ「そうですね…急いで港へ向かいまししょう!」

? 「入り口の方に私がお仕えする者を待たせておりますので一緒に逃げましょう」

エンデ「そうだな…リルナ、俺にしっかり掴ってるよ!?!」

リルナ「えっ? きやっ…!」

黒マント達を撃退できなかったエンデはリルナをお姫様抱っこにしながら走り、リンネとディアナと女性も一緒にフェーネス港へと走っていると一人の女性が数十人の兵士を引き連れて立っていた

？「エンデ：ここは我らフェーネス王国獅子団マーガレッタ隊が引き受けるから：姫様と女王陛下達を連れてフェーネス港へと急ぐんだ！」

エンデ「ありがとうな！」

エンデ達は走り抜ける。

すると女性が小声で言った：『多くの仲間を引き連れて、必ずフェーネス王国へ戻って来い』と…。軽く頷いたエンデ達はフェーネス王国を出た

チャプター4へ続く。

チャプター4：リルナの秘密

エンデ「追手は…来ない様だな。」

リンネ「そうだね…」

フエーンネス王国の城下町でフエーンネス王国の女王ディアナと再会したエンデとリンネとリルナは黒いマントを羽織った二人組を撃退しようとしたが失敗して、西フエーンネス港まで逃げていた。逃げる際にエンデ達は少女と侍女と自己紹介を交わしていた。

ディアナ「リルナ…お怪我はありませんか？」

リルナ「大丈夫です。ありがとうございますお母様」

エンデ「ディアナさんも大丈夫ですか？」

ディアナ「私もお怪我はございません」

エンデ「良かった…そう言えばディアナさん…あなたを襲ってきたやつは一体何者なんだ？」

すると、ディアナはすこし目を逸らしながら答えた。

ディアナ「彼らが何者なのかは分かりませんが…リルナを狙っているのは確かです…」

リンネ「そうなんだ…それにしても、どうしてリルナさんを狙うの？」

エンデ「何か特別な理由があるのか？」

ディアナ「私には分かりません…ですが、狙いはきつと…リルナの体内に宿ろうとしている天使の力でしようね…」

リンネ「天使の力…？」

ディアナ「実はリルナは…天界の女神エヴィリオス様の生まれ変わりなのです。それを良い事に彼らはあの子を悪用しようとしているのです…リルナは私の子として生を授かった後に…私の命令により城内で生活していたため狙われる事はなかったと思っただんですが…8歳になって間もない頃に城内に侵入していた盗賊に誘拐された事で謎の集団にまでリルナの中に眠る天使の力が知られ渡る様になってしまったんです…」

リンネ「そうだったんだ…でも大丈夫だよ！私達のリルナさんを守るよ！」

エンデ「リンネの言う通りだ…だから安心して」

リルナ「二人共…ありがとうございます！」

ディアナ「さてさて…西フエーネス港まで後一息ですし頑張みましょうか！」

エンデ「そうだな！」

リルナの秘密を聞いた一行は西フエーンネス港までさらに足を進めた。

★

く西フエーンネス港く

リンネ「ここが西フエーンネス港だよな？活気がすごいね！」

エンデ「だろだろ？だってリルナの故郷の港だからな！」

西フエーンネス港の入り口でエンデ達がのんびり話していると、向こうから人が騒いでいた。

リルナ「何でしょうか…？」

エンデ「行ってみようぜ…」

一行が声のする方へ行つてみると、盗賊達がいた。

盗賊親分「お前ら、金目のものは奪ええ！後、女は見つけ次第捕まえろ！特に美人な女を捕まえたら俺に献上しろ！」

盗賊達「へいお頭！」

リンネ「盗賊か……」

エンデ「物騒じゃねえか……」

リンネ「あつ……リルナさん!？」

この光景を見たリルナは盗賊団を止めに行つた。

リルナ「あなた達、こんな人がいるところでの略奪だなんて辞めるんです！ここは人が集まる場所です！これ以上の好き勝手はフェーネス王女の私が許しませんよ！」

盗賊親分「おつ？これは可憐で可愛い姉ちゃんじゃねえか……おいお前ら、そいつを連れて行くから取り押さえろ！」

盗賊達「へいお頭！」

すると盗賊達はリルナの口を塞ぎ、縄でリルナを縛つた。

エンデ「てめえ等……リルナを放しやがれ！」

リンネ「そうだよリルナさんを返して！」

盗賊親分「ああお前らの連れか…？いいや返さねえよ…こいつは俺らがアジトに連れて帰って俺の妻にするんだぜ！」

ディアナ「なんて野蛮な…！」

盗賊親分「そういうわけだ。おいお前ら、撤退するぞ！」

盗賊達「へい！」

何と盗賊親分はリルナを自分の妻にする気でいた…。盗賊達はリルナを袋の中に入れた。その袋を盗賊親分が背負い、そのままアジトへ向かって走りだした。

エンデ「あつ…てめえ等、待ちやがれ!!」

リンネ「リルナさん…！エンデ、助けに行こうよ！」

エンデ「でもどうやって助けに行くんだよ！」

リンネ「どうしよう…！」

一行が考えていると、後ろから青い猫耳帽子を被った少年が話しかけて来た。

？「君達…あの盗賊団に女の人を誘拐されたの？」

リンネ「そうだよ…助けに行きたいんだけど道が分からないの…！」

？「そつかあ…じゃあオイラとアリアさんも手伝うよ！」

リンネ「手伝ってくれるの？」

？「うん：だつてオイラは見習い騎士の任務で来ているからね」

エンデ「そうなのか：つて、自己紹介がまだだったな。俺はエンディル・リアステインだ：エンデで良いぜ」

リンネ「私はリンネ・リアステインつて言うの：リンネで良いよ」

？「エンデにリンネさんだね：オイラはラデイオス・ノスタルジアつて言うの。ラデイで良いよ：よろしくね二人共。こっちはオイラの連れのアリアさん」

アリア「アリアと申します。以後お見知り置きを：」

エンデ「ああよろしくな」

リンネ「よろしく！」

ラデイ「アリアさんは人探しをしていて、オイラはその人が見つかるまでの連れなんだ！リルナさんを取り戻したらオイラの故郷に案内するね！」

ディアナ「エンデくん：リルナを頼みますね」

エンデ「分かった。とりあえずディアナさんは宿屋で待っていてください」

ディアナ「分かりました：気を付けて：」

こうしてラデイと言う名の少年とアリアと言う女性と一行は、リルナを誘拐した盗賊団のアジトへと出発した。

チャプター5へ続く。

チヤプター5：アジトへ潜入

エンデ「なあラデイ…」

ラデイ「どうしたの？エンデ？」

エンデ「リルナを誘拐した盗賊団ってどう言う奴等なのか…知ってるか…？」

盗賊団にリルナを誘拐されたエンデ達はリルナを奪還するため、西フェーネス街道を歩いてきた。そしてエンデはラデイに盗賊団について聞いて見た

ラデイ「リルナさんを拐った盗賊団は主に港を荒らして…中でも気に入った女性がいれば連れ去っているらしいよ…それが今回リルナさんに当たったってわけだね」

アリア「その様ですね…絶対リルターゼ王女を助けましょう！」

リンネ「うん！」

ラデイ「あつ見えて来たよ…盗賊団のアジトが…」

一行はリルナを誘拐した盗賊団のアジトに着いたが、アジトの入口には下つ端の盗賊が二人いた。

その様子を、エンデ達は見ていた。

エンデ「（入口に見張りがいちゃあ…入れねえぞ…どうする？）」

リンネ「(困ったなあ……)」

ラデイ「(ここはオイラに任せて?)」

エンデ「何か思い付いたのか?」

アリア「(ラデイくんは土魔術を遠くからでも撃つ事が可能なのですよ……)」

リンネ「(スゴいんだね)」

ラデイ「(じゃあ行くよ!) 浮き上がれ……石の柱! ストーンブラストっ!」

小声でラデイはストーンブラストを放ち、ちゃんと見張りの盗賊に当て、気絶させた。

エンデ「すげえな……」

アリア「でしよう?」

リンネ「さあてと、アジトに突入しよう!」

ラデイ「そうだね……!」

盗賊が2人、気絶したのを確認したエンデ達は盗賊団のアジトに突入した。

☆

〈盗賊団のアジト〉

エンデ「アジトの中には盗賊がいっぱいいるな…」

アリア「そうですね…倒して進んでますが…」

ラデイ「ボスの部屋って何処なんだろうね？」

リンネ「きつと何処かにあるはずだよ…」

アリア「そうですよラデイ様…」

一行が話しながら進んでいると、盗賊がまた襲ってきた。

盗賊A「侵入者だあああああああ！」

盗賊B「撃退するぞおおお！」

エンデ「面倒くせえ野郎だな…」

ラデイ「そうだね…本当に面倒くさい」

そう言いながらもラデイは盗賊Aの後ろに回り込んで近距離で「浮き上がれ…石の柱

！ストーンブラストっ!!」

盗賊Aに向かってストーンブラストを放った。

エンデ「追加攻撃行くぜ！魔神剣っ!!」

アリア「巫女様に教えていただいた技…見ていただきましょう！蒼破刃!!」

ラデイに続いてエンデは魔神剣を放ち、アリアは蒼破刃を放ち…盗賊Aを撃退した。

その後、リンネが盗賊Bと戦っていた。

リンネ「三散華っ!!」

アリア「エンデ様の方は片付きましたので助太刀いたします!」

リンネ「ありがとうアリアさん!」

リンネは三散華を放った後に、アリアが薙刀で盗賊Bを斬り捨てた

エンデ「しつけえよな…」

リンネ「ホントだね」

ラデイ「この先だね…盗賊のボスの部屋は…」

リンネ「そうみたいだね…」

アリア「さあ…リリルテーゼ姫様を救い出しましょう!」

エンデ「力押しで行くぞ…!」

ラデイ「うん!行くよ皆!」

アリア「はい!」

エンデとラデイとアリアとリンネは盗賊のボスの部屋の扉を押し開けた。

エンデ「そこまでだっ!!」

一行が駆け付けると、そこには盗賊子分達が何人かと親分とリルナがいた。

リルナ「エンデっ!皆っ!」

リンネ「リルナさん…助けに来たよ…」

ラデイ「さあ…観念しな！」

親分「もうここまで来たか…」

アリア「一国の王女を誘拐した上に港を荒らした行為…万死に値します！」

エンデ「リルナを放しやがれっ！」

一行はリルナを返すように言った。だが…それを聞かない盗賊親分は…。

盗賊親分「おい！お前ら…こいつらをぶっ潰すぞ！」

子分達「へいお頭！」

盗賊親分は子分を3人、4人呼んで、武器を構えた。

エンデ「結局こうなるのかよ…」

リンネ「ぶっ潰されるのはあなた達の方だよ！」

ラデイ「そうだそうだ！」

アリア「皆様、来ますよ！」

一行も武器を構えた。そして盗賊達が襲い掛かって来た。

☆

エンデ「魔神剣っ!!」

アリア「蒼破刃っ!!」

リンネ「三散華っ!!」

ラデイ「瞬迅槍っ!!」

四人はそれぞれの攻撃で盗賊子分達を次々と倒していく。

盗賊親分「おっ…俺の子分達がああああ…!」

アリア「さあ…後はあなただけですよ…抵抗はやめ、大人しく降参しなさい。降参するとさえも何れも危害は加えません…」

盗賊親分「クソっ…女の分際でええええええええええ!」

子分を倒されてアリアに降参しろと言われて怒りを露にした盗賊親分は大剣でアリアに斬りかかるが避けたアリアは一瞬で盗賊親分の背後に回り込み、素早い蹴りをお見舞いした

リンネ「アリアさん…すごいね…!」

エンデ「盗賊の親分を蹴り倒したな…」

ラデイ「これは驚いたよ…」

アリア「そうですか? 体術は誰にでも出来るはずですが…」

アリアが蹴り倒した盗賊親分を見てエンデ達は驚いていた

恥ずかしい所を見られてしまったアリアは顔を赤くして、急に思い出したかの様にリルナに駆け寄った

アリア「リルルテーゼ姫…怪我はありませんか？」

リルナ「大丈夫ですよ…心配してくれてありがとうございます」

ラデイ「エンデ達の仲間の王女様が無事でよかったですよ…」

リンネ「ラデイさん…手伝ってくれてありがとうございます！」

エンデ「本当に助かったぜ…！」

ラデイ「そう言えば君達はこれからどうするの？」

リンネ「私達はこれからフリーゼ大陸へ行くところなの！」

ラデイ「そうなんだ。だったら、オイラの故郷の人魚の里においでよ！里の皆なら喜んで歓迎してくれるよ！」

エンデ「そうだな。じゃあそうさせてもらう」

リンネ「人魚の里…どう言う所なんだろうね…」

アリア「興味が湧いてきました…」

リルナ「ワクワクしますね…！」

ラデイ「よしっ…じゃあさっそく西フェーネス港へ戻ろうっか！」

一行は親分の部屋を後にした。一行が去って行ったその後にはアリアの蹴りを喰らって気を失っていた盗賊親分が目を覚ました。

盗賊親分「くそお：俺の夢の結婚生活が：やつと手に入れた俺の妻があ…！」

目を覚ました盗賊親分が一人で嘆いていると、何処から声が聞こえた。

？「ねえ…：そのあなた…：我が声が聞こえるかしら？」

盗賊親分「何処だ!?!…：って言うか誰だ!?!」

盗賊親分が答えると、紫色のロングヘアーに青い瞳の少女が現れた

盗賊親分「お前は…：？」

ユリス「私の名前はユリス・シャトルーゼ・フェーラ・ヴァルレーフィン…：ただの聖

女よ」

盗賊親分「いったい…：聖女様が俺に何の用があるんだ？」

ユリス「あなた…：私の麗しのお姉様を捕まえたって聞いたのだけれど…：お姉様は何処にいるのかしら？」

盗賊親分「それが…：あの可憐で可愛い姉ちゃんの仲間に取り戻されちまってな…：って
おいお前、今『お姉様』って言わなかったか？」

ユリス「そうよ…：私はリリルテーゼ・フェーラ・ヴァルレーフィンお姉様の妹なの…：
そんな事より、仲間に奪われたですって？」

盗賊親分「すいやせんした…何でもしますからお命だけは奪わないでください！」
ユリス「別に謝らなくていいわよ…だって、お姉様を仲間に渡してしまった以上…あ
んな達には死んでもらわないとねえ？」

盗賊親分「ひい…！」

ユリス「そう言うわけだから…役立たずのあんた達は皆…死になさい」

ユリスは盗賊親分の頭を掴み、闇の中へと葬った。倒れた盗賊達も闇に葬った

ユリス？「これが…私が肉体復活への手段の一つよ…せいぜい我を楽しませてくれよ
…契約者ユリスよ…」
テストメント

変わった声のユリスは高笑いをしながら何処かへと消えた。

チャプター6へ続く。

チャプター6：旅立ち

リルナ「何とか：西フェーネス港に帰って来れて良かったですね…」

リンネ「そうだね…」

ラデイ「リルナさんが無事で本当によかったよ…」

エンデ「そうだな」

アリア「今日はゆっくりと休んで、明日出航しましょう…」

ラデイ「そうだね…」

すると1人の男性が一行に話しかけた。

男性A「あつ：旅人さん達の仲間を盗賊団から取り戻せたんだって!？」

エンデ「おうよ！リルナは無事だったぜ！」

ディアナ「ああ：私の可愛いリルナ：よくぞ無事で…！」

女性A「本当に良かったわ：私達の宝物：リリルテーゼ姫様が無事で…！坊やも無事

でよかったですわ…」

アリア「今なんと…？」

老人「だってその少年は『オイラは一人前の騎士になるんだから、盗賊退治をする

んだ!』つて言いおったからのう…」

リンネ「そうなのラディくん？」

ラディ「…そう言えばそんな事を言つたなあ…」

老人「何はともあれ…旅の方が無事で良かったわい…姫様達もお疲れでしょう…今日は女王陛下も一緒にこの港で休んで行つてくだされ…」

店主「今日は宿代は無料にしておくよ!」

アリア「ありがとうございます…今日はお世話になります…」

店主「今日のご馳走を振る舞うから、旅の方以外の皆もじゃんじゃん食べてくれよ? 今日が宴だ!」

ラディ「わーい! いっぱい食べるぞー!」

リンネ「明日のためにいっぱい食べようっと!」

エンデ「俺も!」

ラディとリンネとエンデは宿に走つて行つた。

アリア「リリルテーゼ様つて…この国の皆に愛されてるんですね…」

リルナ「そうですね…私がこんなに愛されるのはお母様と亡きお父様の愛情の籠つた育て方がよかつたからでしょうね…」

アリア「そうですねですか…優しいご両親や民達や従者達から愛されて…リリルテーゼ

姫は幸せ者ですね……」

リルナ「そうでしょうね……この幸せを皆にお裾分けしてあげたいですね……」

アリア「リリルテーゼ姫……」

ラデイ「こんな長話してたらご馳走がなくなっちゃうよ！2人共……早く行こう？」

アリア「そうですね……行きましようか」

リルナ「はい……」

リルナの幸せそうな顔を見た2人は宿屋へ向かった。

☆

ラデイ「ねえエンデ、これはなに？」

エンデ「ああ……これはな……麻婆カレーって言ってな……カレーに麻婆豆腐をかけた食べ物なんだぜ」

アリア「辛い物なのですか……？」

エンデ「ああ、辛いぜ？だから……アリアとかリンネとかリルナとかディアナさんの様

な清楚な女子はこう言う辛い物はやめておいた方がいいぜ」

アリア「そうですか…」

すると…ラデイがマーボーカレーを小皿にとつて食べ始めた

アリア「らっつ…ラデイくん!?辛いからやめた方がいいですよ…!」

エンデ「ラデイ!」

ラデイは麻婆カレーを食べた瞬間に固まった。

アリア「だからやめましょうって言ったのに…!」

リンネ「わっ…私、店主さんからお水をもらつて来る!」

麻婆カレーを食べた瞬間に固まったラデイを見たリンネが大慌てコップのお水をもらいに行こうとした時、ラデイの口から思わぬ言葉が出た

ラデイ「…美味しい」

エンデ「今…何て言った…?」

ラデイ「何このカレー…すごく美味しい!」

店主「本当かい!?うちの麻婆カレーを美味しいって言ってくれたのは少年が初めてだ

よ…ありがとう!」

どうやら、ラデイは麻婆カレーが美味しかったらしい。

『美味しい』と言う言葉に店主が泣き出して、ラデイにお礼を言った

エンデ「…ラデイって辛い物平気なのか？」

ラデイ「そうだよ？小さい頃から辛い物平気だもん」

リンネ「すごいね…私なら辛すぎて失神しちゃうよ…」

アリア「辛いモノは私が探している巫女様も好きなんですよ。食べさせてあげたかったです…」

ラデイ「今度連れて来たら食べさせてあげよ？」

アリア「そうします」

店主「他の皆さんもいろいろと料理を食べて楽しんでください！」

リンネ「わーい！」

一行は料理を楽しみ、芸やリルナの演奏と歌を楽しみ…いろいろ楽しんだ

☆

ラデイ「はあく！楽しかったなあ〜！」

リンネ「そうだね！」

エンデ「こんなに楽しんだのは、リルナの誕生祭以来だな！」
リルナ「本当ですわ〜！」

アリア「明日の船の出航は：早朝ですわ〜」

ラディ「そうみたいだね。早く寝なきやだね」

ディアナ「じゃあ寝ましょうか」

リンネ「そうだね」

エンデ「んじゃあ、電気消すぜ」

リルナ「分かりました：皆さん、おやすみなさい」

消灯した一行は眠りに着いた。

☆

リルナ「……………」

皆が寝た頃、リルナは一人で夜空を見ていた。

エンデ「…眠れないのか？」

リルナ「はい…私に与えられた使命っていったい何なのかなって…」

エンデ「そうか…なありルナ、お前に言いたい事がある…」

リルナ「何でしょうか？」

エンデ「ごめんな…お前をひどい目に遭わせてしまつて…守るつて言つたのにな…」

リルナ「良いのですよ…エンデは何も悪くはありません…」

エンデ「え…？」

リルナ「全て…私が悪いんだから…」

エンデ「リルナ…？」

リルナ「フェーンネス王国の王女として…女神様の生まれ変わりとして…生まれた私が
悪いんですから…」

リルナは夜空を見ながら涙を流していた。すると、エンデはリルナを抱きしめた

リルナ「エンデ…？」

エンデ「大丈夫だリルナ…お前は何も悪くない」

リルナ「でもっ…！」

エンデ「だつたら、俺がリルナを守る」

リルナ「え…？」

エンデ「もうお前を危険な目には遭わせない…必ず…俺が守るから…」
リルナ「エンデ…」

エンデ「だから、俺や仲間を頼ってくれよな？」

リルナ「はい！」

二人は夜空を朝まで見ていた。

☆

エンデ「よしっ…皆、準備できたか？」

ラディ「オイラも故郷の大陸に帰る準備は出来たよ！」

リルナ「私も準備終わりましたよ」

アリア「私も完了です…」

エンデ「そうか。じゃあ出発しようぜ！」

ディアナ「エンデくん…リルナ…皆さん、気を付けてくださいいね？」

エンデ「ああ」

リルナ「行って来ますお母様」

エンデ達がディアナや港の人達に見送られながら船に乗ろうとすると、リンネが立ち止まっていた。

エンデ「リンネ…どうしたんだ？」

リンネ「あつ…なんでもないよ！」

ラデイ「どうしたの？顔色がおかしいよ？」

リンネ「えっ…そうかな？」

アリア「はい、ラデイくんの言う通り…顔色悪そうに見えますよ…大丈夫ですか？」

リンネ「大丈夫だよ…さあ早く行こうよ！」

リンネは船代を払い、東フリーゼ港行きの船に乗った。

リルナ「リンネさん…何か…思いつめていますよね…？」

アリア「何か辛い思いがあったのでしょうか？」

エンデ「…俺達も行こうぜ」

ラデイ「うん…」

一行はリンネを心配しながら船に乗った

チャプター7へ続く。

チャプター7：人魚の住む里

リルナ「寒いです…」

リンネ「そりゃあ潮風だもん…」

アリア「そうですね…2人は部屋に船内にいた方がいいのでは？」

リルナ「中に入りましょう…」

リンネ「私は後から行くね」

アリアはリルナを連れて船の部屋の中に戻った。

すれ違い様にエンデとラデイが潮風に当たりに来た。

エンデ「やっぱ…潮風は気持ちいいな…」

ラデイ「そうだね」

エンデとラデイが見る先にはリンネがいた。

ラデイ「リンネさんも潮風に当たりに来たの？」

リンネ「そうだよ」

エンデ「寒くないのか？」

リンネ「大丈夫だよ」

エンデ「そうか…とここで」

リンネ「どうしたの？」

ラデイ「君…さつき西フェーネス港で考え事してたよね？」

リンネ「そつ…そうだけど？それがどうしたの？」

エンデ「お前、なんか隠し事でもしてるのか？皆には言わねえから言ってみな？」

リンネ「実はね…私はこれからエンデ達が向かおうとしているフリーゼ帝国の女王様なの…まあ元だけどね」

なんと、リンネの正体はフリーゼ帝国の女王様なのだ。今は元女王らしい

ラデイ「え…リンネさんが…フリーゼ帝国の女王様!？」

エンデ「そうなのか…」

リンネ「私は王族だったけど、幼い頃に両親から虐待を受けて…8歳の誕生日の夜中に一人で逃げて来たんだ…」

エンデ「父さんが俺が9歳の頃に連れて来た傷だらけで倒れていた少女がリンネ…お前だったんだな…」

リンネ「でも…もう気にしてないよ」

ラデイ「そうなんだ。君は強いね」

リンネ「そうかな？あつそろそろ東フリーゼ港に着くみたいだからアリアさん達を呼

んで来るね！」

エンデ「分かった。じゃあ俺らは荷物の準備でもするか」

ラデイ「そうだね」

リンネがリルナとアリアを呼びに行くと同時に、エンデとラデイは上陸するために荷物の準備を進めた

☆

く北フリーゼ港く

ラデイ「無事に帰って来れてよかった…」

アリア「よかったですねラデイくん」

ラデイ「うん…長老には何も言わないでフェーンネス大陸へ行っちゃったからなあ…きつとすぐく叱られるだろうな…」

リンネ「ラデイさんの故郷の長老さんは厳しいの？」

ラデイ「うん…オイラの故郷の長老は特に若い男性には厳しいんだよね…」

エンデ「そりゃあ…黙って行っては叱られるだろ…」

ラディ「ひどいよ！早く行こうよ…オイラの故郷に！」

リルナ「そうですね」

アリア「じゃあ、私とはお別れですね」

リンネ「どうして？」

アリア「私は旅をしていただけで、巫女様を探して故郷に帰るのが目的でしたので…」

エンデ「そっか…アリア、また会う日まで…元気でな」

アリア「エンデさん達もご達者で…！」

港でアリアと別れた一行は人魚の里に向かって歩き出した

☆

く人魚の里く

リンネ「ここが人魚の里？」

リルナ「なんだか…水が綺麗ですね！」

エンデ「それに里の人達も賑やかでいい所だな！」

ラデイ「そうでしょ？あつ…よかつたらオイラが里案内してあげるよ」

エンデ「本当か!？」

ラデイ「うん！皆、付いて来て！」

ラデイは里案内をする事にして、一行は歩き出した

☆

リルナ「あのお…ラデイくん」

ラデイ「どうしたの？」

リンネ「このお饅頭は何？」

店員「これは人魚の里の名物『人魚饅頭』って言うのさ、餡子が入ってるけど甘さ控えめで瑞々しくてとても美味しいよ！旅の方、ご試食いかがですか？」

リンネ「じゃあ…いただきます…」

リンネは人魚饅頭を試食した

リンネ「美味しいね！」

店員「ありがとうございます！もしよろしければ買って行ってください！」

エンデ「じゃあ買う事にするよ。いくらだ？」

店員「500ガルドです」

エンデ達は500ガルドを出して、人魚饅頭を一箱買った

リルナ「とても美味しい名物をありがとうございます！買う時にはまた訪れますね」

店員「まいどありー！」

一行は人魚饅頭を買って、箱を開けてそれぞれ一つ手に取り食べてみた。

リルナ「美味しいですう！」

リンネ「甘さ控えめでおいしいね！」

エンデ「瑞々しくて甘さ控えめで美味しいな……！」

ラデイ「でしょでしょ!?!だってこの里の名物なんだから」

リンネ「さてと、他も見えて回ろうつか！」

エンデ「そうだな！」

人魚饅頭を食べた一行は他を見て回った。

新しい武器を買ったり防具を買ったり曲芸を楽しんだりした。

☆

ラデイ「皆、里めぐりはどうだった？」

エンデ「すげえ楽しかった！」

リルナ「私もです！」

ラデイ「よかった！」

一行は噴水でのんびり話していた。

すると、一人の男性が走って来た。

男性A「あっラデイ！いつの間に帰って来たのか？」

ラデイ「ただいま」

男性A「ただいま…じゃない！そんな事より聞いてくれラデイ！」

ラデイ「どうしたんだ？」

男性A「長老が…長老が病気で倒れたんだ！」

ラデイ「じっちゃんが!？」

そう…人魚の里の長老はラデイが里を出て数カ月もしないうちに病気で倒れてし

まっていたのだ

男性A「ああ：悪いがラディ！一緒に来てくれないか？後旅の方も！」
ラディ「分かった！皆、じっちゃんの家へ行こう！」
一行は男性Aと一緒に長老の家に向かった。

チャプター8へ続く。

チャプター 8：少年に与えられた使命

「長老の部屋」

ラデイ「じつちゃん！」

長老「おお…ラデイ…帰って来たか…」

ラデイ「お兄さんから聞いたよ…じつちゃんが病気で倒れたって…オイラ…と…つても心配したんだよ…！」

長老の容態を心配していたラデイは無事にホツとして泣き出した

長老「お前は変わらん…あの幼き時の泣き虫なお前のままだよな…」

リルナ「まあ…長老の身体を心配して泣き出すのは当たり前ですよ」

長老「おお、お主はフェーネス王国の王女リルナーゼ様ではありませぬか…貴殿達は本日はどの様なご用件で我が里にいらっしやられたのですかな？」

リルナ「私達はラディオスくんが里案内をしてくれると仰いましたので付いて来たまでですよ」

長老「そうですね……ご苦勞様でございます……」

リンネ「あつそう言えば……長老のお体を蝕んでいる病はなんなのですか？」

長老「儂を蝕んでいる病の名は『フルスイア』と言つてな……お医者様も『治す方法が分からない難病だ』と言つておりましたな……」

ラデイ「そんな……じつちゃんの病氣は治らないの……？」

治す術はないと言われた一行は氣を落とした。

長老「まあそう氣を落とさないでください……」

エンデ「何かあるのか？」

長老「実は……この病を治す方法を知つておりますのじゃ……」

リンネ「何をやるの？」

長老『ウエリハーブ』と言うハーブを使ったパナシアボトルを飲ませると治るらしいのです……」

リルナ「そのハーブは何処に生えてるのでしょうか？」

長老「人魚の里の東の方角にある海辺の洞窟の一番奥に生えており……海辺の洞窟の守り神とされて来たライトスライムと言う名の魔物が守つております……」

リンネ「要はそこに行つてハーブを採取して、パナシアボトルを作ればいいのですね？分かりました！私達にお任せください！」

長老「ありがとうございます…しかし、今日は早朝から船旅でここまで歩いて来て疲れている事でしょう…宿を手配させますので、今日はゆっくりお休みください」

リルナ「ありがとうございます…！」

長老「そうと決まれば、すぐに宿の手配に向かうんじや！」

男性A「分かりました長老！さあ旅の方とラデイ…我々に着いて来てください」

エンデ「おう！行こうぜ皆！」

リンネ「そうだね！」

ラデイ「オイラ…自分の部屋が良かったなあ…」

リンネ「まあいいじゃん…お兄さんが宿を手配してくれるんだし！」

リルナ「そうですよ…」

一行は男性Aと一緒に宿へ向かった。

☆

ラデイ「お兄さんごめんね…宿代奢ってもらっちゃって…」

男性A「いいんだよらお前は長老の孫みたいなものだしな…それに旅の方も一緒だからな…長老が動けない今は俺がしっかりしなきゃいけないんだし」

リルナ「ありがとうございます」

男性A「それにしても明日の朝は早朝で行かないとならないのでしょうか？」

リンネ「そうなんだよねー」

男性A「長老のためにご苦労様です…」

一行は宿に着いた。

店主「いらつしやいませ！4名様で240ガルドになります！」

男性A「はいよ！」

男性Aは240ガルドを出した。

店主「ありがとうございます！それではゆっくりとお休みくださいませ！」

男性A「それじゃ俺は帰るからな。ラデイ、明日は気を付けて行って来いよ？」

ラデイ「うん！」

男性と別れた一行は二階へと上がり、一夜を過ごした。

チャプター9へ続く。

チャプター9：海辺の洞窟

店主「ありがとうございます！またご利用くださいませ！」
一行は宿を出た。

エンデ「さてと…皆、準備はいいか？」

リルナ「はい！」

リンネ「私も準備できてるよ！」

エンデ「そうか…じゃあ長老の病気を治すための薬草を採取するために海辺の洞窟へ行くこうぜ！」

一行は海辺の洞窟へ出発するために人魚の里を出た

ラデイ「海辺の洞窟はね…海の近くにあつてね…とても綺麗なんだよ！」

リルナ「そうなのですか!？」

エンデ「確か…海辺はデートにおすすめのスポットと聞いたな」

リルナ「ではいつか、皆さんで行きませんか？」

エンデ「それいいな！」

リンネ「…」

エンデが達が楽しそうに話しながら歩く姿をリンネは黙ってみている

☆

「海辺の洞窟」

エンデ「ここが海の洞窟か…」

リンネ「そうみたいだね」

ラデイ「オイラ達が行くのは…この奥だよね？」

リルナ「海の近くの洞窟なのか知らないですけど…海の音が気持ちいいですね」

エンデ「そうだな…そんなじゃ、奥へ行こうぜ！」

一行は歩き出した。

リンネ「ねえティエル…お父様、お母様…共に過ごした兄弟や仲間の暗殺をやらないといけないのですか？」

リンネは何かを思い詰めていた…

☆

エンデ「結構歩いたな…」

リンネ「そうだね」

リルナ「まだ道があるのですよねきつと…」

一行は行き止まりに辿り着いてしまった。

リンネ「あれ…？行き止まりだよ？」

ラデイ「こう言う場所には水があるんだよね。ちよつと行つて来る」

ラデイは海の中に飛び込んだ。

その数分後に戻つて来た。

リルナ「どうでしたか？」

ラデイ「反対側に道があつたよ！」

エンデ「えっ…つて事は…」

ラデイ「泳ぐんだよ！」

リンネ「ええ!？」

エンデ「これも経験のうちだぜリンネ…」

ラデイ「つてなわけで：反対側の道へレッツゴー！」

一行は反対側の道へ行くために海の中に飛び込んだ。

数分後、無事に反対側の道へ辿り着いた。

エンデ「本当に出れたな」

ラデイ「でしょ？」

リンネ「出れたのはいいけど……」

リルナ「服や下着とかがびしょびしょで：透けて見えてますし……」

その瞬間、ラデイとエンデは顔を赤く染め、余所見した。

エンデ「まっ……まあ自然乾燥するしかねえだろっ……！」

リンネ「そうだね……」

一行はまた奥へ進んだ。

☆

リンネ「だいぶ奥まで進んだね」

ラデイ「そうだね」

リンネ「……ねえ……なんか、鳴き声がない？」

エンデ「そうか？」

3人は耳を澄ました。すると…『にやーん!』と鳴き声が聞こえた。どうやら罨に填つて抜け出せなくなり、助けてほしい様だ

ラデイ「何処から聞こえるのかな？」

リルナ「こつちからです…!」

一行は声が出た方に行ってみた。するとそこには白い毛並みと青い瞳を持つ猫みないな魔物がいた。

エンデ「大丈夫か!?すぐに助けてやるからな!」

リンネ「私も手伝うよ!」

ラデイ「オイラも!」

3人は罨を解いてあげた。

??「ありがと…おかげで助かったの…」

その魔物は罨を解いてもらってすぐに立ち上がった。

エンデ「お前…なんでこんな所にいるんだよ?」

??「あたしねえ…ここを通つて仲間達と一緒に引っ越ししてただけど…仲間とはぐれるわ…罨に填るで大変だったの…」

リンネ「(ハハ)に来る事自体間違つてるけどね…」

?? 「そう言えばそうと自己紹介するの忘れてたわ…あたしはフラン。チュリーと言う猫似の魔物のリーダーよ。あなた達は？」

エンデ 「俺はエンデ、こいつらは俺の仲間達だ」

ラデイ 「オイラはラデイオスって言うんだ。ラデイって呼んでね」

リルナ 「私はリルルテーゼと申します」

リンネ 「リンネだよ！よろしくね！」

フラン 「よろしく！」

ラデイ 「そう言えばフランちゃんはウエリハーブって言うハーブ知らない？」

フラン 「知ってるの。奥に生えてるの…でも、ライトスライムが護ってるからなかなか見れないの…」

エンデ 「やっぱりな…」

リルナ 「でも行くしかないですよね！」

ラデイ 「そうだね」

一行は奥へ進もうとした

フラン 「ねえあたしも一緒に付いて行ってもいい？」

リルナ 「いいですよ」

フラン 「ありがとうなの！」

リンネ「それじゃあ進もう！」

一行はフランと一緒に最深部へと進んだ。

チャプター10へ続く

チヤプター10：リンネの裏切り

エンデ「ここが最深部か？」

リルナ「そうみたいですわね」

ラデイ「肝心のウエリハープとそれを護ってるライトスライムは何処かな？」

海辺の洞窟に辿り着いた一行はウエリハープとライトスライムを探し始めた

ウエリハープは見つかつたが、ライトスライムは見つからなかつた

リルナ「いませんね……」

エンデ「そうみたいだな……」

リルナ「何処へ行ってしまったのでしょうか……？」

フラン「もしかするとライトスライムは存在してなかつたのかもしれないね」

ラデイ「どうなんだろうね？」

エンデ達はライトスライムを探すのに一生懸命だった

その事をチャンスだと思つたリンネはフリーゼ帝国の騎士団を呼び出して、リルナを背後から捕らえた

兵士A 「まさかこんな所にリルルテーゼ姫殿下が居られるとはなあ…」

兵士B 「こいつを連れて行けばティエル陛下も大喜びだ!」

リルナ 「放してくださいっ…!」

後ろで話し声が聞こえる事にエンデとラデイが気が付いた。

ラデイ 「何でフリーゼ帝国のやつらがいるの!？」

エンデ 「知るかよそんな事!」

ラデイとエンデは慌てていたが、何がおかしいと悟ったラデイはすぐに冷静になった
一瞬で推理出来たラデイは衝撃的な発言をする

ラデイ 「…あなたが彼らを呼んだのでしょうか? リンネ…いいえ、ネーランリ・フィレ・

セラオレールヒュリエ・フリーゼ様?」

そう…フリーゼ帝国の騎士団を呼んだのはリンネだった

エンデ 「なっ…何を言ってるんだよラデイ…」

リンネ 「ふふふっ…流石は見習い騎士なだけはあるね…! そうだよ…彼らは私が呼んだのよ! エンデ達を殺してリルナさんを手に入れるためにね!」

ラデイ 「じゃあ…ライトスライムがいないのってまさか…君達が殺したの?」

リンネ 「察しが良いのね…その通りよ! あの魔物はウエリハーブを手に入れるのに邪魔だったから私達が殺したのよ!」

エンデ「何故……こんな事をするんだ！」

リンネ「もちろん、人魚の里の長老の難病を治さないために決まってるでしょう？」
彼女が裏切った真の目的は、ウエリハーブを手に入れてリルナ同様に持ち帰る事だった。

エンデ「俺達をここに連れて来るために一緒に行動したって言うのか！」

リンネ「その通りよ……まあ、あなた達とはもう会う事はないけどね？」

ラデイ「それって……どういう事？」

リンネ「要は……あなた達はここで死ぬって事よ！さああなた達、エンデ達を殺してしまいなさい！」

兵士達は襲い掛かるが、何処からともなく現れた水の扇がリルナを捕えていた兵士2人を切り裂いた

リンネ「これは一体どこから……!？」

兵士C「全く分かりません……探した方がよろしいかと……!」

兵士達が慌てる中、一人の少年がリンネに話しかける。

？「ネーラ様……ここは我らにお任せください」

リンネ「そうね……任せるわよミオウ」

ミオウ「お任せを……」

リンネは兵士を5人引き連れて水の扇を放った人物を探しに行った。リンネ達がいなくなったのを確認した水の扇を放った人物が出て来た

エンデ「リンネ…」

??「そのあなた！あのネーラ女王の事で気にしてる場合などありませんわよ！先にここにいるフリーゼ帝国の騎士団を成敗しなければならなくてよ！」

ラデイ「きつ…君は何処から？」

??「話は後ですわ！あなた方の大切な人を守るのが先ですわ！」

ラデイ「そう…だね…やるよ皆！」

エンデ「ああ！」

ミオウ「やる気満々だな…我はフリーゼ帝国所属ギルド…月光の水青石へつきびかりのサファイア」第一幹部…ミオウ・プリセツト」

？「ミオウ…二つ名は殺戮天使ミオウ…」

ミオウ「ネーラ様と皇帝陛下のために、お前達を潰す！」

エンデ達は突如現れた少女と共にフリーゼ帝国の騎士団とミオウと戦う事にした

チャプター11へ続く。

チャプター 11 : ハーフエルフの少女

エンデ「魔神剣っ!!」

ミオウ「甘いよ…いでよ…風の矢! ウインドアロー!!」

風の矢はエンデの肩に突き刺さる

エンデ「いつてえ…」

ルルー「今…回復しますわ!」

しかし、3人に兵士が立ちほだかる

ラデイ「邪魔だよ! 瞬迅槍っ!」

? 「水舞扇っ!!」

兵士を倒した3人はエンデに駆け寄り、ルルーはエンデの傷を治してラデイは時間稼ぎを行った

エンデ「ルルー…治癒術使えたのか?」

ルルー「わたくしは幼い頃から使えますのよ?」

エンデ「すごいな」

ルルー「さあ…終わらせてしまいなさいな!」

傷が癒えたエンデは走り出しミオウに裂空斬を放ち、フリーゼ兵士達を斬り捨て、少女は自分の扇から水を編み出すように技を繰り出す

兵士A「どうして…フリーゼ大陸の名門貴族の令嬢たるあなた様がこいつらに協力するんですか…ルルー・アミフェ・レフォルモ様！」

ルルー「あなた方の…皇帝陛下のなさっている事が許せませんの…だからわたくしは、皇帝陛下を止めてくれる殿方を探しておりましたのよ！」

エンデ「それが…俺たちなのか？」

ルルー「そうですね。…さああなた達、命が惜しければ大人しく退きなさい！」

ルルーは兵士達の命がなくなるのが嫌なら退けと命じた

兵士B「しかしネーラ様には何とお伝えすればいいか…」

ルルー「それはわたくしからの伝言で『大量の魔物が出たから撤退した』とお伝えしますから大丈夫ですわ」

兵士A「そうでございますか…それなら安心して退けますね」

ミオウ「我は諦めない…必ずルルナさんを手に入れるから！」

フリーゼ帝国の兵士の残りミオウは撤退した

リルナ「エンデ…！」

エンデ「リルナが無事でよかったです…」

するとルルーはリルナとに近付いて跪いた

ルルー「リリルテーゼ姫殿下…この度は我が大陸の軍勢があなた様方を捕えようとしてしまい申し訳ございませんでした…彼らに代わってわたくしが罰をお受けいたしますわ…」

リルナはルルーに罰を与える事はなかった

リルナ「顔を上げてくださいルルーさん…」

ルルー「姫殿下…?」

リルナ「私はあなたの命を奪ったりはしません…」

ルルー「……」

エンデ「リルナがそう言ってるんだ…だからそう言う事にしておいてやれよ」

ラディ「そうだよ」

フラン「エンデとラディの言う通りよ」

ルルー「皆様…ありがとうございます」

ルルーは立ち上がる

リルナ「さてと…人魚族の長老の病気を治すパナシーアボトルを作らなきやですね

！」

ルルー「長老がどうかありませんでしたの?」

ラデイ「実はじつちやんが難病にかかちやったんだ…それでオイラ達はここに生えて
いる『ウエリハーブ』と言う名前のハーブを採りに来たところなんだ」

ルルー「長老が病に：!？」

エンデ「ああ…もう長老には時間がない…俺らは急いでいるんだ…悪いが、ルルーも
付いて来てくれるか？」

ルルー「わかりましたわ…わたくしも同行させてもらいますわ！」

一行はウエリハーブを採ると急いで海辺の洞窟を出た。

☆

く長老の家く

エンデ「なんとか帰って来れたな」

リルナ「そうですね」

ラデイ「じつちやん…大丈夫かなあ…」

一行が歩いていると、男性が待っていた

男性A「あつラデイ達、お帰り」

ラデイ「戻ったよ」

男性A「ちゃんとウエリハーブを採って来たみたいだな…よし、急いで長老の部屋に向かおう！ルルー様も付いて来てください！」

ルルー「分かりましたわ…早く案内してくださいまし！」

男性と一行は長老の部屋に向かった

☆

↳長老の部屋↳

男性A「長老…ラデイ達が帰って来ましたよ！」

ラデイ「じっちゃん！」

しかし、長老は寝たきりで答ええない

エンデ「長老…？」

ルルー「多分寝ているのでしよう…ちよつと触って確認してみますわ…」

ラデイ「うん…」

ルルーは長老の頬触れた

ラデイ「どう……?」

ルルー「残念ですが……わたくし達が……一足遅かったようですわ……」

ラデイ「そんなあ……じつちゃんは……死んじやったの……?」

ルルー「その様ですわ……」

一行が長老の家に着いた頃には、長老は息絶えていたのだった

エンデ「ウソだろっ……間に合わなかったのかっ……?」

男性A「長老っ……!!」

ルルー「ごめんなさいっ……わたくしがもつと早くここに来ていればっ……!!」

ラデイ「じつちゃんっ……!!」

長老の死に皆、涙を流した

しかし、リルナは涙を流さずに……そつと祈り始めた

リルナ「お願い……」

リルナが祈り始めると、リルナのペンダントから光の粒が出て来た……

それを見た瞬間にエンデは泣き止んでいた

エンデ「リルナ……」

リルナ「……長老を元気にしてあげて」

リルナが願い事を言うと光はペンダントから解き放たれ、長老を包んだ

今まで泣いていたラデイはその光に驚いた

光が消えた瞬間、長老は目を覚ました

ラデイ「じつちゃん！」

長老「儂は…生きておるのか…？」

男性A「そうですよ長老…あなたは生きていますよ…！」

長老「そうか…」

リルナ「長老、気が付きましたか？」

長老「あなた様が…儂の病気を治してくれたのですかな…？」

エンデ「そうだぜ。リルナが病気を治したんだぜ」

長老「左様でございますか…儂の…病気を治してくれてありがとうございますリルナ…」

リルナ「病気が治って…良かった…です…ね…」

リルナは倒れた

エンデ「リルナっ！」

長老「儂のために能力を使ったのでしような…今日は儂の家で泊まり、明日に出発するようにした方が様ですな…」

リルナ「そうですわね…今日は泊まらせてもらいますわ」

一行は長老の家に泊まる事にした

チャプター12へ続く

チャプター12：次の旅路へ

エンデ「…朝かあ。起きなくちやなあ…」

朝になり、ラデイが寝ている中…エンデは目を覚ました

エンデ「クロトマーガにいた頃はよくリンネに起こしてもらってたのに…もう俺一人で起きなきゃいけなくなったのかあ…」

エンデはゆっくり身体を起こして背伸びすると、リンネの事を考えた

エンデ「(リンネ…どうしてあいつらに…フリーゼ帝国に付いたんだ…どうして俺らを攻撃するようになったんだ…?)」

エンデがのんびり考えていると、リルナがドアを叩いた

リルナ「エンデ…起きてますか？」

エンデ「ああ起きてるぜ…。リルナはもう大丈夫なのか？」

リルナ「はい…一晩寝ただけで元気になりましたから…」

エンデ「まったく…俺や皆に心配かけんなよな？」

2人がラブラブトクしていると、ラデイが起きて来た

ラデイ「エンデとリルナは朝からラブラブトクですかあ？」

エンデ「バカっ…ちげえよ!…そんな事より集合か?」

リルナ「はい。ルルーさんが次の目的地のために話があるそうですよ」

エンデ「そうか…ほらラデイ、行くぞ」

ラデイ「うん!」

エンデとラデイは呼びに来たリルナと一緒にルルーの待つ場所へ向かった

☆

リルナ「ルルーさん、エンデ達を連れて来ましたよ」

ルルー「よく眠れましたわね?」

エンデ「ああ」

ルルー「それは良かったですわ。…では、次の目的地について話しますわ」

ラデイ「うん」

ルルーは持って来たフリーゼ大陸の地図を広げた。

ルルー「今、わたくし達がいる人魚の里はここですわね…」

ラデイ「そうだね」

ルルー「それで…人魚の里を西の方へ進むと森が見えますわね…？」

ラデイ「そうだね…この森はなんて言うの？」

ルルー「この森はハーフエルフの森と言って、森の奥に街があります…わたくしと同じハーフエルフが住んでいます…次の目的地はそこにしませんか？」

リルナ「その森に何か御用でもあるのですかルルーさん？」

ルルー「実はそこに、わたくしの家があります…だから、帰ろうかと思っていた所ですわ…」

エンデ「そうか…。じゃあ次の目的地はそこで決定だな！」

ルルー「そうですね。では早速向かいましょうか」

一行は長老の家を出た

☆

ラデイ「オイラ…今日でこことお別れなんだね…」

リルナ「まあそう気を落とさないで良いですよ」

ラデイ「そうだね…ありがとうリルナさん」

エンデ「じゃあ行こうぜ」

一行が街を出ようとすると、長老と男性Aが来た

長老「ラデイ…お主はエンデ殿達に付いて行くのじやな？」

ラデイ「うんじつちゃん。…里の皆とお別れは寂しいけど…オイラ、強くなるために

頑張るよ！」

長老「そうか…強くなるんじやぞラデイ…」

ラデイ「うん！」

長老「旅の方々…ラデイをよろしく頼みますぞ」

エンデ「ああ！」

ルルー「任せてくださいな」

男性A「ラデイ…いつでも帰って来ていいからな。里の皆と一緒に待つてるからな」

ラデイ「ありがとうお兄さん！…それじゃあ、皆…元気で！」

ラデイを仲間にしたエンデ達は次の目的地であるハーフェルフの森へ向かって歩き出した。

チャプター13へ続く

チャプター13：ハーフエルフの森

エンデ「ここから西にある森まで歩くんだよな…?」

ルルー「そうですね。ハーフエルフの森は森の奥にあるんですもの」

ラデイ「そうなんだ…人は簡単に森の奥に行けなさそう…」

ルルー「当たり前ですわ…我々と人は関わってはいけませんから…ただ、人魚族や女神や女神の使者とかはハーフエルフの連れがいれば入る事が可能なんですわ、まあ…連れがいなくても入る事は可能ですが」

リルナ「そうなんですか…ではあの伝説の天魔族はどうなんですか?」

ルルー「天魔族とは昔から仲が良かった様で…自由に出入りできますわ」

ラデイ「そうなんだ」

長らく歩いた一行は、森の入口に着いた

リルナ「ここが森の入口ですか…?」

ルルー「そうですね…では入りますわよ」

一行は森の中へ入って行った

☆

エンデ「森の中に鳥がいつぱいいるんだな」

ルルー「この森全体には虫がいませんのよ。だから鳥達は気軽に歌っていられるのですわ…後、カエルもいますわ」

ラデイ「カエルは何処にいるの？」

ルルー「森の奥より少し離れた湖にいますわ。そこでよく鳥達と一緒に歌っているのですわ…とてもいい響きですわよ？」

ラデイ「そうなんだ！一度聴いてみたいなあ！」

ルルー「今度、ぜひ聴かせてあげますわ！あつ…そろそろ着きますわよ」

一行は森の奥に着いた。しかし、何もなかった。

リルナ「…行き止まりですけど？」

ルルー「大丈夫ですわ…少し下がっていきいくださいな」

ルルーが前に出ると、一行は下がった。

ルルー「お父様…女神と女神の使者を連れて参りました…我らを森の中へと導いてくださいませ…」

すると、ルルーの前に扉が現れた。

フラン「これが…里へと繋がる扉なの？」

ルルー「そうですね。この扉を潜ると、ハーフエルフの森に着きますわ」

エンデ「なるほどな…さっそく中へ入ろうぜ！」

ラデイ「そうだね！」

一行は扉の中に入って行った。その姿を黒マントを羽織った二人が見ていた

黒マントA「あれがハーフエルフの森へと繋がる扉か…」

黒マントB「噂によればそうみたいだな…」

黒マントA「奴らと一緒にいたあの王女が扉から出て来て森から出る前に風呂敷を

セツトし、王女が出て来た瞬間に仕掛けを作動させるぞ…」

黒マントB「了解」

黒マントC「本当にうまく行くのか…？」

黒マントA「当然だ…王女を捕まえて引き渡せばフリーゼの研究者の女から大金がも

らえるからな…」

黒マントB「だから失敗は出来ないのだ」

黒マントC「本当にうまく行くと良いっすねえ…」

黒マント二人は湖に行つて地面に風呂敷を敷き、その瞬間に作動する仕掛けを作つ

た。一人の黒マントはただ見ていただけだった

☆

くハーフエルフの森く

エルフの女性「ああルルーお嬢様！お帰りなさいませ！」

ルルー「ただ今戻りましたわ」

エルフの男性「リリルテーゼ様も来てくださったんですか！」

リルナ「はい。ルルーさんについて来たのです」

エルフの女性「そうですか。ではルルー様の家まで案内させていただきますね」
ラデイ「助かるよ」

一行はルルーの家へと向かった

☆

「レフオルモ邸」

エルフの女性「ここがレフオルモ邸でございます」

エンデ達が連れて来られた場所…。

そう、ここがレフオルモ邸なのだ

リルナ「凄い豪邸ですね」

ラデイ「そうだね」

エンデ「俺の家よりも広いな」

皆は目を輝かせた。

ルルー「皆様、中に入りますわよ？」

エンデ「ああ今行く」

エルフの女性と豪邸の玄関で別れたエンデ達はルルーと一緒にレフオルモ邸の中に入って行った

☆

ルルー「これから客間へ案内いたしますわ。：リリー、そこにいるのでしょ？」

ロビーに着いた途端に、ルルーはリリーと言う名の少女を呼んだ

リリー「呼んだ？お姉様？」

リリーと言う少女はルルーをお姉様と呼んだ

姉妹なのだろうか…。

ルルー「これからお客様を客間へ案内するからあなたはクッキーを作って召使達に紅茶と一緒に持って来るように言っておいてくれるかしら？」

リリー「分かった！」

リリーが去って行くと、エンデは問いかけた

エンデ「ルルーとリリーさんって姉妹なのか？」

ルルー「そうですね、わたくしが姉でリリーが妹ですわ」

エンデ「そうなのか：俺は一人っ子だからちよつと羨ましいな」

リルナ「まあ！ルルーさんにも妹がいたのですね!？」

ルルー「ええ。わたくしの妹はとてもお利口なのですわ。リルナさんは？」

リルナ「私の妹は：何年か前に行方不明になつてしまつたんです…」

ルルー「そうなのですわ：なんかごめんなさいね…」

リルナ「あつ大丈夫ですよ？過ぎた事なので…」

皆がのんびり話をしてっていると、召使が客間から出て来た

召使「お嬢様、部屋の準備が整いました」

ルルー「そう…ありがとう。エンデ、どうぞ客間に」

エンデ「おう！」

リルナ「じゃあ私とリリーさんと小鳥とカエルの歌を聴きに行つて来ますね」

ラデイ「オイラはエルフのお兄さんと遊んで来るね！」

エンデ「おう！」

ルルー「では、入りましょう」

一行が別々に歩き始めた

リリーとリルナがハーフェルフの森の入口に向かって歩いて行くのをルルーに仕えていた召使が見ていた

召使「あのお方が…天使の力を持つ王女リルターゼ様か…」

そう確信して、レフォルモ邸の中庭に戻った

チャプター14へ続く

チャプター14：失踪したりルナ達

エンデ「なあ、俺に話があるんだろ？話ってなんだ？」

ルルー「あなた：黒いマントを羽織った男とやらはご存知ですか？」

エンデ「ああ知ってる…。そいつら：リルナを狙ってんだよ…」

ルルー「そうなんですの？：でしたら、わたくしも力になりますわ」

エンデ「いいの？とても危険かもしれねえのに…」

すると、ルルーは深くお辞儀をした。

ルルー「わたくしはあなた方のお力になりたいんですの！どうか、わたくしを仲間に

していただけませんか？」

使用人A「おつ：お嬢様!？」

エンデ「おおいおい：お前みたいなハーフエルフのお嬢様が頭下げて良いのか!？」

ルルー「これはわたくしの住む森を救うためのお願いですの：！お願いエンデ：わたくしをお仲間にしてくださいな：！」

エンデ「良いのか…?？」

使用人A「お嬢様は一度、力になろうと思つた方には精一杯努力するお方：もしよろ

しければエンデ様、お嬢様を仲間にしていただけませんか？」

エンデ「分かったルルー…お前を仲間にしてや」

エンデがルルーを仲間にしようとしたその瞬間、使用人Bが大急ぎで入って来た。

使用人B「大変ですお嬢様！」

ルルー「どうかしたんですの!？」

使用人B「買い物から帰って来たら姫殿下の杖の包袋が落ちてました！」

エンデはリルナの杖が入った包袋を受け取った。

エンデ「ウソだろ…リルナが…」

ルルー「リリー…」

使用人B「どうしましょうお嬢様…リリー様が…」

エンデ「くっそ…!リリーさんとリルナは俺が探しに行く…すぐに仲間を集めて行く…ルルー、お前は どうする？」

ルルー「わたくしも一緒に行きますわ…あなたはこの事をウイスタリアのヘンリー兄様に伝えてくださいな…動いてくださるはずですわ…!」

使用人A「はいお嬢様！」

ルルーは手紙を書き、使用人Aに渡した。

手紙にはこう書かれてあった：『拝啓、ウイスタリアの領主ヘンリー兄様…我が妹とリルルテーゼ姫殿下が失踪されました。大至急捜索を手伝ってください』と…。

ルルー「これをヘンリー兄様に渡してくださいな！」

使用人A「はいお嬢様！」

エンデ「ルルー、行こう…リリーさんとリルナを助けに！」

ルルー「はい！」

エンデとルルーはレフォルモ邸を出て、男性と一緒にいたラデイに事情を話し、フランも連れてリルナ達の捜索に向かった。

☆

フラン「くんくん…」

ルルー「どうですか？」

フラン「ダメだわ…2人の匂いが分からなくなってる…」

ルルー「殿下…」

ルルーは心配しているうちに蛙と小鳥の合唱が有名な湖に辿り着く。するとフラン

は蛙と小鳥に事情を聞いた。すると蛙と小鳥は耳寄りな情報を口にした：『湖で2人は黒尽くめの2人組に襲われて：神殿に連れ込まれた』と：。

エンデ「フラン、リルナとリリーさんが何処にいるか分かったか？」

フラン「ええ：落ち着いて聞いて？」

ラデイ「うん」

フラン「この蛙と小鳥達の情報によると：リルナ達はここで黒尽くめの2人組に襲われて捕らわれて、神殿に連れて行かれたみたいよ」

ルルー「神殿：まさか、アスタルテ神殿!？」

何と、リルナ達は黒マントの2人組に襲われて神殿に連れて行かれたそうだ：しかも、ルルーはその神殿を知っているらしい。

ラデイ「ご存知なの？」

ルルー「ええ：アスタルテ神殿はお父様がわたくしが産まれる前に風の王のウエンデイ様を祀るために建てられた神殿ですわ」

ラデイ「そうなんだ：大事な場所だから取り戻さなきゃね！」

エンデ「だな。よっしゃ：そうと決まれば早速アスタルテ神殿に出発だ！」

フラン「なの！」

蛙と小鳥達からナイスな情報を得た一行は、リルナ達を助けるためにアスタルテ神殿に向かった。

チャプター15へ続く

チヤプター15：風の王の神殿

「風の王が眠る神殿・アステルテ神殿」

エンデ「ここがアスタルテ神殿か……」

ルルー「そうですわ」

フラン「この奥にリルナちゃん達がいるのね……」

ラデイ「そうだね……急いで助けないと」

フラン「そうね……急いで助けましょう！」

エンデ「おうよ！……と言いたい所なんだが……」

フラン「どうしたの？」

ラデイ「もしかして……入口の開け方が分からないの？」

フラン「そうみたいですわ……」

エンデ「どうすりゃいいんだよ……」

アスタルテ神殿に着いた一行は中に入ろうとしたが扉の開け方が分からずに落ち込んだ。しかしルルーは前に出た。

ラデイ「ルルーさん……？何をするつもり？」

ルルー「見ていてくださいいな……。……風神王ウエンデイ様……。あなたの住処を荒らす者達を退治し妹達を助けるために参りました……。……どうか、神殿の扉を開いてください！」

ルルーは神殿の入口に向かって祈りの言葉を言うと、神殿の入口がゴゴゴゴ……。……と開いて行く。

ルルー「開きましたわよ」

エンデ「本当だな……。……」

ラデイ「早く中に入ろう！」

エンデ「おう……。……！待ってろよ2人共……。……！」

入口が開いた一行は中に入って階段を降りてすぐに神殿の扉は閉まった。

☆

フラン「中は結構暗いわね……。……」

エンデ「そうだな」

手下A「しつ……神殿の最深部です……巫女の双子の妹と一緒にいます……」

ルルー「そうですか？教えていただき感謝しますわ」

手下達から情報を聞き出したルルーは蹴りを入れて気絶させた。

フラン「さて……リルナちゃん達を助けに行くの！」

エンデ「ああ！」

ルルー「リリー……今、助けに行きますわ！」

手下達を倒した一行は神殿の最深部に向かった。

☆

リルナ「あなたは……私に何の用があるんですか……？」

黒マントの少女「あなた達をここに連れて来た理由……リリー様は人質にして、リルナ様は巫女の居場所を聞き出した後にあたしだけの天使姫様にする事だよ♪」

リリー「どうしてあなたの双子の姉の巫女を殺すの!？」

リリーの質問に黒マントの少女はクスクス……と笑った。

黒マントの少女「面白いご令嬢様ねリリー様は……♪巫女を殺す理由？そんなの簡単よ……あの子は光と闇の大精霊の力を受け継ぐの巫女よ？あたしもそうなのよ

……でも、巫女は2人も要らないでしょう？だから巫女を殺してあたしが本当の巫女になるのよ……そうすればあの子に仕えてる侍女ちゃんもあたしの部下になり、大精霊様はあたしを新たに巫女として迎えてくれるのよ！」

リルナ「あなたは一体……」

黒マント少女「そう言うわけよ♪リルナ様……早く居場所を吐いてあたしだけの天使姫様になりなさい？嫌なら……死になさい！」

少女が大剣でリルナの首を刎ねようとしたその時、扉がバンつ！と開いて……『やめろっ!!』と声が聞こえた。

リリー「お姉様！」

リルナ「エンデ！」

ルルー「リリー……助けに来ましたわ」

エンデ「リルナ、助けに来たぜ」

ラディ「そこまでだよ！」

リリーとリルナは一行の所に戻った。

すると少女達は笑った。

黒マント少女「そこまでしてリルナ様を庇うの……？まあいいわ……あんた達をあたしの部下が相手をしてくれるわ」

黒マント男達がエンデ達を囲む。

黒マント少女「さあやってしまいなさい！」

エンデ「くっ……！」

ラデイ「来るよ！」

ルルー「リリー下がっててくれますか？」

リリー「はい！」

リリーは後ろに下がった。

リルナ「行きますよ皆さんっ！」

神殿内部でエンデ一行と黒マント男達の戦が始まる。

チャプター16へ続く

チャプター16：救出と出会い

エンデ「魔神剣っ!!」

ルルー「水舞扇っ!!」

エンデに攻撃を仕掛けようとした黒マント1に魔神剣がヒットしたが、ルルーに攻撃しようとした黒マント3には水舞扇をガードで打ち消された。

ルルー「わたくしの水舞扇が……!」

黒マント3「死ねえ!」

黒マント3はルルーに斬りかかる。ルルーは近距離からのアクアエッジで弾く。

エンデ「大丈夫かルルー!」

ルルー「何とか大丈夫ですわ!それよりエンデは目の前の敵を!」

エンデ「ああ!……っ!」

エンデは攻撃を仕掛けたが、腹脇を斬られていて……血が滲み出していた。

ルルー「エンデっ……!リルナさん、エンデの傷を治しますから……お相手を!」

リルナ「ふええ……!」

ルルーはエンデの元に駆け寄り、リルナはレイピアを構えて黒マント3と交戦し始める。

黒マント1「止めだあ！」

エンデ「くそっ……！」

ルルー「させませんわ！水舞扇っ!!」

ラデイ「瞬迅槍っ!!」

黒マント1「何っ!?!」

黒マント2と4を倒したラデイと先ほどまで黒マント3と戦っていたルルーとリルナがエンデの元に駆け寄り、ラデイで黒マント1を相手して……ルルーはエンデの怪我を治すために唯一の水属性の治癒術を使った。

ルルー「聖魔の水の導き……メディテーション！」

ルルーが手を翳し、聖魔の水がエンデの傷を包むと……傷が消えた。

エンデ「サンキュー……ルルー」

ルルー「良くてよ?とところでラデイ?終わりました?」

ラデイ「終わったよ！」

エンデ「リルナ、そっちは稼げたか?」

リルナ「はい……!早く助けてくださいい！」

黒マント3と戦っていたリルナは傷を負いながらも、レイピアで攻撃を防いでいた。エンデは立ち上がり、剣を抜くと……黒マント3の背後に回り込み……。

エンデ「後は俺に任せておけ……喰らえっ！獅子戦孔っ!!」

黒マント3「ぐはっ！」

エンデは獅子戦孔を放ち、黒マント3を壁まで吹き飛ばした。

☆

エンデ「リルナ……、無事だったか？」

リルナ「私は何とか大丈夫です……」

エンデ「良かった……リリーさんも大丈夫そうだな」

リルー「リリーも怪我はありませんわ」

アリア「皆様が無事でよかったです……」

一行は喜んでいた。

しかし……黒マントの少女は何かを企んでいて、待機させていた黒マント魔道士に合図をして命令して……リルナを結界で覆う。

リルナ「きやあつ！」

一行「リルナ！」

フラン「リルナちゃん！」

黒マント少女「隙を見せたわねあなた達……」

エンデ「てめえ……！」

ルルー「今すぐに姫殿下を返しなさい！」

黒マント少女「無駄よ……この結界はあたしの部下の魔道士を倒さない限りは解けないわ……。さあて……。ごきげんよう皆さん」

ラディ「どうしよう！」

？「なら……。遠くからその魔道士を殺ればいいんすよね？」

黒マント少女「そうだけど……。つてえ？」

黒マントの少女が魔道士と一緒にリルナを連れて行こうとした時に声が聞こえて少女が気付くと、銃弾が魔道士の身体を貫き倒れ、リルナは結界から解き放たれた。

黒マント少女「何処にいるのよ！出て来なさい！」

？「何処かって？それは……。あなたの後ろにいるつすよ？」

黒マント少女が気付くと、声の正体が後ろにいた。

その少年は銃を突き付けていた。

？「さあ大人しく部下をこの神殿から退かせるつす……死にたくなければつすけどね」

黒マント少女「……………分かったわ」

黒マント少女と黒マント達はアスタルテ神殿から脱出した。

その直後、エンデは少年に問いかけた。

エンデ「お前は誰だ？」

？「ボクの事は領主様の馬車の中で話すつす……………」

ルルー「もしかして……………ヘンリー兄様が待っているのですの!？」

？「察しが良いつすねルルーお嬢は……………付いて来るつすよ」

一行は少年と一緒にヘンリーと言う名の領主の馬車が待つ神殿の入口に向かった。

チャプター17へ続く

チャプター17：帰還と旅立ち

少年「ところで、あんさん達は どうしてこの神殿に来たんっすか？」

エンデ「俺達は黒尽くめの男達に誘拐された仲間を助けに行くために来たんだ……でも、敵が多いわ……強いわで大変だったぜ……」

少年「それがそのお嬢さん達なわけっすね？」

ルルー「そうですね……それにここから最深部まで長かったですし、疲れましたわ」
ラデイ「それ……オイラも……」

少年「大変だったっすねえ……それはそうと、そろそろ入り口に着くっすよ」

長らく歩き、一行がアスタルテ神殿の入口に着くと……そこには貴族の青年とルルーの召使と思われる付き人が馬車と一緒に待っていた。

召使「お嬢様方……！無事だったのですか！」

ルルー「ええ！リリーもエンデ達も怪我はありませんわ！」

召使「旅の方もルルーお嬢様や妹様にも怪我がなくて本当に良かったです！」

少年「ヘンリー様、ただいま戻りましたっす！」

ヘンリー「お帰り。街に戻ったらお金を振り込んでおくよ」

少年「了解したつす！報酬が楽しみつすう〜！」

ヘンリー「さてと……僕の故郷へ行こうか。」

ルルー「ですが、その前にリリーとわたくしの家臣を送り届けないといけませんわ」
少年「そうでしたつすね……ささ、あんさん達もどうぞつす！」

フラン「良いの？」

ヘンリー「構わないよ。君達を僕の故郷に案内するつもりだったしね」

リルナ「では……お言葉に甘えて……」

一行を乗せた馬車はハーフェルフの森に向かった。

☆

ラデイ「ヘンリー様の馬車って中が広いんだね……」

ルルー「そうでしようラデイ？兄様の馬車ですよ？広くて綺麗で当然ですわ」

リリー「お姉様だったら……兄様の事になるとすぐこうなんだから……」

リリーに苦笑いされた瞬間、ルルーは顔を赤くして……「わっ……わたくしは別に

……お兄様の素晴らしさを言ったわけではありませんわ……！勘違いしないでくださ

「いまし！」とツンデレ気味に言った。

「どうやら……ルルーは隠れツンデレらしい。」

少年「あつ……自己紹介するの忘れてたつ……ボクはプレファ……プレファシオ・ラーチエルつす！よろしくつす……で、その隣がヘンリー・ローゼルハイト様つす」

ヘンリー「よろしくね。さっきはリリーを助けてくれてありがとう」

エンデ「お安い御用ですよ！後、俺はエンデです……よろしく。」

ラディ「ラディオス・ノスタルジアです！よろしくお願いします」

リルナ「リリルテーゼと言います……リルナと呼んでくださいね」

プレファ「よろしくつす！」

皆はヘンリー達と話すと、リリーがエンデに話しかけた。

リリー「エンデさん……お願いがあるのですが……」

エンデ「どうした？」

リリー「ルルーお姉様を……よろしく頼みます……」

エンデ「どうした？いきなり？」

リリー「お姉様は友達が少ないの……ハーフエルフだから……だから、エンデさ

ん達にお姉様の友達になる様にお願ひするしかないの」

エンデ「そうか……」

リリー「だからその……エンデさん、ルルーお姉様を連れて行つてくれませんか？」

エンデ「もちろんだ」

リリー「ありがとうございますエンデさん」

ルルー「ほらほらリリー、森に着きましたよ。降りる支度は出来てますの？」

リリー「ええお姉様！それじゃあエンデさん……またいつかお屋敷に遊びに来てくだ

さいね……。さあ行きましょう」

召使「はい妹様……では旅の方、道中お気をつけて」

リリー「お姉様、いつか……帰って来てくださいね」

ルルー「もちろんですわ。この世界が平和になったら必ず帰って来ますわ」

森に着いた馬車はリリーとルルーの召使を降ろして、ヘンリーの故郷に向かった。

チャプター18に続く

チャプター18：音楽の街・ウイスタリア

ヘンリー「ハーフエルフの森は結構良かったでしょ？」

リルナ「はい！自然豊かで小鳥と蛙の合唱も楽しかったです！」

ルルー「楽しんで頂けて嬉しいですわ♪」

ヘンリー「良かったねルルー」

ルルー「ええ……！」

エンデ「ルルーの従兄のお兄さんが優しい人で良かったな」

リルナ「ですねえ……」

プレファはリルナの手を握った。

プレファ「お姫さん！お名前は？」

リルナ「えつとお……リリルテーゼです……」

プレファ「ほうほう……リリルテーゼさんと言うんすかあ……可愛いお名前のお姫さ

んつすねえ……」

リルナ「あつ……ありがとうございます……」

プレファ「胸も大きいし美人ちゃんつすねえ……街に着いたらボクとお茶でも……」

ベシッ!!

プレファ「何するんすかルルーお嬢!」

ルルー「無礼はやめなさい!このお方はフェーネス国の王女様ですよ!王女様をナ
ンパしてどうする気ですの!?!」

プレファ「ふえーい…」

ルルー「ごめんなさいなエンデ…彼は極度の女好きですの…リリルテーゼ様もご
無礼をお許してください…」

エンデ「気にしないでいいぜ…なありルナ?」

リルナ「はい…」

ルルー「良かったですわ…」

馬車の操縦士「ヘンリーお坊ちやま、そろそろウイスタリアに着きますよ」

ヘンリー「ありがとう。皆、ウイスタリアに着くけど荷物持った?」

ラディ「来てますよ」

リルナ「私も出来ておりますヘンリー様」

ヘンリー「そっか。着いたら案内するね」

一行を乗せた馬車はウイスタリアに到着した。

☆

音と踊りと賑わいの途絶えない街・ウイスタリア

わいわいがやがや……

ウイスタリアにやって来た一行は賑やかな街を見て驚いていた。

エンデ「すげえ街だな……」

ルルー「そうでしょう？音楽が大好きな兄様の街ですもの♪賑やかで当然ですわ」

ラデイ「すごいなあ……」

リルナ「エンデ！ピエロがいますよ！」

エンデ「本当だな……風船を配ってるようだな」

リルナ「もらって来ますね！」

リルナはピエロの元に行った。

リルナ「ピエロさん！風船をください！」

ピエロ「はいはい♪お嬢ちゃんは何処から来たのかな？」

リルナ「遠い所から来たのです！」

ピエロ「そっか。帰る時は気を付けて帰ってね」

リルナは風船を受け取り、エンデ達の元に戻って来た。

エンデ「リルナ、赤のハートの風船をもらったのか…良かったな」

リルナ「はい！大事にしなきゃ…」

グウ…

誰かのお腹が鳴る音がした。

エンデ「誰だ？」

フラン「フランじゃないの…」

ラデイ「オイラでもないよ」

プレファ「ボクやヘンリー様でもないっすよ…」

ヘンリー「じゃあ誰なの？」

ルルー「ごめんなさい…わたくしですわ…」

リルナ「ルルーさんだったのですね」

エンデ「じゃあ何か食べに行こうぜ」

フラン「なの！ルーちゃんも行こう？」

ルルー「分かりましたわ…」

一行は一度解散し、エンデとラデイとルルーはご飯を食べに…リルナは街の観光に

行き…ヘンリーはプレファを連れて報酬を渡しに行った。

チャプター19に続く

チヤプター19：少年の事情

エンデ「何食べる？」

ラデイ「オイラはオムそばにしようかな……ルルーは？」

ルルー「わたくしは……海鮮丼をいただきますわ」

エンデ「俺はお茶漬けにしようかな」

エンデ達は店員にそれぞれの食べる物を注文した。

しばらく話していると、注文した品物が来た。

エンデ達は食べる。

ラデイ「卵のふんわり食感に焼きそばの美味しさ……癖になるよお……」

ルルー「美味しいのです？オムそばは」

ラデイ「うん！ルルーも食べてみて？」

ルルー「では……」

ルルーはオムそばを口にした。

ラデイ「どう？美味しいでしょ？」

ルルー「こっ……この様な美味しい物を食べたのは初めてですわ……！」

ラディ「気に入ったみたいだね」

エンデ「だな」

ワイワイ話しながらもエンデ達は食べ終わり、店を出た。

☆

エンデ達はヘンリーとプレファと合流した。

プレファ「いやあくし仕事をするのはいいつすねえ！」

エンデ「そう言えば、お前は傭兵だったな」

プレファ「むむつ……忘れてもらつちやあ困るつすよ！」

フラン「そう言えば、リルナちゃんは？」

ヘンリー「彼女なら、噴水にいるけど……」

一行が噴水広場に着いて見ると、多くの人々が集まっていた。

その視線の先には、リルナが手持ちのハープを弾きながら歌っていて……1人の踊り

子が得意な舞を踊っていた。

男性A 「なあ……あの子ってフェーネス王国の姫様じゃない？」

男性B 「何でこんな所にいるんだ？」

女性A 「多分……観光しに来たんだと思うわ……」

女性B 「それにしても……可愛らしいお方ね」

リルナが歌い……踊り子が踊る中、街の人達はひそひそと話していた。

エンデ 「なあルルー……？」

ルルー 「何ですか？」

エンデ 「あの舞を踊ってるやつって誰なんだ？」

ルルー 「知りませんわ……初めて見る顔ですし……」

ラディ 「オイラも初めて知ったよ……」

リルナが歌い終わり、踊り子が踊り終わると一斉に歓声と拍手が起こった。

2人は笑顔になった。

エンデ 「リルナ……もしかして、あの歌を歌ったのか？」

リルナ 「そうです……懐かしの歌をエンデに聞かせてあげようと思って……」

エンデ 「大丈夫だリルナ……聴こえたよ……久し振りに聴けて良かったよ」

リルナ 「ありがとうございます……」

2人は見つめ合い、笑った。

プレファ「いやはやあ……………お二人は仲がいいつすねえ……………」

ヘンリー「そうだね」

プレファ「それはそうと……………ルルーさん達とイチャイチャしてるお二人に来てほしい場所があるんすよ！付いて来るつすよ！」

エンデ「行こうぜ、リルナ」

リルナ「はい！」

一行はプレファとヘンリーと共にとある場所に向かった。

☆

ルルー「あのお……………兄様？ここは？」

ヘンリー「ここはプレファの実家だよ」

ラデイ「そうなんだ」

プレファ「ボクは実家に帰って来るのがすつごい久し振りなんすよ……………ヘンリー様

の傭兵生活を始めてから……………」

リルナ「プレファくん？」

ヘンリー「まあ上がってよ」

エンデ「ああ」

一行はプレファの家に上がる。

中は埃が充満していた。

プレファ「埃だらけつすね……………まったく……………姉さんつてば、一度くらい帰つて来て掃除してほしいものつすよ……………」

プレファは床を雑巾掛けし始めた。

ルルー「兄様、わたくし達も手伝いたいしましょう」

ヘンリー「そうだね」

リルナ「私も手伝います！」

ルルーは掃き掃除を……………ヘンリーはテーブルの水拭きを……………リルナはシンク等の掃除を分担してプレファの掃除の手伝いを始めた。

エンデ「俺らは適当に寛ぐかラデイ」

ラデイ「うん」

ラデイは窓に置かれてある一つの写真を見つけた。

エンデもそれに気づく。

エンデ「これは……写真か？」

ラデイ「そうだね……」

その写真をよく見ると、プレファアが映っていた。

ラデイ「ねえエンデ……この写真に映ってるのってプレファアの家族かな？」

エンデ「俺もそんな気がする……」

プレファア「そうっすよ。その写真はボクが小さい頃に父さんが撮ってくれた家族写真っすよ」

リルナ「そうなのですか？」

ヘンリー「そうだよ。彼の父親のファルレは画家で……母親プリマはウイスタリアの歌姫だったんだよ……でも、2人は流行り病で死んでしまっただけ……残されたプレファアと彼の双子の姉のプレフィはプリマの兄のプリムに引き取られたんだけど、彼も事故で死んでしまっただけ……彼は僕の傭兵になり、姉の方は情報屋をやりながらの踊り子の道を進んだのさ」

ルルー「まさか……プレファアに悲しい過去があったなんて……」

プレファア「そんな……同情しなくていいっすよルルーお嬢。ボクは今の生活楽しいっすよ」

ラデイ「それなら良かった」

プレファ「ヘンリー様達が手伝ってくれたおかげでボクの家が綺麗になったっす！休憩でボクがコーヒーを淹れるっすよ。皆さんは座って待っててほしいっす」

エンデ「ああ。」

一行はプレファシオの家で休憩を取る事にした。

チャプター20へ続く

チャプター20：湖畔に眠る遺跡

エンデ「まさか……プレファアがコーヒーを淹れてくれるなんて思ってもいなかったな」

ルルー「そうですわね……意外でしたわ」

ヘンリー「でしょ？彼が美味しいコーヒーを淹れられるのはプリムのお蔭なんだよ？プリムとプリムの実家は喫茶店でね。プリムが彼に美味しいコーヒーの淹れ方を教えていたんだよ」

エンデ「ほお……つて、ラデイはジュースでリルナはココアなのか？」

ラデイ「だってオイラ……コーヒー苦手だし……」

リルナ「私もコーヒー飲めないのです。だからココアにしたんです」

ルルー「あらまあ」

プレファア「出来たつすよ！熱いから気を付けて飲むつすよ」

出来立てのコーヒーをエンデとルルーとヘンリーの前に置き、ココアをリルナの前に置いて……ジュースをラデイの前に置いたプレファアは椅子に座ってコーヒーを飲み始める。

ヘンリー「ルルー？ミルク入れる？」

ルルー「ありがとうございます兄様。ミルクを取ってください」

ヘンリー「いいのさ。ところでエンデくんは何も入れないの？」

エンデ「俺はブラツクの方が好きだからな」

ラデイ「意外だなあ」

エンデ「そう言えばプレファ……聞きたい事があるんだが」

プレファ「どうしたつすか？」

リルナ「災厄の種子ってご存知ですか？」

プレファ「知ってるつす……何か、その種子の一部なんだろうけど、コスモス湖畔

の方に落ちて行つたつす」

ラデイ「そうか……そこに洞窟とかない？」

プレファ「湖畔の何処かに洞窟の入り口があるつす。それがどうしたんすか？」

ルルー「わたくし達は世界の異変に災厄の種子が関わっているという事を聞いて、それを調査しに行くところですよ……災厄の種子に触れて心を支配された魔物や人々を助けるために……」

プレファ「そうだったんすか？ならボクも一緒に行くつす！」

リルナ「来てくれるんですか……？」

プレファ「まあね………傭兵として役に立ちたいっす！連れて行ってくれないっすか？」

エンデ「ああ行きたいなら付いて来い。別に付いて来なくてもいいがな」

プレファ「酷いっす！ボクは絶対に行くっす！」

ルルー「分かりましたわ………お好きにしなさいな」

ヘンリー「じゃあ僕はここで留守番だね」

プレファ「そうっすね。ヘンリー様は御屋敷に戻っていてほしいっす」

ヘンリー「分かった」

各地の異変の事と、災厄の種子という名の災いの事も話した。

一行はプレファを仲間に加え、コスモス湖畔へと向かった。

☆

エンデ「まさか本当について来るとはな………」

ラデイ「思ってもいなかったよ………」

異変が起きていると思われる湖畔の洞窟へ向かう一行の後を、プレファが付いて来た。

プレファ「当たり前っすよ！ボクは、湖畔の湖にある洞窟の異変を解くためについて行くって決めたんっすよ！」

ルルー「はいはい。分かりましたわ。」

エンデ「リルナ、大丈夫か？」

リルナ「大丈夫です。」

エンデ「そうか。」

プレファはやる気だった。

それを気にせずにルルーはスルーしてエンデはちゃっかりリルナの心配をしていた。

プレファ「皆、酷いっすよおおおおおお！もう良いっす！ボクは帰るっす

！」

皆に無視されたプレファは何故かいじけた。

それに気付いたリルナはそっとプレファを慰めた。

リルナ「まあまあプレファさん：エンデ達は早く異変を解決したいだけですから、そんなにいじけなくて大丈夫ですよ。」

プレファ「本当っすか？」

リルナ「本当ですよ。」

すると、ラディが湖畔を見つけた。

ラデイ「皆、湖畔に着いたよ！」

リルナ「風が気持ち良いですね……………」

ルルー「ええ本当に風が気持ちいいですわね。」

プレファ「ここは風が気持ちいいだけじゃないっすよ！」

ラデイ「そうなの？」

プレファ「そうっすよ。何せここは、夕日と朝日が綺麗という事で超有名なスポットの一つなんすよ！」

ルルー「そうなんですのね。何処で覚えたんですの？」

プレファ「自分で調べたっす。」

エンデ「凄いな！」

ラデイ「君の力を信用してなかったオイラ達が悪かったよ。」

プレファ「いや、気にしなくて良いっすよ。」

皆が話していると、フランが突然掘った。

ラデイが覗くと、洞窟だった。

フラン「皆、洞窟があったの！」

ラデイ「こんなにも早く見つかるなんて思ってもいなかったよ。」

エンデ「でかしたぞフラン。」

そう言うとエンデはフランの頭を撫でた。

プレファ「それじゃあ、行くつすよ！洞窟の異変を解決しに！」
一行は洞窟の中へ歩き出した。

チャプター21へ続く。

チャプター 2 1 : 石版と謎の女性と幼き少女

く湖畔の洞窟く

エンデ「中は、暗いな」

ラディ「じめじめしてて寒い、流石洞窟だね」

プレファ「お化けとかいたりして…」

プレファが『お化け』と言った瞬間に、リルナはエンデの腕にしがみ付いた
よく見ると、エンデの腕に若干リルナのふくよかな胸が当たっている

エンデ「お前つ…俺にしがみ付くなよ…!」

リルナ「だってえ…怖いんですよ…!」

エンデ「はあ…プレファ、リルナはお化けとか暗い所とかが大の苦手なんだからあんまりからかうなよ?」

プレファ「そうなんすか…リルナさん、すまなかつたつす」

そう、リルナは怖い物とか暗い所が大の苦手なのである

ルルー「皆さん、何かありますわ」

ラデイ「本当だ…何だろうこれ…」

一行は不思議な石版を見つけた。

エンデ「何だ…？この石版…」

リルナ「不思議な石版ですね」

ラデイ「あれ？よく見ると…女神様の周りに使いの人達と小人のサイズの妖精達とがいる！」

ルルー「本当ですわね」

石版には火…水…風…土…光…闇の小人のサイズの妖精と6人の選ばれし者と女神が映っていた

石版から何かを感じ取ったリルナは石版を詠み始めた

リルナが詠み終わると、石版が二つに割れて扉が出来た事に一行は驚いた

ラデイ「石版が割れた…!？」

プレファ「姫さん…何したんすか？」

リルナ「私は石版を詠んだだけですよ？…なのに石版が割れて扉が現れるなんて驚きました…」

エンデ「いろんな意味ですげえな…」

プレファ「さあ、先へ進つすよ」

一行はまた先へ進んだ

☆

エンデ「やっぱ、リルナは天使なだけであって石版も詠める力も持つてるんだな」

ルルー「確かにそうですわね」

ラデイ「一体、何の詠みなんだろうね？女神の伝承だとしても…まだ詠まれてない一節かもしれないし…」

すると、女性の声が聞こえて来た。

？「誰かいるの？」

エンデ達が振り向くと、青い髪を一つに纏めて橙色の瞳を持ち、踊り子が着そうな服を着たとても美しい女性が現れた。察するにしてどうやら女性はトレジャーハンターらしい

？「あなた達は誰？と言うよりここで何しているの？ちなみに…あたしはこの洞窟に超スゴいお宝があるって言うから探してるのよ、邪魔しないのなら…危害を加えるつもりはないわ♪」

エンデ「お前ってまさか、巷で有名のトレジャーハンター…!？」

地面が近くなったところでリルナを先に降ろし、エンデは着地して双剣を鞘に納めた

エンデ「リルナ…大丈夫か？」

リルナ「大丈夫ですよ」

エンデ「良かった…」

すると、一緒に落ちた女性が起き上がった。

？「あなた、良く無事でいられるわね？普通の人間だったら怪我をしてるか死んでるわ」

エンデ「あのなあ…俺はエンデって言うちゃんとした名前があるんだよ！」

リルナ「私はリリルターゼと言います」

？「あらそうなの？あたしはメリー、メリー・フラットコーテッドよ。ところでエンデ、リルナちゃん。この洞窟は仕掛けが多いから気を付けなさいよ？」

エンデ「何故お前が仕切るんだ？」

メリー「だってあたし、トレジャーハンターだもの。お宝があったら頂いて行くのがあたしの主義なの」

メリーは自慢げに言った

エンデ「早く皆と合流したい…」

崖の下に落ちたのはエンデとリルナと女性の3人だけで、早く…仲間の元へ戻りたい…と、エンデは一人でそう呟いた

3人が進もうとすると、また石版があつた

メリー「何で石版があるのかしら…あたしは早くお宝を見つけないの…」

エンデ「石版か…石版と言えばリルナの番だな」

メリー「リルナちゃんって石版詠めるの!？」

リルナ「はい…石版を詠みますね」

リルナは石版を詠む…。

詠み終わった瞬間、石版は砕けた

エンデ「な?リルナはスゲエだろ?」

メリー「すごいわこの子…本当に石版を詠んだ…何者なのリルナちゃんは…」

3人は先へ進んだ

☆

バラバラになったメンバー達は、謎を次々と解いて無事合流したと同時にメリーはいなくなつた

エンデ「ここが最深部か？」

ラディ「そうみたいだね…随分広いとこだね」

プレファ「とりあえず、道中にあつた石版と関連性のある…それが、同じ壁画を探すつすよ！」

ルルー「お待ちになつて…誰かがいますわ」

リルナ「ホントですね…こんなところに独りぼっちで…迷子でしょうか…？」

後ろ向きで座り込んで、何かと楽しそうにお喋りしていたが、エンデ達に気付いて立ち上がった

？「お兄さん達、だあれ？」

鮮やかな亜麻色の髪を二つに結わき青色の瞳を持っていて、黒いフードが着いていてピンクの大きなリボンがトレードマークの黒いワンピースを身に付けた幼い少女がいた。背中には誰かから貰つたであろうと思わしきクマのぬいぐるみを背負っている

エンデ「君は？」

？「メアリイはメアリイって言うんだ！よろしくねエンデお兄ちゃん！」

この少女の名前はメアリイと言う

どうやらメアリイはエンデの事を知っている様だ

エンデ「どうして俺の事を知っているんだ？」

メアリイ「ここに来る前にミオウ兄ちゃんとネーラ様から聞いたんだ」

エンデ「そうなのか（ミオウってこの間俺達が闘った天使の少年か…）」

リルナ「そう言えば、メアリイちゃんは どうしてここにいますか？」

メアリイ「今日は任務があつてここに来たの」

ラデイ「へえ、偉いじゃん」

ルルー「あなたのその任務ってなんですか？」

メアリイ「一つはメリーと言う女性に会う事…もう一つは…」

すると、メアリイは衝撃的な答えを言った

メアリイ「リルターゼ姫を連れて行くためなんだ…」

リルナ「…!!」

エンデ「くそっ…!!リルナ、俺から離れるなよ!」

☆

メアリイ「灼熱の玉よ、汝を焦がせ…ファイアーボール!!」

エンデ「風の守り神よ…我が力となり、敵を切り裂け!ウインドカッター!!」

巨大化した先ほどのクマのぬいぐるみⅡちやちや丸に乗ったメアリーのファイアーボールとエンデのウインドカッターが同時に発動してぶつかり合った

メアリー「エンデお兄ちゃんも魔術を使えるんだ…すごいね！」

エンデ「お前もすごいぞ！」

メアリー「でも…これは耐えられるかな？クマさんパンチ!!」

メアリーを乗せたちやちや丸がクマさんパンチを発動した瞬間を狙ったエンデはジャンプした

エンデ「ルルー！今だ！」

ルルー「氷柱よ…我が刃となれ！アイスニードル！」

エンデが合図を出すと、ルルーが詠唱したアイスニードルを発動した

ルルー「マーシーワルツ！」

ラディ「瞬迅槍！」

ルルーは杖から音符が描かれた攻撃を繰り出し、ラディは槍で突く

エンデ「こいつで終わりだ！裂空斬っ!!」

メアリー「きや…！」

エンデは縦に回転しながら双剣を振り、ちやちや丸とメアリーを切り刻んだ

先ほどまで巨大化していたちやちや丸は元のサイズに戻り、メアリーは尻餅をついた

メアリイ「強いねエンデお兄ちゃん達：でも次こそは負けないよ！」
すぐに立ち上がり：ちやちや丸を抱っこしたまま、魔法陣を展開したメアリイは魔法陣の中に姿を消した

エンデ「他にも仲間がいるかもしれないな」

プレファ「そうっすね：フリーゼ帝国の奴ら：恐るべしっす」

ルルー「いつ：襲って来るか分かりません、今後とも用心しましょう」

ラデイ「そうだね、神出鬼没だもんね」

リルナ「さてと、フェンリルへ戻りましょうか」

エンデ「だな：ヘンリーさんも待ってるしな」

一行はフェンリルへ戻る事にした

チャプター22へ続く

チャプター 2 2 : 少年の旅立ち

エンデ「これで二つ目の異変を解決したな。」

リルナ「そうですね。」

プレファ「謎を解いたり仲間と逸れたり……いろいろあったね。」

フラン「疲れたの……」

ルルー「本当ですわ、今日のはのんびり休みましょう。」

ラディ「そうだね。」

一行はフェンリルの中に入った。

☆

街の人 A 「なっ……何なんだこの少女は!？」

街の人 B 「分からん……急に襲って来たぞ!？」

一行が中に入ると、噴水の方が騒がしかった。辺りを見ると、血が付いていた。

エンデ「何だ………?」

ラディ「騒がしいね。」

ルルー「何が起きているんでしょう……」

プレファ「何だろうね……」

すると、足音が聞こえた。

歩いて来たのは、アステルテ神殿で戦った黒ローブの少女だった。

黒ローブ少女「あはは………また会ったねお兄さん達と……あたしだけの
エンジェルプリンセス
リルナ様。」

黒ローブの少女は笑っていた。

エンデ「お前………誰なんだよ！人を平気で傷つけ………それにリルナの名前を知ってるって………一体何者なんだよ！だいたい、何が目的なんだ！答えろ！」

黒ローブ少女「あたしが何者なのかは今度会った時に教えてあげる。それより……リルナ様が次の天使世界の女神に選ばれたんだって？」

リルナ「そうですよ………それが何です？」

黒ローブ少女「そうなんだ………でも、女神様何人も要らない………だから」

リルナ「えっ？」

黒ローブ少女「あたしが天使女神様を人形ドールとして一生可愛がってあげるから………リルナ様はここで死んでっ！」

そう言うのと剣を抜き、襲いかかって来た。

リルナ「きやつ！」

黒ローブ少女「あはははははっどうしたのリルナ様？あたしに殺されるのが怖いのか？」
剣を抜いて襲ってくる少女に対してリルナは戦わずに傷付く一方だった。

エンデ「リルナ！戦え！戦わなければ死ぬぞ！」

フラン「戦うのリルナちゃん！このままでは死んでしまうの！」

リルナ「エンデ……フラン……」

黒ローブ少女「これで終わりだよっ!!」

リルナ「リルナさん!!!」

ラディ「危ない！」

プレファ「姫さんっ！」

すると、誰かが攻撃を剣で受け止めた。

リルナ「ヘンリー兄様っ!!」

ヘンリー「大丈夫リルナさん？」

リルナ「あっ……………ありがとうございます。」

黒ローブ少女「何あなた……………あたしの邪魔をする気？」

ヘンリー「ここは街の人達が住む場所だ……………街の人達を傷付ける事が僕が許さない

……………」

黒ローブ少女「ふーん……………じゃああなたから殺してあげる！」

ヘンリー「ルルー！リルナさん達を連れて早く逃げろ！」

ルルー「分かりましたわ兄様！ここはお任せしますわ！」

そう言う一行はフエンリルを出た。

ヘンリー「ルルー……………強く生きるんだよ……………」

ヘンリーは剣を抜いた。

☆

エンデ「ここまで来ればもう安全だろう……………」

ルルー「そうですね。」

全員疲れ果てていた。

ルルー「リルナさん……………今……………傷の手当てをしますわ……………」

リルナ「分かりましたルルーさん……」

ルルーはリルナに手を翳した。

すると、徐々にリルナの身体の傷が消えて行った。

リルナ「すごいですね！」

ルルー「わたくし……医者を目指してまして……自然と傷付いた人を治したくなりま
すの……」

ラディ「次は何処へ行く？」

プレファ「ここからだ……フェーンネス王国が近いっすね。」

エンデ「じゃあそこへ行こうか。」

ルルー「そうですね。」

リルナ「(フェーンネス王国……お母様や皆さんは今頃……どうなっているのかしら……)」

リルナは故郷の事を少し思い詰めていた。

一行はフェーンネス王国へ向けて足を進めた。

チャプター 2 3 へ続く

チヤプター23：王女の帰還

ルルー「そう言えばフェーネス王国ってどんな国かご存知ですかプレファア？」
プレファア「自然豊かな国と聞いた事があるつすよ。」

フラン「そうなの？」

ラディ「国に着いたらリルナさんに案内をしてもらおうよ。」

エンデ「だな。リルナ、頼めるか？」

だが、リルナは思い詰めた表情で空を見ていた。

エンデ「……………リルナ？」

リルナ「えっ……………？あつ……………どうしたんですかエンデ？」

エンデ「お前の故郷に着いたら案内をしてくれねえか？」

リルナ「はい！任せてください！」

エンデ「なあリルナ……………思い詰めた顔をしてどうしたんだ？」

リルナ「実は……………ちよつと故郷の事を思い出してしまいました……………」

ルルー「故郷で何かあったんですの？」

リルナ「……………私の暗殺を図った騒動が起きまして……………」

エンデ「暗殺だどっ!？」

リルナ「はい……………それはおそらく魔神の教徒達が起こした事ではないかと……………」

ラディ「酷い話だね……………」

リルナは如何にも泣きそうだった。

だがエンデは咄嗟にリルナを抱き締めた。

リルナ「エンデ……………?」

エンデ「安心しろリルナ……………俺や仲間達がお前を守ってやる……………」

リルナ「エンデ……………」

エンデ「そうだろ皆?」

ラディ「うん。それは許せない事だね。」

ルルー「ええ……………リルナさんを殺そうとする奴は出て来なさいな!わたくしが

ぶっ飛ばして差し上げますわ!」

プレファ「そうっすよ!ボク達がいるっす……………だから安心していいっすよ。」

リルナ「皆さん……………」

エンデ「さあフェーンネス王国まで後ちよつとだ!頑張ろうぜ!」

一行はフェーンネス王国に向けてさらに足を進めた。

☆

プレファ「ここが……………フエーンネス王国つすか？」

リルナ「はい。私の自慢の故郷です」

ラディ「すごーい！」

皆がフエーンネス王国の凄さに見惚れていると、一人の老婆が歩いて来た。

老婆「リルルテーゼ様！何時の間にお帰りになられたのですじゃ!？」

リルナ「先程帰りましたよ。」

老婆「まったく……………勝手に城を抜け出されては儂も兵士達も心配されますぞ

！

リルナ「ごめんなさい……………エンデが心配だったんです……………」

老婆「あなた様はエンデ殿を心配しすぎじゃ！」

リルナ「ごめんなさい。」

老婆「あなた様はこの世界のもう一つの世界である天使世界エンジエテイアの次期女神となるお方

……………少しは落ち着きを持った方がよろしいですぞ。」

リルナ「はーい……………」

リルナとの話が終わった老婆はエンデに目を向けた。

老婆「エンデ殿……………今までリルレーゼ様を守っていたいただきありがとうございます。」

エンデ「気にしなくて良いよ婆さん……………俺は、こいつを守りたいという使命を果たそうとしているだけだからな。」

老婆「なるほど……………さあリルレーゼ様、ディアナ女王陛下が城内であなた様の帰還をお待ちしておりますぞ！連れの者と共に行つてあげなされ！」

エンデ「ディアナさんは何処にいるんだ？」

老婆「自室で書類を書いておりますぞ。」

ラディ「分かった。」

リルナ「ありがとうございます。」

リルナと一行はフェーンネス城に向かった。

☆

ラディ「フェーンネス城内って広いね〜！」

リルナ「そうですか？」

ルルー「ええわたくしの家より全然広いですわ。」

プレファ「ボクの家よりもすごい広いです！」

エンデ「そうだろ？しかも、リルナに仕えるメイド達は皆…綺麗好きなんだぜ？」

ラデイ「そうなんだ〜……………」

ルルー「わたくしの使用人達にこのメイド達を見習わせようかしら……………」

プレファ「ボクも習う事にするっす！」

エンデ「お前掃除するのかよ……………」

プレファ「失礼っすねえ！ボクって掃除するっすよ！」

ディアナ「リルナ……………」

一行がのんびり話していると、女性の声が聞こえたのでリルナが振り向いた。

リルナ「お母様……………!？」

ディアナ「ああリルナ……………よくぞ無事で帰って来てくれましたね……………お母様は嬉

しいです……………」

ディアナはリルナを抱きながら泣いていた。

リルナ「ただいま……………お母様。」

エンデ「ディアナ様、お久しぶりです！」

「ディアナ「久し振りです。ね、エンデくん……………すっかり立派になっちゃって。」

エンデ「ははっ……………俺はずーっと変わりませんよ！」

ディアナ「ところで……………あなた達は？」

ラデイ「オイラはラディオスです……………よろしくお願ひします女王陛下。」

ルルー「わたくしはルルーと申しますわ……………以後お見知り置きを」

プレファ「自分はプレファシオ・ラーチエルと言う者です！」

ディアナ「よろしくお願ひしますね皆さん……………」

プレファ「ところで……………あなたは我らがリルルテーゼ姫のお母様とお聞きました……………流石は姫様のお母様だけであつて若くてとてもお美しいですね……………もしよかつたらボクと……………」

するとルルーが腹パンをした。

ルルー「ごめんなさいね女王陛下……………このバカ傭兵はかなりの女好きなんです……………」

ディアナ「大丈夫ですよ……………それにしても、リルナの周りには愉快的な仲間達がたくさんいるのですね……………お母様は安心しました……………」

ラデイ「良かった……………」

ディアナ「ねえエンデくん……………騎士の詰所にチロルがいるから会つてあげてくれな

いかな？」

エンデ「いいですけど……。」

ディアナ「良かった……。チロルは、行方不明になったリルナを心配してたから」

エンデ「そうですか……分かりました。」

ディアナ「ありがとう……。リルナ、あなたもチロルに会ってあげてくださいね？」

リルナ「はいお母様。」

ディアナ「それと……この子連れて行ってあげて？」

リルナの手^{ムーン}に月の様に美しい小人^{チャイルドフェアリー}妖精を乗せた。

リルナ「お母様……この子は？」

ディアナ「その子は月ちゃんですよ……。リルナのお役に立ちますよきつと……。」

リルナ「ありがとうございます」

エンデ達は騎士の詰所へと向かった。

チャプター24へ続く

チャプター24：再会と世界の危機と部下の裏切りと

ルルー「ねえエンデ…今の騎士団長って誰ですの？」

エンデ「今はチロルだぜ？」

ラデイ「そうなんだ…すごいんだね…、オイラもチロルさんの所で修業しようかな…？」

エンデ「いや、大変だぜ？だってリルナみたいな美しい姫に仕えたくてチロルのところで修行している男兵士が毎年増えまくってるんだよな」

ラデイ「そうなの？」

プレファ「羨ましいっす！ボクも修行したいっす！」

エンデ「お前はやめとけ。」

プレファ「何ででっすか!？」

エンデ「あいつの修業はマジできついからな？それであまりにもきつくてやめた奴が何人もいるって話だからな。」

プレファ「マジっすか……」

皆が仲良く話をしていると、リルナが部屋の前で立ち止まった。

部屋の扉をノックした。

?? 「誰……？」

中から聞こえたのは少年騎士の声だった。

リルナ 「私ですよチロル。」

?? 「えっ……リリルテーゼ様!？」

驚いた少年はすぐに扉を開けた後に、リルナに抱き付いた。

?? 「リリルテーゼ様ああああああ!! 僕……すっごく心配しましたあああああ

!!

リルナ 「もうあなたは心配性なんですから……でも、心配してくれてありがとう。」

泣き出した少年にリルナは優しく微笑み、頭を撫でた。

だけど、エンデ達はずっと見ていた。

エンデ 「おいっ……チロル！」

チロル 「うわあっ!……ってエンデっ!？」

エンデの声に反応したチロルは驚いた。

チロル 「何時からいたの……？」

エンデ 「ずっとさつきからな。」

その瞬間、チロルの頬が真っ赤に染まった。

チロルは正気を取り戻した。

チロル「そう言えばエンデ…その人達は？」

エンデ「ああ俺の仲間のラディとルルーとプレファだ。皆、改めて紹介するぜ！俺の親友のチロルだ。」

チロル「初めまして皆さん、フェーネス王国騎士団長を務めるチロル・フェリーシエイナと申します。以後お見知りおきを」

ブルート「チロルの付き人妖精の冥王星だ。^{ブルート}よろしく」

ラディ「オイラはラディオス・ノスタルジアだよ。よろしく」

ルルー「わたくしはルルー・アミフェ・レフォルモと申します。よろしくお願いいたします。」

プレファ「ボクはプレファシオ・ラーチエルつす！よろしくつす！」

ラディ達とチロルがあいさつを終えると、また扉のノックが鳴った。

チロルが扉を開けると、あの時にエンデ達を助けてくれたマーガレッタが入って来た。

マーガレッタ「チロル様…ココアをお持ちしました。」

チロル「マーガレッタさん、いつも差し入れをありがとう。ほらムーンちゃんにブルート、ココアだよ」

ムーン「わぁーい！ココア〜！」

彼女はいつもチロルに差し入れを持って来てくれるとても優しく従騎士の訓練に教官として参加してくれる逞しい女性だ。

マーガレッタ「エンデ！久し振りだな！」

エンデ「ああ！」

マーガレッタ「姫様をお守りしてくれて本当に感謝するぞ！」

エンデ「おう！」

マーガレッタ「チロル様、そちらのお方は？」

チロル「エンデの仲間だよ。」

マーガレッタ「エンデとチロル様とリルルテーゼ様のご友人でしたか…私はマーガレッタと申す。以後お見知り置きを。」

ラディ「よろしくね！オイラはラディだよ。よろしく」

ルルー「ルルーですわ。よろしくお願いします」

プレファ「プレファです！よろしくです！………ところでマーガレッタさん、リルナさんから何て呼ばれてるっすか？ぜひとも教えてほしいっす！」

マーガレッタ「ひっ…姫様につ!?そのっ…！」

プレファに変な事を聞かれたマーガレッタは照れだした。

すると、リルナはマーガレッタに抱き付いた。

リルナ「私は彼女の事を『レティ』って呼んでいます。」

プレファ「なるほど〜！」

リルナ「さてと…客室でちよつと彼らにお話したい事があるんです。レティ、紅茶を淹れて来てもらつても良いでしょうか？」

マーガレッタ「はい。」

リルナ「では、行きましょう。皆さん」

マーガレッタ「……………」

一行が騎士訓練場を出る所をマーガレッタは静かに見ていた。

☆

リルナはドレスに着替えて、自室でエンデ達に今世界に起きている異変の事を話した。

人間世界と天使世界の架け橋が消えた事、二つの世界の女神と世界樹の誕生の事、魔神

が世界を我が物にしようとするために契約者を利用して闇から這い上がって来よう

している事を話した。

エンデ「まさか、世界の異変にその魔神とやらが関わっていたとはな……」

リルナ「そう言えばエンデ、夢の中で声とか聞こえませんでしたか？」

エンデ「聞こえると言うより、響くんだ……俺の頭の中に。」

リルナ「そうですか……その声の正体は天使世界の女神エヴィリオスの娘である女神エレーナの声です。」

エンデ「女神エレーナの声……闇の王の声じゃなかったんだ……」

ラデイ「じゃあ、その魔神の復活を阻止するにはどうすれば良いの？」

リルナ「それは……大精霊達と遥昔から伝えられている6の存在『炎の王フレア』と『水の王ハイドロ』と『風の王ウエンデイ』と『土の王ディーニャ』と『闇の王ケイオス』と『光の王ベルセフォネ』と契約する事ですよ。」

ルルー「大精霊達はともかく、その6つの存在は何処にいるんですの？」

リルナ「それは、世界樹で女神様が教えてくれると思いますよ。」

ラデイ「本当にそうなのかな……？ 教えてくれなかったらどうしよう……」

リルナ「その時は私達で探せばいいんですよ……6つの存在と契りを交わすための選ばれし者が二人揃っているのですから」

6つの存在との契りを交わす選ばれし者が揃っている…その言葉にエンデ達は首を傾げた。

リルナが言った6つの存在と契りを交わすための選ばれし者…それはラデイとルルーの事だった。

ルルー「まさか…わたくしとラデイの事だなんて…」

ラデイ「予想外だよ…」

リルナ「ラデイくんとルルーさん以外にも選ばれし者はいます…もう一人は私の部下であつて私とエンデの大切な親友…チロル…そして、もう一人は…エンデ…あなたと…フェーネス王国の王女で…皆さんからはリルナと呼ばれ…時には天^{エンジェルリッセ}使^{エンジェルリッセ} 姫と呼ばれる大天使で…もう一つの世界^{エンジエティア}天使世界の次期女神…私…リルルーゼです…」

エンデ「えっ…!?俺とチロルとリルナもっ…!?」

フェーネス城にエンデ自身の他にも選ばれし者がいた事にエンデは驚いた。

すると、客室の扉が思いつ切り開いて兵士が入つて来た。

兵士A「失礼しますリルルーゼ様！」

リルナ「どうしたのですか？」

兵士A「フェーネス城内に正体不明な敵が侵入！敵はリルルーゼ様を殺しに来た模

様です！」

エンデ「リルナを殺しに来ただとっ!？」

ルルー「誰が敵を引き入れたんですの!？」

兵士B「おそらく敵を引き入れたのは：マーガレッタ殿かと思えます！」

そう、マーガレッタは今まで信頼されて来たリルナや彼女の差し入れをもらって喜んでいたチロル：後輩のメイドや従騎士訓練で彼女に教えてもらった後輩の騎士達：そしてリルナが愛する国も民も全て裏切ったのだ。

ラデイ「えっ：レテイさんが!？」

プレファ「敵を引き入れたっすか!？」

ラデイとプレファとその場にいたメイド達は驚きを隠せなかった。

だが、リルナは冷静でいた。おそらく、こうなる事は分かっていたのだろう。

リルナ「分かりました：あなた方はお母様と住民を安全な場所へ避難させて、敵との戦闘を開始してください！」

兵士A「ハッ!!」

兵士はお辞儀をして部屋を出た。

ムーン「こうしちゃいられないわあ！すぐに脱出しましょう！」

ラデイ「そうだね：でもどうやって脱出するの？」

ルルー「隠し通路とかあればいいのですけれど……」

プレファ「仮に隠し通路を見つけたとしても、城の外に出れるかつすね……」

チロル「皆、僕……隠し通路のある場所知ってるよ！」

エンデ「本当か!？」

チロル「うん……付いて来て！」

一行は客室を出て、チロルを戦鬪に廊下を走る。

☆

くフェーネス地下通路く

チロル「この階段を下りればお城の中庭に出るよ！」

エンデ「本当にこの城って広い上に……地下通路とかあるとは、何でもアリだな。」

ラデイ「確かにそうだね。」

チロルは扉を開けた。

するとそこは、フェーネス城の中庭だった。

ラデイ「すごい……本当に出れた……」

チロル「ねっ？ 出れたでしょ？」

ルルー「もう…本当に何でもアリですわね…。」

プレファ「そんな事より早く城下町に出た方が良いっすよ！敵に見つかっちゃうっすよ！」

エンデ「そうだな…行くか。」

一行が城門の前に出ると、数十人の敵とマーガレッタがいた。

マーガレッタ「まさか隠し通路を使うとは…なかなかやるな…チロル。」

リルナ「この城に敵を引き入れたのは…レテイ…あなただったのですね…。」

マーガレッタ「そうですね。敵を引き入れたのは私だ。」

エンデ「何故…リルナを殺そうとするんだ！リルナはお前の主でお前はリルナの部下だろ！そうだろ!？」

マーガレッタ「確かに貴様の言う通りだエンデ…だが、姫の『次期女神』と言う肩書がこの世界の毒と言う事を復活しかけているという魔神を信じるものが教えてくれたのだ。」

エンデ「魔神だどっ…!？」

一行は驚いた。

マーガレッタは愛用の剣を引き抜いた。

マーガレッタ「そう言うわけだから、貴様達にはここで死んでもらう！」

ラディ「やむを得ないね！」

エンデ「くそっ！皆、来るぞ！」

一行は武器を取った。

チャプター 25 へ続く

チャプター25：逃亡の末に導くモノ

エンデ「魔神剣っ!!」

マーガレッタ「魔神剣っ!!」

ドカーン!!

戦闘開始にエンデが放った魔神剣とマーガレッタが放った魔神剣がぶつかり合う。

マーガレッタ「なかなかやるな。流石はチロルの親友なだけはあるな。」

エンデ「当たり前だろ?」

マーガレッタ「だが……………これに耐えられるか? 絶氷刃っ!」

後に下がった後にマーガレッタは氷の刃でエンデに攻撃を仕掛けた。

エンデ「うぐっ……………!」

エンデは攻撃を喰らい、腰の辺りから血を流していた。

リルナ「導く光の環よ……………闇を包め! フォトンっ!!」

マーガレッタ「ふむ……………姫は光属性の魔術を使用して来るのか……………だがしか

し、私には敵わぬ!」

リルナのフォトンを諸で喰らったマーガレッタは怯む事もなく、すぐにリルナに斬りかかる。

リルナ「きゃあ！」

ラデイ「危ないっ！」

ガキーン!!

その隙を逃さなかったラデイは受け止めた。

マーガレッタ「見習い騎士でも一応訓練はしているのだな。」

ラデイ「その言葉……………褒め言葉として受け取っておくよ！」

そう言うラデイは押し返す。

リルナ「助かりましたラデイ。」

ラデイ「少しは時間稼ぎになったかな？ルルーさん、そっちはどう？」

ルルー「大分な時間稼ぎになりましたわ！今ちょうどエンデの傷回復も終わりましたわ」

プレファ「それは良かったっす……………さあてボクも攻撃するっす！エアリルバレッ

トっ!!」

Pチロル「僕も行くよ!闇の刃よ……………光を葬れ!シャドウエッジっ!!」

時間を稼いでもらったルルーはエンデの傷の治療を済ませ、プレファは空中から銃弾を何発も撃つ。

それに合わせてPチロルは闇魔術を発動した。

マーガレッタ「こんな作戦を仕掛けていたか……………」

ルルー「さあ終わらせてちょうだいエンデ!」

ルルーの合図と共にエンデはマーガレッタの後ろに回り込み、地下通路で覚えた技を繰り出した。

マーガレッタ「何っ!?!」

エンデ「こいつで終わりだ!魔神剣・雷牙っ!!」

マーガレッタの剣を弾き飛ばした。

☆

マーガレッタ「どうやら……………私の負けの様だな。」

リルナ「レテイ……………もうこんな事は絶対にしないでくださいね？」

マーガレッタ「姫……………」

??「マーガレッタよ、こんな所で何をしておる！」

リルナがマーガレッタに手を差し伸べようとすると、何処かからお婆ちゃん口調の聲が聞こえた。

プレファ「この声は誰ですか？」

マーガレッタ「古代英雄……………ウイリアム……………」

ウイリアム「お主負けたのか？情けない奴じやのう。」

マーガレッタ「……………」

エンデ「お前……………こんなチビと手を組んでいたのか？」

ウイリアム「誰がチビじや！」

ラデイ「確かに小さいね。」

ムーン「マーズちゃんより年寄り臭いわあ……………」

ウイリアム「礼儀知らずの者達じやなあ……………マーガレッタよ、さつさとこの者達を始末するのじや！」

リルナ「ダメですレテイ……………この者の言う事を聞いてはいけません！」

ラデイ「そうだよレテイさん！英雄の言う事を信じてはだめ！」

マーガレッタは悩んでいた。手を組んだウイリアムの手を取るか………今まで仕えて来た主リルナの手を取るか。

リルナ「レテイ……………」

ウイリアム「マーガレッタ！」

マーガレッタは答えを決めた。

マーガレッタ「分かりました……………」

リルナ「レテイ……………」

マーガレッタ「姫、私はあなたの手を取りましょう。」

リルナ「レテイ……………」

エンデ「お前……………」

ウイリアム「お主……………童を裏切るつもりか！」

マーガレッタ「黙れ幼き英雄……………私の主は、リルテーゼ・フェーラ・ヴァ

ルレーフィン様だけだ。」

リルナ「レテイ……………」

ウイリアム「ええいいでよ者どもよ！裏切り者共を一人残らず始末するのじゃ！」

暗殺者A「……………」

そう言う暗殺者は襲いかかって来るが、マーガレッタと兵士達が喰いとめた。

マーガレット「皆の者……………かかれっ！」

兵士A「はっ！」

マーガレット「ここは私達の部隊が食い止める。チロル達は脱出しろ！」

チロル「分かった！」

マーガレット「エンデ……………リルナ姫とチロルを頼むぞ。」

エンデ「ああ任せろ……………」

そう言うのとエンデ達はフェーネス王国を脱出した。

☆

くユンヌの森く

リルナ「エンデ……………皆……………ごめんなさい。私のせいでこんな事に

……………」

ムーン「リルナ……………謝る必要はないよ……………」

エンデ「なあに気にするな。俺はあの時お前と『必ずお前の傍にいる』って約束した

からな。」

リルナ「エンデ……………」

二人が見つめ合っていると、ラデイがにやにやした表情で二人を見た。

ラデイ「エンデってロマンチストなんだねえ……………」

エンデ「ばっ……………逃げえよ！」

プレファ「隠さなくても良いのに〜」

エンデ「殴るぞ teme エ！」

ルルー「物騒ですわね」

一行はフエーネスの森の中を進んでいた。

すると、後ろから黒い羽織った男達が現れてリルナの口を塞いだ。

ラデイ「あっ……………リルナさんっ！」

黒マントA「今まで追って来たが……………まさか女神が簡単に手に入るとはなあ……………」

エンデ「teme エっ……………！リルナを放しやがれっ！」

エンデがリルナを取り戻すために近付こうとした。

だが黒マントは隠し持っていた剣を持ってリルナの首筋に近付けた。

黒マントB「おっと……………動くなよ？動いたらこいつの命がなくなるぞ？こいつを失いたくなかったらこいつを我らに渡せ……………」

そう、彼らの目的はリルナを捕獲する事だった。

リルナ「……………！」

ルルー「なんて卑怯なっ……………」

ラディ「どうしよう……………」

黒マントC「さあどうする？女神を我らに渡すか……………」

チロル「貴様っ……………」

すると、何処かから声が聞こえた。

？「あなた達……………下がってなさい。」

プレファ「へっ……………」

黒マント達があたりを見回すと後ろから女性が現れ、黒マントAを殴り倒した。

？「まず一人……………一著上がり♪さあ今すぐその子を離しなさい！」

黒マントB「ひいっ……………たっ……………退却だあああああ！」

女性の怖さに驚いた黒マント達は逃げ出した。

リルナ「エンデっ……………怖かったあ……………」

助かったリルナは泣きながらエンデに抱き着いた。

エンデ「リルナ……………悪かったな。」

エンデはリルナの頭を撫でた。

それを女性が見ていた。

メリー「あなた達って賑やかね。」

エンデ「あつ……………お前はあん時の……………」

メリー「この間はあるがとう。」

エンデ「ありがたいじゃねえよ……………お蔭でこっちは皆と合流するのに一苦労したんだからな……………」

ルルー「それで、メリーさんは何しに來たんですの？」

メリー「ん？ちよつとした情報を持って來たのよ。」

メリーが持つて來た情報……………それは、セイラ達がいるユンファ教会がリンネ率いるフリーゼ帝国の騎士団の襲撃を受けてメイド長セリーヌと服メイド長セリファは殺害され、セイラは帝都へ連れて行かれたと言う悲しい知らせだった。

リルナ「そんなつ……………セイラつ……………！」

エンデ「セリファさんつ……………」

ラデイ「メイド長様……………」

セリーヌやセリファ達に関わりがあったエンデやリルナ……………ラデイが悲しん

だ。

だが、リルナにある感情が芽生えた。

リルナ「エンデ……………皆つ……………私、セリーヌとセリファの仇を取りたいです！」

エンデ「ああ……………ついでにセイラとリンネも取り戻そうぜ！」

ラディ「そうだね。」

ルルー「そうですわね。リルナさんの大切なお友達の仇を討つためにも！」

ブレファ「ボク達も行くつすよ！」

チロル「僕も頑張るよ！」

エンデ「ああ！」

すると。

メリー「ねえあたしも一緒に行っても良いかしら？あなた達の戦い方を見てみたいの。それに……………あの湖畔の遺跡の石板に刻まれていた妖精ちゃん達に着いてもいろいろと調べたいし……………良いでしょ？」

エンデ「ああ構わないぜ。」

リルナ「はい！メリーみたいな強力なお姉さんがいてくれると何か心強いですし！」

ラディ「そうだね。」

ルルー「そうですわね。」

プレファ「（これでまた……………美人なお姉さんが一人、仲間になってくれるつす……………とても嬉しいつす……………！）」

メリー「まあありがとう！じゃあこれからよろしくね。」

エンデ「ああ。」

エンデ達は新たにメリーを仲間に加え、次の目的地である鳳凰の里へと足を進めたのだった。

チャプター26へ続く

チャプター26：国境を越えて

エンデ「なあメリー…お前の住んでる村って何処にあるんだ？」

メリー「鳳凰の里はねえ…フエーネス王国とフリーゼ帝国を結ぶ国境を越えて、ヴェール火山の方に進んで分かれ道を左に進むとあるわよ」

ラデイ「そうなんだ」

休息を取っている間にセイラがいるユンファ教会がリンネ率いるフリーゼ帝国の騎士団の襲撃を受けてセイラの姉でありメイド長と副メイド長が殺害され、セイラが帝都へ連れて行かれた事を知った一行は、セイラとリンネを奪還するためにメリーを新たに仲間に加え、鳳凰の里へと足を進めた

ラデイ「あつても…鳳凰の里に行くにはさあ…国境を越えなきゃ行けないんでしょ？」

ルルー「そう言えばそうですわね…」

プレファシオ「どうするんすか？」

チロル「困ったなあ……」

メリー「あなた達……落ち込む必要はないわ」

皆が困っている、メリーが何かを閃いたように感じた

リルナ「何か方法があるんですか？」

メリー「ええ……あたし達全員でフリーゼ帝国の民に化ければいいのよ」

エンデ「その手があったか……。でも、うまく行くのか？」

メリー「大丈夫よ……何せあたしの正体を言えば通してくれもの♪」

ラディ「本当かなあ……」

メリー「まあ見てなさいって」

一行はローブを羽織り、国境の砦についた

フリーゼ兵士A「お前達、何者だ？」

青年（エンデ）「俺達はフエーンネス王国からちようどフリーゼ帝国へ帰ろうとしていた

んだ」

フリーゼ兵士B「観光か何かしていたのかね？」

女性（リルナ）「もちろん観光です」

フリーゼ兵士A「誰か身分を証明してくれる人はいるのかね？」

少年（ラディ）「いますよ」

フリーゼ帝国兵二人の前に、メリーが前に出た
メリー「あたしが誰だか分かるかしら？」
フリーゼ兵士B「あつ…あなた様は鳳凰族のメリー様!？」
フリーゼ兵士A「なにつ!?!どうぞお通りください!」
一行は国境の砦を越えた

☆

エンデ「お前って鳳凰族なのか？」
メリー「ええ…正体を隠してごめんね」
ラディ「鳳凰族かあ…初めて見たなあ…」
メリー「あらそうかしら？」
ルルー「わたくしもですわ」
チロル「僕もです…」
メリー「殆どがそうなのねえ…女神の伝承や神話に出てきたはずなんだけど…」

プレファ「そうなんつすか？」

無事に国境を越えた一行はヴェアール火山方面に進んでいた

メリー「ええ：歴史本に載らなかったっておかしいわ：」

リルナ「私も手伝いますから、里についたら一緒に調べましょうね」

メリー「ありがとう：あつ、もうそろそろ着くわよ」

エンデ「意外と近かったな」

ラデイ「そうだね、里に着いたら里巡りしなきゃ！」

メリー「とりあえず着いてきて」

一行は鳳凰の里の中へと入って行った

☆

く火山が近い里・鳳凰の里く

エンデ「ここが鳳凰の里かあ：」

チロル「すっごい賑やかだね」

ラデイ「そうだね、オイラのいた人魚の里に負けてないよ」

ルルー「まさかヴェアール火山の近くにこんな里があつたとは…驚きですわ…」
プレファ「すごいっすね…」

チロル「すごい…近くで見ると迫力が違うや…」

鳳凰の里から見えるヴェアール火山を見ていると、一人の村人がリルナに話しかけてきた

男性「あなた様はもしや…フェーネス王国の王女リルルー様ですか!？」

リルナ「そうですけど…」

少年「本物だあ！」

女性「まさか…旅の方と一緒に来ていただけるとは思つてもいなかつたよ！」

リルナ「そうなんですか？」

男性「さありルルー様、族長が呼びです。我々に着いてきてください」

リルナは村人に何処かへ案内された

エンデ「俺らも行こうぜ」

ルルー「そうですわね、里に着いたら族長に挨拶するのは当然の事ですわ」

一行は村人の後を追つて、族長の家へと向かつた

☆

男性「族長、リリルテーゼ様と旅人をお連れしました」

族長「おお、助かった：下がって良いぞ」

男性はお辞儀をして部屋を出た

リルナ「初めまして族長：」

族長「よく来てくださいましたなりリリルテーゼ様：そして旅の方も」

エンデ「ここは賑やかで、とてもいい里ですね」

族長「気に入ってもらえて嬉しいですぞ：それでメリー、何か情報は掴めたか？」

メリー「リルナ王女はフリーゼ帝国に戦争を仕掛けようするどころか、フェーネス王国全体が戦争のない人と人魚族と我々鳳凰族：ハーフエルフがお互いに手を取り合って生きて行ける様な平和を祈り続けているわ：」

そう：この里の人達は、フリーゼ帝国の騎士に『フェーネス王国は我々に戦争を仕掛ける』と言われていたが、メリーが言う様にフェーネス王国は戦争を仕掛けるつもりなど一切なく、すべての種族が手を取り合って生きて行ける様な平和を祈っていた

族長「そうか：我々は皇帝陛下に騙されたのだな：」

チロル「皇帝陛下：？」

ルルー「現フリーゼ帝国皇帝Ⅱティエル・フリーゼ皇帝陛下：リリルテーゼ姫殿下を

狙い、帝国騎士団を仕向けた張本人でセイラさんを連れ去った張本人ですわよ……この里の人は皆、彼に騙されたんですのね」

プレファ「そんな悪党が皇帝をやってるんすね……」

族長「そこですが旅の方……メリーと共にヴェアール火山を調べてきてくれぬか？」
ルルー「どうしたんですの？」

ヴェアール火山でも、異変は起きていた

その火山を守護する魔獣……ワイバーンが暴れていたため、それを止めてほしいという願いだっただ

ラデイ「そういう事だったらオイラ達に任せてよ！」

エンデ「俺達はその魔獣を止めてきてあげます！」

族長「そうですね……ありがとうございます。メリー、今日はお前の家に泊めてやりなさい、お前が久々に帰って来た事を知らせればきつとあやつも喜んでくれるぞ」

メリー「分かったわ……それでは失礼するわね」

一行は族長の家を出て、メリーの家へ向かった

☆

メリー「ここがあたしの家よ」

エンデ「族長の家とかと比べてみると、お前の家デカくねえか!？」

メリー「そうかしら？これぐらいが普通だと思っけど？」

ラデイ「普通じゃないよ！デカすぎるよ…！」

一行はメリーの家に着いた

しかし、メリーの家は族長や他の人の家と比べるとかなり大きかった

メリー「そうかしら？あつ、あなた達は先に部屋に入っていてちようだい」

ラデイ「分かった」

エンデ達はメリーの家の中に入り、メリーは庭に建ててあるお墓の前に立った

そのお墓には『愛しき夫ジャック、ここに眠る』と書かれている

メリー「ただいま…あなた…」

お墓詣りを済ませたメリーが部屋の中に入ると、エンデが待っていた

メリー「あら、あたしの事を待ってたの？」

エンデ「お前…何してたんだ？」

メリー「ちよつとお墓参りをね…」

エンデ「誰の？」

メリー「あたしの旦那の…ジャックのね…」

そう…メリーには旦那がと娘がいた

だが、ある事がきっかけで…メリーの旦那と思われる男性のジャックは死んでいて、娘は行方不明になっていた

エンデ「何でお前の旦那の墓があるんだ？」

メリー「実は…殺されたのよ」

エンデ「いったい…誰に殺されたんだ…？」

メリー「フリーゼ帝国の…奴らに…」

エンデ「どうして？ ティエルって皇帝の命令ではないんだろ？」

メリー「あたしとジャックは娘…メアリイと幸せな日々を送っていたのよ…それなのにあいつ等は…！ 帝国の騎士団は…！ あたしの目の前でジャックを殺して！ あたしの大事な娘を拐ったの…！ そう…あいつらがあたしの大切な人の命と大切な人を奪ったのよ！ あたしはあいつらが憎い…！ あいつらに復讐の炎で燃やし殺したいほど憎いのよ…！」

メリーは自分の旦那の命を奪われて娘が拐われた事を思い出し、泣き出した

その涙と共にメリーは仇を撃ちたいほどに…燃やし殺したいほどフリーゼ帝国の騎士団を憎んでいた

エンデ「そうか…俺も大切な家族を…妹を…リンネを奪われたんだよ…同じ奴らに…」

メリー「…あなたも、あたしと同じ境遇を受けたの？」

エンデ「ああ…そして、今回はリルナの大切なセイラさんを奪われた…俺もリンネとセイラさんのために、あの騎士団に復讐してやると決めたんだ」

メリー「そうなのね…皆で絶対に仇を撃ちましようね！」

エンデ「ああ！」

その後、エンデ達はメリーの家で一夜を過ごした

チャプター27へ続く

チャプター27：火山に響く獣の悲しみ

エンデ「まさか、メリーの家に露天風呂があるとは思わなかった！」

ラデイ「オイラもだよ：：しかも男湯と女湯付きとは！」

チロル「メリーさんに感謝ですね！」

プルート「気持ちいい：：」

プレファ「本当っすね！お蔭で女湯が覗けるんすからね！」

プレファシオは女湯を除く気満々だった

チロル「覗きはだめですよ？」

エンデ「そうだと、覗いたらルルーに殺されるぞ」

プルート「ムーン達を覗いたら：：僕も君を殺す：：」

ラデイ「後：：オイラを巻き込むのはやめてよね」

プレファ「分かったっす！」

エンデ「じゃ、そろそろ上がろうぜ」

エンデ達は風呂から上がった

☆

チロル「湯加減とても良かったですね！」

ラディ「本当だよね」

プレファ「楽園に来た勢いで気持ち良かったつすよ！」

エンデ「おーいお前ら、風呂空いたぞ」

メリーの家に泊まる事になった一行：エンデ達男性陣は先にお風呂に入ったとても気持ち良かったらしく、プレファシオが満足していた

エンデ達はリルナ達にお風呂が空いた事を言い、部屋に戻って行った

リルナ「皆さん、お風呂空いたそうですよ！早く行きましょうよ！」

ルルー「そうですわね、早く入って寝ましょう」

ムーン「久々のお風呂♪」

マーキュリー「そうね」

リルナ達はお風呂に行った

☆

皆が寝つけた頃、エンデは寝転がりながら起きていた。

エンデ「(そう言えば…リンネ…大丈夫かなあ…親父じゃないけど…心配だ…)」

エンデが一人で考え事していると、リルナがエンデの部屋の扉をノックした

リルナ「エンデ…? 入っていいですか?」

エンデ「どうしたリルナ?」

リルナ「眠れないんです…」

エンデ「リルナもか? 実は俺もなんだ…夜空を見ながら話すか?」

リルナ「はい…!」

2人はベランダに出た

エンデ「綺麗だなあ…」

リルナ「はい…! 小さい頃…故郷で眠れなくて中庭での出来事を思い出しますね」

エンデ「あの頃は父さんとフェーネス王国に来てたからな」

リルナ「それでチロルも眠れなくて、3人で夜空を見たんですよね!」

エンデ「ああ…すごい懐かしいな」

リルナ「旅が終わったら、また3人で夜空を眺めながら話したいですね!」

エンデ「ああ…異変が終わったらな」

リルナ「その時はエンデが王様になって私は女王様になってチロルは私達に仕える騎

士になるんですね……」

エンデ「いつかは親になる……、俺とリルナの子供のパパになるのが楽しみだな」

リルナ「そうですね……将来の事を話したら眠くなつてきちゃいましたあ……」

エンデ「そろそろ寝るか……おやすみリルナ」

ペランダから中に入りカーテンを閉め、リルナが部屋から出たのを確認したエンデは扉を閉じて眠りについた

☆

く空飛ぶ獣が棲む火山・ヴェアール火山く

エンデ「ここがヴェアール火山か？」

メリー「そうよ、この火山は守り神としてワイバーンが住んでいるのよ」

ラデイ「暑くないかなあ？」

リルナ「暑いですねえ」

翌朝になり、一行はヴェアール火山に着いた

ラデイ達は暑いように感じていたが、メリーは暑くないようだ

チロル「メリーさんとは暑くないんですか？」

メリー「あたしは鳳凰族だから」

ルルー「すごいですわね…」

エンデ「そんな事より早く、ヴェアール火山の中に行こうぜ」

メリー「そうね、早く行きましょう」

一行はヴェアール火山の中に入った。

☆

ラデイ「やっぱり…内部をずっと歩くと暑さで疲れちゃうよー！」

ルルー「そんな事言つてはなりませんわ！暑いと思うから暑いんですよ！」

プレファ「だつてえ…！」

一行が途中で休憩している時に、上の方から魔物の鳴き声が聞こえた

エンデ「何だ!?!今の鳴き声は…！」

ラデイ「何処から…つて言うか何の魔物の鳴き声なの!?!」

メリー「これは頂上にいる守り神ワイバーンの鳴き声ね…とても苦しそうだわ」

プレファ「感じ取れるんすか？」

メリー「ええ：ワイバーンはあたし達鳳凰族の神様の存在なの」

チロル「そうなんだ：」

メリー「長話している暇はないわ、先を急ぎましょう！」

リルナ「そうですね：早く頂上に着いて休憩したいですく：」

一行はこの山の守り神であるワイバーンを助けるために頂上を目指そうとしたが、頂上への道を岩が塞いでいたため、通れなかった

エンデ「なあ皆：頂上への道が塞がれてるぞ」

ラディ「どうするの!？」

ルルー「困りましたわね：」

進めなくて困っていると、メリーが前に出た

チロル「あの：何をするつもりなのですか？」

メリー「ふふつ：見れば分かるわよ。」「[r b：鳳凰> フェニックス]」、岩を持ち上げ
げてちょうだい」

？「この岩をかいな？任せときーや！」

鳥のような小人妖精は岩を持ち上げた

メリー「じゃあやるわね：」

そういうとメリーは構え、素手で岩を壊した

メリー「さあ先に進みましょう」

プレファ「(あの二人…すつこい力持ちだなあ…)」

一行は先へ進んだ

☆

エンデ「着いたな」

リルナ「そうですね…」

ラディ「それで、肝心のワイバーンは何処にいるのかな？」

一行があたりを見回していると、ワイバーンが空の上から姿を現した
ワイバーンは雄叫びを挙げた。その雄叫びはとても苦しそうだった

ルルー「これがワイバーンですよ!?!」

プレファ「とつても苦しがつてるっす…」

メリー「いったい誰が…」

? 「俺に決まってるだろ？」

一行が声がした方に気付くと、青年が姿を現した

チロル「あなたは？」

ジオルジュ「俺はジオルジュ：そしてこいつを操っているのはこの俺だ」

エンデ「お前だったのか！」

メリー「ワイバーンを解放しなさい！」

するとジオルジュは笑い出した

ジオルジュ「ああ解放してやるぜ。ただし、その王女様と小人妖精4人を俺に渡してくれたらな……」

エンデ「やっぱりルナとムーンちゃん達が狙いなのか！」

ジオルジュ「そうだけ……あの二人を渡さねえとこの火山の守り神様が死んじまうぜ？」

なんと、ジオルジュはワイバーンを解放する代わりにルナとムーン達を渡せと言って来たのだ

プレファ「卑怯っす！」

ジオルジュ「さあどうする？」

ラデイ「何を言ってるんだ……二人を渡すわけないじゃないか！」

ルルー「そうですわ！」

一行は武器を構えた

ジョルジユ「そうか渡す気はねえってか…じゃあ…皆仲良くこいつの炎に焼かれて死になっ！」

エンデ「来るぞ皆っ！」

一行にワイバーン&ジョルジユが襲い掛かって来た

チャプター 28 へ続く

チャプター28：火山を護る獣：姿形違えど大切な人を護る者

エンデ・チロル「魔神剣っ!!」

ラデイ「瞬迅槍っ!!」

前衛のエンデとラデイとチロルが真っ先にジョルジュに攻撃を仕掛けるが、エンデとチロルが同時に放った魔神剣を弾き飛ばしてラデイの瞬迅槍を食い止めてしまう

エンデ「ウソだろ…俺の魔神剣が弾き飛ばされるなんて…こいつ何者なんだ…!」

チロル「僕の魔神剣も効いてないよ…」

ラデイ「しかもオイラの瞬迅槍も食い止められたよ?! スッゴい握力の持ち主だよ…!」

ジョルジュ「甘いぜ…俺に傷を負わせようなんて事…最初から丸見えなんだよ!」

そう叫んだ瞬間ジョルジュはラデイの槍の矛先を掴んで…ラデイごと槍を投げた

ラデイ「エンデ、危ないよ！」

エンデ「うぐっ！」

ラデイはエンデに当たり、二人とも吹き飛んで壁に当たってしまった

リルナ「エンデ！ラデイくん！」

ルルー「リルナさん、余所見なんてしてる場合にはありませんわ！来ますわよ！」

ワイバーンはブレスを吐いて来た

リルナとルルーとプレファとメリーは避けきれたが、リルナの腕に火の粉が飛んで火

傷を負った

リルナ「熱っ！」

ルルー「火力が結構ありますわね…」

プレファ「ボクも攻撃するっす！シャープバレットっ！！」

ルルー「わたくしもお手伝いしますわ！水舞扇っ！！」

プレファが何発も銃弾を発射して、ルルーが水属性の技でワイバーンに攻撃を仕掛ける

る

その隙を見たメリーがリルナとルルーの近い位置に立つと…直ぐ様魔術の詠唱に

入った

メリー「小さき妖精の癒しを…ピクシーサークルっ！！」

円の周りを妖精が昇って行くと、リルナが負った火傷が回復した
リルナ「ありがとうございますメリーさん！」

ルルー「助かりましたわ！」

メリー「良いのよ…さあリルナちゃん、決めてしまいなさい？」

リルナ「はい…！いでよ…永久の礎！ピコピコハンマーっ!!」

リルナは杖を上に掲げると同時に大きなピコハンを放ち、無事にワイバーンを倒した

ラデイ「あつ…そっちは終わったみたいだよ」

エンデ「そうだな。じゃあ俺らも終わらすか！」

チロル「そうだね！」

ジョルジュ「つて事は俺だけか…まあ楽しめるからいいけどな！」

ラデイ「そう言っつてられるのも今のうちだよ！絶氷槍っ！」

チロル「闇の刃よ…光を葬れ！シャドウエッジっ!!」

ジョルジュは氷の槍を避け闇の魔術も避けたのをエンデが隙を突いた

エンデ「こいつで止めだ！虎牙連斬っ!!」

エンデ達の連携でジョルジュを撃破した

☆

「ジョルジュ「お前ら…やるじゃねえか…」

エンデ「当たり前だろ…俺らはリルナを守るために戦っているからな」

「ジョルジュ「そうか…でも、次は全力で…お前らの息の根を止めてやるよ…俺自身の…大切な人のためにな！」

「ジョルジュが口笛を吹くと、ホークが来て…ジョルジュはホークの足にしがみ付いた
ジョルジュ「じゃあな お前ら」

「ホークの足にしがみ付いたジョルジュは去って行った

「メリー「ワイバーン…！」

「プレファ「大丈夫っすかね？」

「しかしワイバーンの意識はなかった

「その瞬間、メリーは涙を流した

「メリー「ごめんね…あたしが早く助けてあげられなかったばかりにっ…！ごめんね…！」

「リルナ「メリーさん…」

「メリーが泣きじやくつていて…リルナ達が悲しみに暮れていると何処からか、男性の

声が聞こえた

? 『メリー…聞こえるか?』

メリー「この声は…ジャック…? ジャックなの!？」

ジャック『メリー…今まで君を悲しませてすまなかつたな…』

メリー「いいえ…あなたが悪いわけじゃないわ」

ジャック『そうか…あつ、このワイバーンは僕が君を心配していて、未練だった心を
反映したんだ…』

メリー「つて事は…ワイバーンはジャックなのね？」

ジャック『そういう事だよ…』

エンデ「良かったなメリー」

メリー「そうね…こんな形でだけ…亡き夫の声を、もう一度聴けて…」

ジャック『ところで…エンデさんだっけ? 僕のメリーと何処にいるか分からない…僕
とメリーの娘をこれからよろしく頼むよ』

エンデ「ああ…任せてくれ、メリー達の娘はちゃんと見つけ出す…メリーとの誓いの
約束だからな」

ジャック『ありがとう…これで僕は安心して眠れるよ』

メリー「ねえジャック?」

ジャック 『ん?』

メリー 「愛してるわ…ずっといつまでも…例えどんなに離れていようとも…」

ジャック 『僕もだよメリー…』

メリー 「もし…あなたが…いつか生まれ変わったら…いえ、いつか…生まれ変わっても…あたしの事を見つけて…また、幸せにしてくれる?」

ジャック 『もちろんだよメリー…必ず…君をまた見つけて…幸せにするよ…』

メリー 「ありがとう…愛してるわジャック…」

ジャック 『僕もだよメリー…』

ワイバーンの身体から離れたジャックは光となつて消えて行つた

メリー 「ありがとう…ジャック」

プレファ 「これで一件落着いたし…鳳凰の里に戻るつすよ!」

ルルー 「そうですね…こんな暑苦しい所…早く出ましょう…汗でべったりですわ…」

エンデ 「だな…じゃあ行こうぜ」

一行はヴェアール火山を後にした

☆

エンデ「なあメリー……」

メリー「何かしら？」

エンデ「守り神を失った後の火山はどうなるんだ……？」

メリー「さあね……でも、守り神はいなくても火山はうまく制御出来るでしょう」

ラデイ「そうなんだ……火山はすごいね」

ルルー「あら、ラデイも火山の様に熱くて強い男になりたいんですの？」

ラデイ「うん！オイラはチビって言われるんだもん」

メリー「熱血漢になったら汗臭くなるだけよ？」

ラデイ「えっ……嫌だなあ……」

一行が鳳凰の里へ帰る途中……何かが爆ぜる音がした

リルナ「何でしょうか今の爆発音……」

エンデ「分からないな……」

メリー「でも……族長や皆が危ない感じがするの……」

ラデイ「早く鳳凰の里へ戻ろう！」

嫌な予感を察知した一行は一刻も早く鳳凰の里へ戻った

☆

男性「皆！早く避難するんだ！じゃないと…俺達はフリーゼ帝国の騎士団に殺され…
ぎやつ！」

謎の爆発音を聞き付けた一行が鳳凰の里に戻ると、フリーゼ帝国の騎士団が逃げ遅れた里の住民を“反逆者”と見なし…次々と殺戮し、女は囚われ…逆らえば殺される惨劇が起きていた

チロル「何がどうなってるの…?」

ムーン「分からないわよお…」

ラデイ「でも…嫌な予感がするのは確かだね」

すると、村人が走って来た

村人「大変だあ！」

メリー「どうしたの？」

村人「メリー…帰って来てたのか…そんな事より大変なんだ！」

リルナ「何かあったんですか？」

村人「実は…フリーゼ帝国の騎士団が急に訪ねて来て『リルテーゼ王女を渡せ』と言つて来たんだ…でも族長は『姫殿下はこの場にはいない』と言つた途端に、『反逆者は処刑する』と言い出し族長が捕まってしまったんだ！」

エンデ「族長が何で反逆者として処刑されなきゃならないんだ!？」

メリー「分かったわ…すぐに案内して！」

一行は村人に連れられて族長の家へと向かった

☆

村人「族長…助けを連れてまいりました！」

族長「おおメリー…！無事だったか！」

メリー「ええ…それより族長、あたし達と一緒に逃げましょう！」

男性「族長、我々もメリー達と共に逃げましょう！」

族長「そうじゃな…」

メリーが族長と一緒に囚われた男性の手錠を外し、一行と村人と男性と族長を連れて

逃げ出そうとすると…逃がさんと言わんばかりに兵士達が立ち塞がった

兵士 A 「貴様ら！そこにいる王女を渡せ！」

兵士 B 「渡さなければ皆殺しだ！」

エンデ 「どうすんだよ…」

エンデ達が絶体絶命の中、族長が若い男達と共に無抵抗のまま、前に出た

エンデ 「爺さん…何をする気だ？」

族長 「旅の者たちよ…ここは我々に任せよ」

メリー 「族長…やめて！もうジャックの様な…あの子メアリイの様な犠牲者は出したくないの

!!

もう…大切な人を目の前で失いたくない…涙目で訴えるメリーの頭を族長は撫でた

族長 「大丈夫じゃ…もう儂がいなくてもお前は生きて行ける…ジャックの分と、いつ

の日か娘と再会する日を信じて生きるのじゃぞ？」

メリー 「分かったわ…族長、あたし…もう泣かないわ！ジャックとの約束だもの！」

族長 「旅の者達よ…不束者だが、メリーをよろしく頼みますぞ」

エンデ 「ああ…！」

族長 「さあ行くのじゃ…！」

一行は出口に向かって走り出す

すると族長はこう言った

族長「強くなるのじゃぞ…メリー…」

メリー「お義父さん…!」

一行はそのまま鳳凰の里を出て、次の街を目指した

兵士長「族長よ…あの王女を逃した反逆罪で死んでもよいと言うのだな？」

族長「ああ構わんよ…儂にとつてメリー達は大切な宝物じゃからな」

男性「おやめください族長!!」

兵士長「そうか…殺せ」

族長「さらばじゃ皆の者…メリー…」

男

性

「族

長

!!!
 おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
 兵士は剣で族長を刺し殺し、族長は眠る様に息を引き取った。安らかな族長の亡骸を

前に男性の泣き声だけが響き渡った…

兵士長「…ユリス様、土の王デーニヤの子孫を殺しました…」

ユリス「ご苦勞様。さて…この族長が死んだからこの魔神の杖を翳してみるわ」

ユリスは手に持っている杖を族長の身体に翳す。すると禍々しい光が杖のあちこち

にはめられているオーブの黄色が砕け散った

ユリス「これで一つ：我が肉体の封印が解けた：次の場所へ行くぞ。お前達は戻って鳳凰の里の族長の死亡確認を報告しろ」

兵士長「了解しました」

ユリスは杖を使って別の場所へ移動し、帝国騎士団の兵士達はフリーゼ帝国に戻った

☆

族長が亡くなった事はすぐにエンデ達にも知り渡り、その瞬間メリーは崩れ落ちるかの様に泣き叫ぶ

メリー「そんなつ…あたしのせいで族長があ…」

プレファ「メリーさん…」

鳳凰の里を出た一行はフリーゼ港の宿屋で泊まる事にしたが、族長の死を知ったメリーは泣いていた

エンデ「メリー…くよくよしても仕方ねえだろ…それにお前が悲しんだら、昇天し

たお前の旦那や亡くなった族長が悲しむぞ？」

メリー「でもっ…あたしのせいで族長が死んだのよ!? だから…」

ラデイ「自分のせいで自分を追い込まないでっ！」

メリー「ラデイくん…?」

リルナ「そうですよ、ラデイくんの言う通りですよメリーさん…!」

プレファ「族長が死んだ事を自分のせいにしちゃだめっすよ!」

ルルー「そうですわ…あなたは何も悪くありませんわ!むしろ、里を救うために闘ったのですわ!」

チロル「悪いのはフリーゼ帝国だよ!メリーさんは何も悪くないよ!」

リルナ「そうですよ…だから…、自分を責めないでください…!」

皆に言葉にメリーの心は揺らいだ

メリー「皆…」

エンデ「な?」

メリー「ありがとう…」

メリーは元気を取り戻し、笑顔を見せた

ラデイ「それで、次は何処へ行くの?」

ルルー「そうですね…」

チロル「あのー…皆さん…」

リルナ「どうしたのですかチロル？」

チロル「次の目的地なんですが…ギルティーツ大陸のテリュベアⅡヒースと言う村があるんですけど…次はそこに行きませんか？」

プレファ「行って何をするんすか？」

チロル「僕のお父さんに会いに行くんですよ…」

リルナ「まあ！チロルのお父さんにぜひとも会ってみたいです！」

エンデ「だな…じゃあ行くか」

エンデ達は次の目的地のテリュベアⅡヒースと言う村があるギルティーツ大陸へ向かう船に乗った

チャプター 29 へ続く

チヤプター29：まだ見ぬ大地と雪の降る村

ムーン「これが船旅なのねえ！」

ラデイ「海が間近で見れるよ〜！」

プレファ「船旅ってとってもロマンがあるから楽しいっす！」

メリー「そうね：船旅って素晴らしいわあ：お姐さん：感激だわあ！」

エンデ「そうだよな！」

エンデ達は初めて船に乗ったから興奮していた

チロル「ルルーさんとリリルテーゼ様は船に乗った事あるんですか？」

ルルー「わたくしはギルティーツ公国の現国王様の戴冠式に出席する際に乗りましたわ」

リルナ「私はフリーゼ帝国の皇帝陛下の誕生日に出席する時に乗りました」

チロル「そうだったんですか」

エンデ「チロルは船に乗った事あんのか？」

チロル「あるよ？僕は幼い頃に母さんと一緒にフェーネス王国まで船を使って行ったんだ」

ラディ「そうなんだ…」

メリー「皆あくそろそろ上陸するみたいよお〜！」

エンデ「分かったあ今行くっ！それじゃ上陸準備しようぜ？」

チロル「うん、リリルテーゼ様とルルーさん、降りる時は足元お気を付けて」

リルナ「ありがとうございます」

ルルー「助かりますわ」

一行はそれぞれの上陸準備をした

☆

ラディ「これが雪かあ…！」

フェニックス「綺麗やな…！」

エンデ「初めて見たな…」

プレファ「雪って見た事ないっす…本物を見て嬉しいっす！」

リルナ「私…雪は本でしか見た事ないですから…本物を見ると…とても綺麗なんです

ね…！」

メリー「それより…次ってテリユベア―ヒースに行くのよねえ？」

エンデ「そうだったな…行こうぜ」

エンデ達が歩き出すと、チロルとルルーが立ち止まって雪の景色を見ていた

チロル「久し振りだなあ…この雪の降る大地も…」

ルルー「そうですわね…」

二人が思い出に浸っていると一行が立ち止まって、チロルとルルーを呼んだ

エンデ「おい2人共…置いて行くぞ？」

チロル「今行くよ…ルルーさん、行こう？」

ルルー「そうですわね…」

2人は走って後を追う

一行が歩き出したのを、崖の上から一人の男が見えていた

？「ふーん…あの研究者の嬢ちゃんが言ってた女神リリルテーゼ姫とはあの子の事

かあ…なんだか、興味が湧いて来たぞ…」

青年は赤い髪を翻しながら崖の上を降りる様に歩いて行った

☆

「雪が降る村・テリユベアⅡヒース」

エンデ「ここがテリユベアⅡヒースと言う村か…」

ラデイ「やけに静かな村だね…」

チロル「そうだよ、ここは子供達は元気で大人は静かに過ごしているんだ」

ラデイ「“子供は雪の子”って言われてるし、それはそれでいいんじゃない？」

メリー「それを言うなら…“子供は風の子”じゃないかしら？」

村の入り口で立ち止まっていると、子供達がエンデ達の方に走って来た

子供A「ねえねえお：兄ちゃん達は何処から来たの？」

エンデ「俺らはなあ：フェーネス大陸から来たんだぜ」

子供B「本当？」

チロル「そうだよ、後ろにいるドレスを着た美人なお姉さんの事を君達知ってるよね

「？」

子供C「ボク：知ってるよ！このお姉ちゃんって確か：リリルテーゼ姫でしょ!？」

ラデイ「その通りだよ、よく分かったね：」

子供C「だって『リリルテーゼ様の事を知っておかないと、将来：騎士にはなれないよ』ってママに言われてるんだもん、知っておいて損はないよ！」

リルナ「そうですね：あなたは将来騎士になりたいのですね：？頑張ってくださいね：」

子供C「ありがとうございます！」

そう言うとりルナは子供Cの頭を撫でた

子供達は笑顔で走り去って行った

チロル「エンデとリリルテーゼ様って子供の扱いが上手だから好かれるんだよね：」

エンデ「まあな：だって俺はクロトマーガにいた時、子供の相手をしてたからな」

リルナ「私もフェーンネス王国にいた時はよく子供達の相手をしていたんです。子供達からは『お母さん』って言われた事もありましたね：」

チロル「羨ましい：って、そんな事より僕が小さい頃に住んでた家に案内してあげよう！」

リルナ「本当ですか!？」

チロル「はい…そこには僕のお父さんが住んでいるので、ついて来ててくださいい！」
一行はチロルが小さい頃に住んでいたとされる家へと向かった。

☆

チロル「ただいまー！」

エンデ達「お邪魔しまーす…」

しかし、家の中は静かだった。

チロル「父さん…寝てるのかな…？」

エンデ「どうなんだろうな…」

しばらく静かだったが、二階からチロルの父親と思われる男性が降りて来た

？「チロルか…遠くからわざわざ父さんに会いに来てくれたのか…？」

チロル「うん…フエーンネス大陸から父さんに会いに来たんだよ！」

？「そうか…ありがとうなチロル…」

その声を聞いた瞬間にリルナは驚いた

リルナ「あなたは…まさか…ペロニカ…!?」

ペロニカ「ご無沙汰していますリリテーゼ姫…女王陛下に似て随分とお美しくなられ

ましたな……」

リルナ「まさか……あなたがこの村に住んでいて……それでもってチロルの父親だったなんて……思ってもいませんでしたよ……」

リルナの発言が気になったエンデはチロルに問いかけた

エンデ「なあチロル……なんでリルナはお前の親父さんの事を知ってるんだ……？」

チロル「えっ知らないの？ 父さんは僕がフェーネス王国の騎士団に入る前にディアナ女王陛下の近衛騎士を務めていた上に……リルルテーゼ様の教育係をやってたんだから！」

ルルー「そうなのですかのペロニカさん!？」

ペロニカ「チロルの言う通りだ……」

ラデイ「すごいんですね……」

ペロニカ「ところで……君達はチロルの友達かな？」

エンデ「はい！ マリン夫人の子息のエンディル・リアステインと言います！」

ラデイ「ラディオス・ノスタルジアと申します！」

ルルー「ルルー・アミフェ・レフォルモですわ」

プレファ「プレファシオ・ラーチエルです！ よろしくです！」

メリー「メリーよ。よろしくね」

ベロニカ「マリソ夫人にエンデくん…君は確か…私がかつて恋をしていたマリソお嬢様と親友であつたエイドの息子かな？」

ラデイ「えっ!? そうなの!？」

エンデ「まあな…つて、父さんと母さんを知つてるのですか!？」

ベロニカ「うむ…マリソお嬢様はギルティーツ公国出身のお嬢様で…子供の頃は3人で遊んでいた事があつたな…そう言えば…エイドとマリソお嬢様は元氣にしておるか？」

エンデ「父さんは元氣でやつてますけど…母さんは…俺が3歳の時に病氣で亡くなつたんです…」

ベロニカ「そうか…マリソお嬢様は幼少の頃から病弱だつたからな…幼き頃はずーつとエイドと私が看病してた時もあったな…」

エンデ「そうですか…母さんは幸せ者だつたんだ…」

ベロニカ「それはそうと、君達は歩いて来たのだろうか？」

ルルー「はい、港から歩いて来ましたわ」

ベロニカ「そうか…疲れただろう? 今日泊まつて行くといいさ」

リルナ「ありがとうございますベロニカ!」

一行はチロルの家で泊まる事にした

チャプター30へ続く

チャプター30：忍び寄る魔の手

エンデ「はあ…チロルのお父さんが優しい人で良かった…」

エンデはベッドに腰を下ろして本を読み始めた。

エンデ「(それにしても…チロルってこの村の出身って言ったが…あいつのお母さんはどんな人なんだろう…)」

チロル「ねえエンデ…ちよつといいかな？」

エンデが部屋でのんびり本を読んでいると、チロルが扉をノックした

エンデ「どうしたチロル？」

チロル「僕の母さんの事を話してなかったし…いい機会だから話そうと思ってね…」

エンデ「そうか、俺もお前のお母さんの事が気になったしな」

チロル「そうなんだ…それは良かった。じゃあ改めて…僕の母さんは、父さんと出会うまではギルティーツ公国で公国王陛下直属のメイド長を務めていたんだ…」

エンデ「じゃあなんでベロニカさんと結婚したんだ？」

チロル「それは…母さんが父さんと駆け落ちしたからさ…」

☆

夜の森の中……1組の男女がいた。

チエル「はあ……はあ……ペロニカ様……私はあなたの傍から離れたくごいません……」

ペロニカ「私もだチエル……私は君のためなら国を捨てても構わない……!」

チエル「結婚しましょうペロニカ様……国を捨てて……一緒に過ごしましょう!」

ペロニカ「ああ……愛してるよチエル……」

チエル「私もですよペロニカ様……」

二人は永久の愛を誓い合い……幸せになった。

☆

エンデ「そうなのか……」

チロル「まあ……君のお父さんもお母さんも驚いたんじゃない?」

エンデ「ああ驚いてたぜ……だって俺の父さんはペロニカさんの知り合いだったし……母

さんはペロニカさんの主人だったしな……すっごい驚いてたぜ」

チロル「そっか……そう言えばエンデのお母さんはどうしてるの?」

エンデ「俺の母さんは……」

エンデがチロルに自分の母親の事を話そうとしたその時、バンっ！と音がして、二人が振り向くと慌てた様子でプレファシオが走って来た

プレファ「二人共おー！大変っすよー！」

エンデ「どうしたプレファ？そんなに慌てて？」

プレファ「さっき……何故か知らないんすけど……正体不明の敵が来て……姫さんが誘拐されたんすよ！もちろんラディとルルーさんが足止めをしたんすが……不意打ちを食らったんすよ！」

チロル「そんなっ……リルルテーゼ様がっ……!?!」

エンデ「こうしちやいらねえよ！すぐにリルナ助をけに行こうぜ！」

プレファ「分かったつす！ラディとルルーさんとメリーさんとフランを呼んで来るっすから二人は村の井戸の中のダンジョンの入口で待っていてほしいっす！」

プレファシオは3人と1匹を呼びに行つてエンデとチロルは村の井戸の中にあるダンジョンの入口に向かった

☆

エンデ「ここが…ダンジョンの入口か？」

チロル「そうみたいだね…」

エンデ「これ…どう見ても井戸だよな」

チロル「中は地下水道になつてるのかな…？」

エンデ「どうだろうな…」

2人が待つっていると、プレファシオがラデイとルルーとメリーとフランを連れて来た。

プレファ「二人共、待たせたつすね！」

ルルー「エンデ…チロル…ごめんなさい…」

ラデイ「オイラ達が不意打ちを喰らつたせいで…リルナさんが…」

チロル「大丈夫ですよ…のんびり話していた挙げ句、リルテーゼ様のお傍にいるはずなのに、いなかった僕達も悪いんだから」

メリー「さあ…2人を助けに行きましょう！」

一行はリルナを助けるために井戸の中に入って行つた

☆

エンデ「まさか…井戸の中がダンジョンになってるとは思ってもいかなかったな…」

ラデイ「水がないね…」

ルルー「流石はダンジョンですわね…」

プレファ「この奥に姫さんと奴らがいるんすね…」

チロル「行こう皆さん！」

一行は連れ去られたリルナを救うべく、井戸の中を進んで行った

その途中で何度も敵に遭遇するも、倒して進んだ

エンデ「この奥にリルナが…」

ラデイ「遂に最深部だね」

ルルー「御待ちなさい…リルナさんと誰かの話し声が聞こえますわ…」

プレファ「本当っすね」

最深部に着いたエンデ達は反対側からこっそりと聞いてみる。

どうやらリルナと女性が話している様だ

？「あなたを捕えた理由…それはあなたの力を使い、兵器として利用する事です」

リルナ「そのために私を捕えたのですか…！」

？「そうです…あなたを兵器として利用すれば…全体陸はボクのティエル皇帝陛下と

ネーラ女王陛下にひざまづく…ボクはその日が来るのが楽しみなんだあ…！」

その事を聞いていたエンデは岩場を飛び越えた。

エンデ「させねえ！」

リルナ「エンデ！」

後からラデイ達も飛び越えて来た

ラデイ「お待たせ」

ルルー「そのあなた…あなたは何者ですの!？」

ナタリー「ボクはナタリー…ティエル皇帝陛下の部下です…」

プレファ「別名…妖術師ナタリー…」

ナタリー「そうだよ…ボクは商人ギルド月光つぎびかりのの水青石サファイアの一員さ…」

メリー「ここにいて言う事は…あなたはリルナちゃんを帝都に連れて行くのかしら？」

ナタリー「その通りだよお姉さん。ボクはリリルテーゼ姫を帝都に連れて行って…ボクの研究室で彼女の体内に眠る女神の力と彼女を利用して、ティエル皇帝陛下率いるフリーゼ軍の兵器にする事さ」

チロル「そんな事…絶対にさせない！」

ナタリー「あなた達は目障り…消えてちょうだい…」

一行に科学者のナタリーが襲い掛かる

チャプター 31 へ続く。

チヤプター31：エンデの覚醒とチロルの想い

ナタリー「唸れ…浄罪の焰…フレイムバースト！」

ナタリーの魔法が炸裂し、一行に熱気が襲い掛かる

エンデ「くっ…！」

ルルー「彼女の魔法は強力ですわね…」

ラディ「うん…エンデとか相性が悪そう…」

ナタリー「まだまだ行くよ…深海より現れし無限の泡…セイントバブル！」

今度は泡が現れて破裂し、エンデ達に襲い掛かる

プレファ「このままじゃ…皆やられちゃうつすよ！」

エンデ「（誰か…俺に力を貸してくれ…）」

窮地に追い込まれたエンデが心から祈ったその時、声が聞こえた

？「お困りのようだね…お兄さん」

エンデ「誰だ!？」

？「僕はお兄さんの中にいるんだヨ」

エンデ「お前…何者だ？」

「僕はお兄さんの小人妖精になるために風の王ウエンディ様から派遣された
木星銀河だヨ！ジュピターって呼んでネ」
ジュピターギャラクシア

エンデ「ああ…」

ジュピター「お兄さん、困ってるんでしょ？なら…僕の名前を呼んで？そうすればお兄さんの意思に答えて力を貸すヨ」

エンデ「分かった…力を貸してくれ…木星銀河!!!」
ジュピターギャラクシア

エンデに緑色の光が降り注ぐ

魔術を詠唱中だったナタリーは詠唱を中断し、興味津々に見ていた
光が止むと、エンデの肩に緑色の渦が出来た

エンデ「これは…？」

ジュピター「お兄さんの肩に緑色の渦が出来たよネ？それは僕がお兄さんの
小人妖精 > チャイルドフェアリー」として契約した証だヨ！」

リルナ「これでエンデにも小人妖精が…！」
チャイルドフェアリー

チロル「おめでどうエンデ！」

ナタリー「話をしている場合ではありませんよ？タービュランス!!」

喜ぶ一行に風の槍が襲い掛かる

しかし、エンデは風の槍を吸収した

ナタリー「タービュランスを吸収するとは…なかなか興味深いですね」

エンデ「これもお前の力なのかジユピター？」

ジユピター「そうだよ！僕は風魔法を吸収するって言う特別な効果を持っているんだヨネ」

エンデ「そうなのか…すごいな」

ジユピター「さあエンデ、さつき吸収した風魔法を力に変えるんだ！」

エンデ「力に…？」

ジユピター「うん！君の風の力を大きな力…秘奥義にするんだヨ！」

エンデ「やってみる…！」

エンデは剣を天に掲げると風の力が双剣に宿り、剣が緑色に変色した。

エンデ「これが秘奥義か!？」

ジユピター「そうだヨ！これこそが君の秘奥義…風神滅牙斬さ！さあその技でナタリーを倒すんだ！」

エンデ「ああ！見せてやる！風の轟を!!はああああああ!!風神滅牙斬つ!!!」

エンデはナタリーを滅多切りにして竜巻を起し、後ろを向いて決めポーズをとった
こうしてエンデ達はナタリーに勝利したのだった

☆

ナタリー「これが小人妖精と契約した者の力ですか…興味深いですね…」

エンデ「妖術師ナタリーお前の負けだ、大人しく身を退け！」

白いコートについた砂ぼこりを払うとナタリーは立ち上がり、クスクスと笑う

ナタリー「そうですね…ここは大人しく退きましよう…しかし、次は必ずリリルターゼ王女と小人妖精達を手に入れます…せいぜい楽しみにしておくのですね」

ナタリーは着ていたコートを靡かせ、消えた

エンデ「あいつも皇帝の部下なのか…」

ルルー「ええ…テイエル皇帝陛下直属のギルドが月光の水晶石つきびかりのサファイアですわ…幹部として殺戮天使ミオウ…魔神人形まじんドールメアリー…魔剣ジョルジュ…妖術師ナタリーと呼ばれていま

すわ」

ラディ「なるほどね」

チロルはリルナに駆け寄る

チロル「リリルターゼ様！お怪我はありませんか？」

リルナ「大丈夫ですよチロル…心配してくれてありがとうございます」

チロル「はい…」

エンデ「どうしたチロル？」

チロル「僕は……リリルテーゼ様を守れなかった……」

プルート「チロル……お前はリルナお嬢を救えたのだ……だからそれでいいじゃないか」

チロル「それじゃあダメなんだ！僕は……幼きあの日に誓ったんだ……この命に代えてもあなたを守るって……それなのに僕は！」

リルナはチロルを抱きしめた

チロル「リリルテーゼ様……？」

リルナ「チロル……あなたは私を助けてくれました……私はそれだけで嬉しいですよ」

チロル「しかし僕は……！」

エンデ「リルナがそれでいいって言ってるんだからそう言う事にしてやれよ」

チロル「エンデ……」

ラデイ「そうだよ、君はリルナさんの立派な従者だよ！自信を持って！」

ルルー「彼らの言う通りですわ。リルナさんの従者であるあなたがこの事を引きずれば……誰がリルナさんを守るのですの？代わりなんていませんのよ」

プレファ「そうっすよ！認めない輩がいるなら、チロルが我らが姫さんの従者だと証明してやるんす！」

メリー「ええ……あなたを認めないのは何処にもいないわ、あなたはリルナちゃんの完

壁な従者よ」

チロル「皆さん…ありがとうございます」

リルナ「一件落着です」

エンデ「そうだな。ここを出てベロニカさんに会いに行こうぜ」

一行は地下水道を出て、チロルの実家に向かった

☆

チロル「父さん、ただいま」

ベロニカ「おおチロル…攫われたリルテーゼ様を取り戻せたのだな」

チロル「うん！」

ベロニカ「そうか…良くやったなチロル、流石は私の息子だ」

ベロニカはチロルの頭を撫でた

頭を撫でられたチロルは嬉しそうだった

チロル「父さんに頭を撫でてもらえたのは赤子の時以来だよ」

ベロニカ「だな…ところで、チロルはこれからどうするのだ？」

チロル「僕はエンデ達と一緒に行くよ父さん…世界を救いたいんだ！」

ベロニカ「そうか…チロル…成長したな。父さんは嬉しいぞ」
チロル「じゃあ…！」

ベロニカ「チロル、行つて来い」

チロル「ありがとう父さん！」

エンデ「良かったなチロル」

チロル「うん！」

ベロニカはリルナに跪いた

ベロニカ「リルルテーゼ様…我が息子をよろしく頼みます」

リルナ「もちろんですよベロニカ…チロルは私達に任せてください」

ベロニカ「チロル…強く生きるんだぞ」

チロル「うん！」

一行はベロニカの家を出て、テリュベアⅡヒースの入り口まで向かった

1人残ったベロニカは妻と思われる写真を見て呟いた

ベロニカ「チエル…君と私の息子は遅しく育ったぞ…」

そこにはベロニカにとって懐かしい一枚が映っていた

ベロニカと妻のチエル…幼き頃のチロルと笑いあつて過ごしていた頃の写真だった

チャプター 3 2 に続く

チヤプター32：焰の少女と闘技場

「北フリーゼ帝国港・闘技場・クラリネットシティ行き」

チロル「次の目的地は何処にする？」

ラデイ「オイラは行った事の大陸に行ってみたい！」

リルナ「それはいいですね！他の大陸にも行きましょう！」

ルルー「他の大陸と言いますと…ギルティーツ大陸ですね」

メリー「あそこの大陸はロンディア皇子の住むギルティーツ公国の支配下にある大陸
ね」

プレファ「皇子つすか…楽しみつす」

エンデ「そうと決まれば港に戻るか！」

エンデ達が東フリーゼ港に行こうとすると、少女とぶつかった。ぶつかった少女は紫のサイドテールにピンクの瞳に黄緑のインナーとオレンジのレッグアーマーを付けて腰に黄色いリボン巻いて青いスカートの後ろに赤い布を着用して黒いハイヒールを履いて、背中に大剣を背負った14歳ぐらいの少女だった

? 「いたたく…」

エンデ 「大丈夫か？」

? 「うん。ぶつかっちゃてごめんね」

ジユピター 「気にしなくていいヨ。前方不注意のエンデが悪いんだし」

エンデ 「お前なあ…」

? 「ありがとう妖精さん！じゃあわたし、そろそろ行くね！」

リルナ 「気を付けて帰ってくださいね？」

? 「うん！お兄さん達、また何処かで会おうね」

少女はそう言い残すと、去って行った

マーキュリー 「なんだろう…あの子もチャイルドフェアリー小人妖精を連れている気がするのよ…」

ムーン 「そおなの？」

プルート 「確かにあの娘からチャイルドフェアリー炎の小人妖精の気配を感じた…」

フェニックス 「もしかすると…マーズキヤクシア火星銀河はんがおるのかもしれない」

リルナ 「そうだとしたら…また会いたいですね！」

ルルー 「分かりますわ！あの子とはまた会いたいですわね！」

エンデ 「次の目的地に行くか！」

エンデ達はギルティーツ大陸に渡るために闘技場と言われるクラリネットシテイに

行くために東フリーゼ港に戻り、船に乗ってクラリネットシティに向かった

☆

「闘技場・クラリネットシティ」

エンデ「ここが闘技場かあ…」

ラディ「大きいね」

チロル「このクラリネットシティの最上階には赤獅子レッドライオンと言う番人がいるんだよ」

プレファ「その子は何故赤獅子レッドライオンと呼ばれてるんすか？」

ルルー「獅子の様に力強く大剣を振り回して、赤い炎の小人妖精チャイルドフェアリーを連れてくる事から

そう呼ばれる様になったそうですわ」

メリー「どんな人なのかしら…お姉さん、楽しみだわ」

リルナ「早速闘技場にエントリーしましょう！」

エンデ達が階段を上がると、バニーガールの受け付け娘がいた

バニー受け付け娘「いらっしやいませえ」

エンデ「俺達、闘技場に参加したいのですが…」

バニー受け付け娘「闘技場に参加したいのですかあ？参加料金はお兄さんの心を驚掴みにさせていただきませよお？」

エンデ「構わないさ（俺はリルナ一筋だからな）。参加メンバーは俺とプレファとリルナとチロルで」

バニー受け付け娘「了解しましたあ！リルナさんは選手控え室でお待ちくださいねえ？さあお兄さん達はこつちですよお」

リルナは選手控え室に行き、エンデとプレファとチロルはバニーガールの受け付け娘に着いて行つた

☆

チロル「ここは何処？」

バニー受け付け娘「うふふ…？リラックスしてくださいねえ？」

バニーガールの受け付け娘は突如チロルの顔を自らの胸に挟み、チロルの頬に胸を押し付け始めた。

チロル「ちよつと…！」

バニー受け付け娘「うふふ…？気持ちいいでしょう？これであなたは気持ちよくなり
ますう？」

プレファ「参加したい人が男性の場合、やってるんすか？」

バニー受け付け娘「そおですよお坊やは私の胸を触っていいですしい、お兄さんは
私の胸を突いていいですよお？」

プレファ「では…有り難く触らせていただくつす！」

プレファシオはバニーガールの受け付け娘の胸を触り始めた

バニー受け付け娘「ああん？優しい触り方ですねえ？」

プレファ「後でお嬢に怒られるんでね」

バニー受け付け娘「お兄さんも触っていいですよお？」

エンデ「俺は遠慮しておくよ」

バニー受け付け娘「そおですかあ…そろそろ選手控え室に案内しますねえ」

エンデ「分かった」

3人はバニーガールの受け付け娘に案内されてリルナの待つ選手控え室に向かった

☆

リルナ「エンデ達…まだ来ないのでしょうか…?」

「独りで選手控室にいるリルナは暇になり、自らエンデ達を迎えに行こうとしていたが

…3人が戻って来たので迎えに行く手間が省けた

エンデ「待たせたなリルナ」

チロル「遅くなってすみませんでした」

リルナ「遅いから迎えに行こうとして…寂しかったんですよ…?」

プレファ「我らが姫さんに寂しい思いをさせてしまったっすね…もう大丈夫っすよ?

ボクがあなたの傍にいる…」

エンデ「だーかーらー…俺の婚約者フィアンセに絡むな!」 ドカツ!

寂しい思いをしたリルナに絡んでいたプレファにエンデが殴った

プレファ「殴らなくてもいいじゃないっすか!」

チロル「あなたがリルリルターゼ様に絡むからだよ」

エンデ「そろそろ出番の様だし行こうぜ」

エンデ達は闘技場のステージに向かって行った。

☆

「その頃、いつまで経つても始まらない事に違和感を覚えたルルー達は
ルルー「遅いですわね…一体何をしますの…」

ラデイ「そろそろステージに行ってる頃だと思っただけ…」

ルルー達が闘技場内に潜入して歩いていると、フランが急に吠え出した

メリー「どうしたのフランちゃん？」

ラデイ「待って…部屋から声が聴こえるよ…」

ルルー「ホントですわね…」

メリー「何を話しているのかしら？」

ラデイ達は部屋の扉に耳を傾けた

バニー受け付け娘「リリルテゼ姫を護る男共を誘惑しました…これで彼らは皇帝陛下に姫と小人妖精を集めて渡しに来るでしょう」
チャイルドフェアリー

「？「そうか…フェーンネスの王女が僕の下に来るのが楽しみだよ…頼んだよ？僕の可愛いわサギ娘ちゃん？」

バニー受け付け娘「分かりましたあく任務が終わったら構ってあげてくださいねえ
テイエル皇帝陛下あ〜」

ティエル「分かつてるさ。じゃあ頼んだよ」

バニー受け付け娘はフリーゼ帝国のトップに立つ人物：ティエル皇帝と思わしき男との通信を切った

その話をルルー達は聞いていた

ルルー「通りで怪しいと思っただけですわ…」

ラデイ「まさか…エンデ達3人を誘惑してたなんてね」

メリー「これからどうするの？他にもフリーゼ帝国の兵士が潜んでるはずだし…探しに行っちゃおう？」

ルルー「そうですね、注意を怠らない様にしながら行きましょう」

ラデイ達は盗み聞きした部屋の扉の前から離れ、潜んでいるかもしれない帝国の兵士を探しに行った。その直後：バニー受け付け娘がラデイ達の後ろ姿を見て盗み聞きされた事を確信し：闘技場のステージに控えている帝国小隊長に通信をつないだ

バニー受け付け娘「そっちに姫を護る男共の仲間が向かいましたよお、変な真似をしたらここの番人の赤獅子ちゃんレッドライオンを人質にしていいますよお」

帝国小隊長に伝えたバニー受け付け娘は通信を切った

バニー受け付け娘「ふふ…そう上手くは行きませんよおルルーお嬢様あゝ」

独り高らかに笑い、受け付けに戻って行った

チャプター23へ続く

チャプター 33 : 闘技開始!

エンデ「会場の皆、待ってるだろうな」

プレファ「時間かけちゃったつすね」

チロル「早く終わらせて赤獅子^{レッドライオン}へ挑戦するための切符を掴みましょう」

リルナ「はい!」

エンデ達はステージに上がった。

審判「さあお待ちせいたしました!参加者による闘技をスタートいたします!挑戦者が勝ちますと赤獅子^{レッドライオン}サリアへ挑戦するための資格が得られます!会場の皆さん応援してあげてください!」

観客が歓声を上げる中、ラデイ達は応援を始めた。

ラデイ「エンデー!皆!頑張れ!」

エンデ「おう!絶対挑戦権を獲得してみせるからよ!」

ルルー「プレファ!負けたらお仕置きですわよ!?!」

プレファ「そつ…それだけは勘弁してほしいっすよお嬢!」

メリー「チロルくんもリルナちゃんも頑張つてね?頑張つたらたくさん甘えさせて

あげるわよ〜？」

チロル「お身体で〃だけはなしですよ？」

メリー「分かっているわよお〜」

審判「それでは始めます！READY：Go!!」

エンデ達はスタートの合図で闘技場の魔物を一掃していった。

？

審判「お見事です！皆様、ご覧になりましたでしょうか！彼らは番人への挑戦権を獲得いたしました！拍手をお願いします！」

観客達は拍手喝采を起こした

ラデイ達も観客席で喜んだ

ラデイ「やった！エンデ達が勝ったよ！」

ルルー「お仕置きはなしですわね」

メリー「後で甘えさせてあげなきゃ」

審判「それではこれより番人赤獅子サリアとのエキシビジョンマッチを行いたいと

思います！それでは番人の登場です！」

柵が上がる。しかし…出て来るべき対戦相手の番人が出て来ない

エンデ「なあ審判：番人が出て来ないんだが？」

リルナ「どうなっているのでしょうか…？」

プレファ「何か隠してるんじゃないんすか？」

3人は審判に問いかけた

審判「いったい何が起きて…」

そこまで言いかけた瞬間、フリーゼ帝国の兵士が番人と共に現れた

エンデ「何で帝国の兵士が闘技場にいるんだ!？」

チロル「しかも番人が一緒にいるよ！」

リルナ「何がどうなっているのですか…？」

4人と観客が動揺していると、ルールとラデイが観客席からエンデ達に中に侵入して調べた事を話した

ルール「エンデ！よく聞きなさい！受け付けにいたバニーガールはあなたとチロルとプレファを誘惑して虜にしてリルナを帝国に引き渡そうと企んでいましたわ！」

ラデイ「しかもバニーガールはティエル皇帝と思わしき男性と連絡を取っていたよ、もしかすると…番人は人質にされてるんだ！」

エンデ「何だと!」

メリー「つまりバニーちゃんとそこにいるのは審判に成りすました帝国の魔道士…そうでしょう?」

審判? 「流石は鳳凰族の娘…推理が速いじゃないか」

メリー「当り前でしょ? あたしは情報収集が得意なんだから♪」

リルナ「番人さんを放してください!」

審判の姿を解いた帝国の魔道士は番人の首元に刃を向けさせた

魔道士「動かない方がいいですよリルナーゼ王女? 動いたら番人の首が飛びますよ? 空に向かってね」

? 「つ…!!」

リルナ「どうすればいいのですか…!!」

魔道士「それは簡単な事ですよ…交換条件であなたが我々と共に帝国に来れば済む話です…どうです?」

エンデ「いくら何でも人質は卑怯だろ! リルナは絶対渡さねえからな!」

プレファ「ボクも賛成つすよ。 姫さんは守り抜くつす」

チロル「リルナーゼ様は僕が守ります!」

それぞれ武器を向けるエンデ達

魔道士「仕方ありませんね：番人を殺しますか」

リルナ「あつ：ダメ！」

冷たく輝く刃が振り下ろされる数秒前、番人の肘が兵士の腹に直撃した

魔道士「何が起きてるんですか!？」

？「ねえ魔道士さん：わたしをタダの番人だと思ってる？それは大間違いだよ！わたしには火星銀河だっている：そう、わたしは光の大精霊アスカと闇の大精霊シャドウの力を受け継ぐ巫女なんだから！」

そして剣を持った少女は大剣を振り回して、3人の兵士を独りで薙ぎ倒した

エンデ「すげえ：」

リルナ「これが番人：赤獅子レッドライオンの強さ：」

？「ほらほら挑戦者達！こんなところにいないで早く逃げよう？援軍が来たら明らかに捕まっちゃうよ？」

チロル「分かりました：逃げましょう！」

ステージから離れるエンデ達と少女を確認したラデイ達は：

ラデイ「どうやら逃げるみたいだよ」

ルルー「私達も逃げますわよ」

メリー「そうね、待合室付近で合流できそうね」

フラン「ついて来て」

フランを先頭にラディ達は観客席を後にした

チャプター34へ続く

チャプター34：天魔の少女

〔闘技場・クラリネットシティ港〕

アリア「エンデ様、巫女様、皆様！こちらです！」

サリア「あつ、アリアく！」

クラリネットシティの港にはアリアが待つていた

エンデ「アリア！俺達を助けてくれるのか？」

アリア「当然でございます。エンデ様達は巫女様の身柄を救ってくれたお方です、話
は全て巫女様から発信装置でお聞きいたしております」

ルルー「アリアさん、わたくし達は何処へ逃げるべきですか？」

アリア「私はギルティーツ大陸から巫女様をお迎えに上がりましたが故にエンデ様達
を巫女様の育ち故郷であるアークエンジェルヴィレツジと言う街が存在するギル
ティーツ大陸がよろしいでしょう」

ラデイ「アークエンジェルヴィレツジか…どんなに場所か楽しみだなあ」

チロル「そうと決まれば早速、ギルティーツ大陸行きの船を出港させましょう」

アリア「分かりました。船長さん、大急ぎでギルティーツ大陸行きチャイルドフエアリの船を出していただけませんか？フリーゼ帝国の兵士がリリルターゼ姫様と小人妖精達を捕えに追つて来ると推測出来ませぬ」

船長「そうなのか？それならお安い御用さ！すぐに船を出港させよう。あつ、お代はいいからね？」

アリア「ありがとうございます」

エンデ達はフリーゼ帝国の騎士達が追つて来る前にギルティーツ大陸行きの船に乗り、船はそのまま出港した

☆

サリア「久々の船旅だ〜！しかも久し振りに育て故郷に帰れる〜！皆元気にしてるかな〜！」

久々の船旅でその上育て故郷に帰れる事にサリアは燥いでいた
エンデがサリアの隣に来て、潮風を浴びに来た

サリア「ねえねえエンデ、潮風って気持ちいいよね！」

エンデ「そうだな。船旅はワクワクするしな」

サリア「うんうん！」

エンデはサリアに質問をした

エンデ「なあサリア、アークエンジェルヴィレッジってどんな街なんだ？」

サリア「賑やかな街だよ？天から落ちて来た天使や魔族や天魔族って言う種族の子供を育てて無事にそれぞれの道に送ってあげたり天に還してあげるために作られた街でね、わたしのお母さんの知り合いのクラリスさんが町長を務めているんだ」

エンデ「天魔族？」

サリア「知らないの？天魔族って言うのは天使と魔族のハーフの種族の事なんだよ？ちなみに、わたしがそうだね」

エンデ「覚えておこう」

天魔族を覚えておこうと思ったエンデはサリアに次の質問をした

エンデ「アリアがお前の事を巫女様って言ってたけど、お前って何者なんだ？」

サリア「よくぞ聞いてくれた！闘技場クラリネットシテイの番人である赤獅子レッドライオンとは仮の姿……そう、わたしは光の大精霊アスカと闇の大精霊シャドウの力を受け継ぐ巫女サ

リア・スターダストなのだよ！」

サリアは謎の決めポーズをしていた

エンデ「やっぱり：アリアが言つてた『巫女様』つてお前の事だつたんだな」

サリア「あれー!? 何で驚いてないの!？」

エンデ「何でつて聞かれても教えなーい」

サリア「エンデの意地悪〜！」

2人が楽しそうに話していると、船部屋で休んでいたリルナとルルーとチロルが甲板に上がって来た

リルナ「エンデったら、サリアちゃんと随分楽しそうに話をしてますね！」

ルルー「ホントですわね」

チロル「エンデ：リリルテーゼ様を泣かせないでよね？」

エンデ「何でそうなる！俺はリルナを泣かす様な事は一回もしてねえぞ!？」

サリア「あつ、リルナさ〜ん！」

サリアはリルナが甲板に着いた途端、泣き出すかの様な感じでリルナの胸目掛けて体に抱き着いた

リルナ「どっ…どうしたのですかサリアちゃん？」

サリア「エンデさんってば酷いんだよ！わたしの謎のポーズに驚かないし驚かない理由も教えてくれないの〜！」

ルルー「まあエンデ…いけませんわこんな可愛い女の子に意地悪をされては！」

リルナ「エンデ…」

チロル「ごめんねサリア、彼はああ言う性格の人だからさ」

エンデ「ああ言う性格ってどんな性格だよ…」

チロルの言った事にエンデは苦笑いをした

その後にはラディやプレファやメリーと言ったメンバーも来た

ラディ「いつの間にも皆、仲良しになったの？」

プレファ「いいじゃないっすか！仲睦まじい事はうちの特権っすからね」

エンデ「そう言えばメリー、フランは？」

メリー「アリアちゃんにもふられてるわよ？どうやらアリアちゃん、もふもふな動物が好きみたいよ？」

エンデ「そっ…そうか…」

サリア「アリアだけずるーい！わたしもフランちゃんをもふもふしたい〜！」

リルナの身体から離れると、フランをもふりたいが為にサリアはアリアがいる船部屋へと走って行った

リルナ「フランちゃん、モテモテですねぇ」

エンデ「一応俺のペットなんだがな…」

こうして一行を乗せた船はギルティーツ東港へ着いた

チャプター35へ続く

チャプター35：天使と魔族の棲む箱舟

「ギルティーツ東港」

船長「帝国の奴らは追って来てはない…姐さん、逃亡成功ですぜ」

アリア「そうですか…良かった…」

エンデ「船長さん、俺達を助けてくれてありがとうございます」

船長「気にしなくていいですぜ、皆さんはアリアの姐さんの友達だからな。料金は特別にタダにしといてやるぜ！達者でな」

リルナ「ホントにありがとうございます！」

船に乗ってギルティーツ大陸にあるギルティーツ東港へ来たエンデ達は船長さんと別れて、サリアの育て故郷のアークエンジェルヴィレッジに向かった

しかし…エンデ達がギルティーツ東港を出るのを見ている者がいた…

？「ほほお…あのお嬢ちゃんか帝国が狙っている天使世界エンジエティアの次期女神か…どんな力を持つているのか…ワクワクして来るじゃねえか…」

赤髪の青年は移動を始めた

☆

く東ギルティーツ街道く

エンデ「なあアリア、アークエンジェルヴィレッジまでどれぐらいだ？」

アリア「そうですね…この調子で行けば後10分で着くでしょう…」

ラデイ「もうすぐなんだね、楽しみだなあ〜！」

プレファ「町長のクラリス様…どんなお方なのか…今から楽しみます！」

ルルー「いきなりナンパなんかして…ご無礼のない様にするのですわよ？」

プレファ「分かっているっす…」

一行が話をしながら楽しそうに歩いていると、赤髪の青年が話しかけた

？「ねえねえ、その青年」

エンデ「ん？何だ？」

？「青年達は、ギルティーツ大陸は初めてかい？」

ラデイ「そうだよ？初めてだからサリアが案内してくれてるんだ」

？「そうかそうか。ギルティーツ大陸はなあ、大陸の中心にギルティーツ公国って国

が存在しててね？その皇子様に会いに行ってみるといいよ？」

エンデ「ああ、ありがとう」

赤髪の青年と話していると、アリアが問いかける

アリア「あなたは何者ですか？旅をしているのであれば：まず名乗るのが先だと思いますが…？」

？「そうだったな。：俺はレオンハルト・ノーレッジ、ただの遺跡マニアさ」

エンデ「レオンハルトと言うのか。：俺はエンデ」

リルナ「私はリリルテーゼと申します。リルナと呼んでください」

ラデイ「オイラはラデイって言うんだ！」

ルルー「ルルー・アミフェ・レフォルモと申しますわ」

プレファ「プレファシオ・ラーチエルっす！よろしくっす！」

メリー「あたしはメリーよ」

チロル「リリルテーゼ様の騎士でありフェーンネス王国騎士団長を務めているチロル・フェリーシェイナと申します」

サリア「わたしがサリア・スターダストちゃんだよ！」

アリア「アリアと申します。以後お見知り置きを」

レオン「よろしくな皆。：おっと、そろそろ違う場所に行かなければな」

エンデ「もう行くのか？」

レオン「つま、俺様は遺跡マニアもやっていて傭兵もやってるからなく。いろいろと忙しいんよ」

サリア「そうなんだ、気を付けてね」

レオンハルトは去り際…リルナに『また会おうぜ？次の女神ちゃん♪』と耳元で囁いた。リルナは“次の女神”と言う言葉を聞いて青褪めた

リルナ「っ…!?!」

エンデ「…リルナ？どうした？」

リルナ「なんでもないですよ、速く行きましょう」

エンデ達は不思議に思いつつもアークエンジェルヴィレッジを目指した

☆

く天使と魔族が棲む箱舟・アークエンジェルヴィレッジく

エンデ「すつげえ…魔族と天使ばかりしかいねえ…!」

リルナ「ここの皆さんは仲良しなんですな」

サリア「そうだよ？ 仲良くする様にクラリスさんが言ってるもん」

ラデイ「町民想いの町長さんなんだね」

エンデ達が話していると、若い女天使と男天使が話しかけた

女天使「サリアちゃん、いつの間に帰って来たの!？」

サリア「ただいま」

男天使「そちらの方々は旅の方かな？」

サリア「そうだよ！ わたしの友達なの！」

女天使「サリアちゃんの後ろにいる桃長髪のお嬢さんは美しい方ね」

エンデ「俺の幼馴染で婚約者のリルナって言います」

リルナ「よろしくお願いします」

サリア「あのね、リルナちゃんはエンジエティア天使世界の次の女神様って言われている大天使って

称号を持ったお姫様なんだよ！」

それを聞いた瞬間、男女の天使は驚いた

女天使「まさか…時期女神と呼ばれた大天使様が赴くなんて…！」

男天使「大天使様、俺達で街を案内します！」

天使達はリルナとエンデ達を連れて、町案内をした。

チャプター 36 へ続く

チヤプター36：町長クラリス

男天使「あそこが子供達の遊び場です、天使の子供達と魔族の子供達がよく遊んでますよ」

遊び場には天使の子供達と魔族の子供達が楽しく遊んでいた。

エンデ「なるほどな」

ラデイ「オイラ達が遊んであげたら喜ぶかな？」

男天使「エンデさん達の様なお兄さんならきつと喜びますよ」

ラデイ「そうと決まれば：早速遊んであげよう！」

エンデ達は天使と魔族の子供達と遊んだ。

〜リルナ達は〜

女天使「ご覧ください、あれが天の恵みと呼ばれる噴水です」

リルナ達の目の前に綺麗な水の噴水があった。

ルルー「綺麗な噴水ですわね」

メリー「とても清々しく感じるわ〜」

サリア「この噴水に願いを込めて100ガルドを入れると…願いが叶うんだよ！」

リルナ「そうなのですか？入れてみたいですよ…！」

ルルー「そうですね、100ガルドを入れましょう」

リルナとルルーとメリーは願いを込めて100ガルドを投げ入れた。メリーは生まれ変わっても夫のジャックと巡り会ってまた…幸せになれる様に…ルルーは従兄であるヘンリーと最愛の妹リリーが無事でいてくれる様に…リルナは例え自分が女神になっても…大好きなエンデとチロルとリルナと…変わらない日々を3人で過ごせる様に…。

女天使「大天使様達の願いはきつと叶いますよ」

サリア「帰って来たついでにわたしもお願ひ事しなきゃ！」

帰って来たサリアはアリアの記憶が戻る様に…とサリアに拾われた時に記憶を失っていたアリアを氣遣っていた。

女天使「それではサリアちゃんのお願ひ事も終わった事ですし、防具とか武器とかが売ってるお店とかに案内しますね」

リルナ「ありがとうございます」

女天使とリルナ達が観光の続きを始めるや否や、魔族の若い女性が話しかけた
魔族女性「ここにいたんだ」

女天使「どうしたの？今、大天使様達に街案内をしてるんだけど…」

魔族女性「えっ…あなたの後ろにいるのがあの大天使様!?」

そう聞いた瞬間、魔族の若い女性は驚いた。

魔族女性「大天使様とそのお供の皆様…よくぞおいでくださいました。心より歓迎いたします」

リルナ「そんなっ…畏まらなくていいですよ」

メリー「そうよく堅苦しいのは負担になるわよく?」

魔族女性「ありがとうございます皆さん。…そう言えばさつきアリアさんが二本の尻尾が生えた白い猫の様な生物を連れて行ったんだけど…迷子なのかな?」

女天使「どうなんでしょうか?」

リルナ「すみません…その白い猫の様な生物は…私達のペットなのです…」

魔族女性「そうなのですか?」

サリア「でもね、アリアが可愛い動物が大好きだから…さ」

女天使「貸したのですか」

ルルー「そう言う事ですわ」

メリー「後でちゃんと返してもらおうわ〜」

女天使「では、私達は街案内の続きがあるから行くわね」

魔族女性「私も街案内お手伝いする！」

女天使と魔族女性に連れられて、リルナ達は街案内を再開した。

チャプター37へ続く

戦闘ボイス&用語集&PV&主題歌集

戦闘ボイス紹介

戦闘開始ボイス（エンデから順番に）

エンデ

通常

「皆……やろうぜー」 「俺は負けねえからな……い！」

（天使世界編） 「僕に齒向かうなんて……愚かだな」

（天地融合編） 「こんな所で……時間食ってる暇は……ねえんだよ！」

ボス戦開始時

「ぶっ飛ばすぜ！」 「僕とやるつもりかな？」

（リルナ戦@フェーネス城） 「お前は……俺らのせいで辛い思いをしたんだよな……だが、もう辛い思いをしなくていい……だから帰って来てくれ！リルナっ！」

（レオンハルト@シアルフィ神殿） 「俺達を裏切っておいて自分だけ勝手に死ぬなんて……」

そんな勝手な事は許さねえからな！お前が俺らの所に戻って来たら一発殴ってやるから覚悟しておけこの野郎っ!!」

(あやな@ヤマトタケル像前)「アイラ女王が死んだ事でくよくよしてちやあ仕方ねえだろ！それにお前までが死んだらつばきやお前を支えてくれた民達や俺ら……そしてアイラ女王が悲しむだろうが！」

(ロンディア@ギルティーツ平原)「何だよ……俺ら何もしてねえよ!?!」

通常攻撃 (2段〜3段)

「せいっ！やっ！はあっ！」

「よっ！ていっ！」

ダメージ

「いてっ！うおっ！いつてえ……！」

「うっ！ぐあっ！うわっ！」

瀕死

「やべえなこれ……！」

「まだ負けるわけにはっ……………!!」

戦闘不能時

「皆っ……………すまねえ…」

「この僕がっ……………」

アイテム使用時

「そらっ!!」

「せいっ!!」

仲間にアイテム

「大丈夫か?」

「ほら…立ちなよ」

戦闘不能から復活

「わりい！助かった！」

「礼は言わないよ……」

術・技使用

「魔神剣っ！」「虎牙破斬っ！」「裂空斬っ！」「雷神剣っ！」「散沙雨っ！」「獅子戦孔っ！」「風の守り神よ……我が力となり、敵を切り裂け！ウインドカッターっ！」「剛・魔神剣っ！」「秋沙雨っ！」「魔神剣・双牙っ！」「風よ……空気を集め、渦を描け！エアスラストっ！」「虎牙連斬っ！」「魔神連牙斬っ！」「雷神裂空撃っ！」「魔神剣・雷牙っ！」「神の息吹よ……天から降り注げ！ゴッドブレスっ！」「雷牙月光閃っ！」

詠唱を妨害される

「何すんだよっ！」

「僕の邪魔をするとは……！」

オーバーミリッツ

「飛ばしていくぜ！」

「僕の逆鱗に触れた事を……後悔するがいいさ！」

秘奥義

「見せてやる!!風の轟を!!はあああああつ!!!風神滅牙斬つ!!!」

リルナ

戦闘開始

「敵です!」「気を付けて行きましょう!」

(天使世界編)「まだ……諦めません!」

(天地融合編) 「私はあの子を止めるまで……決して負けたりしません!」

ボス戦開始

「全力で頑張りましたよ!」

(ロンディア@ギルティーツ平原) 「待つてください! ロンディア殿下! 私達は先ほど来たばかりで何もしていません! 信じてください!」

(あやな@ヤマトタケル像前) 「アイラ陛下の死の悲しみは妹を持つ私には分かります……ですが、ここで立ち止まってはいけません……!」

(VS パーティメンバー@フェーンネス城) 「エンデっ……皆さん……私はず……誰かが……傷つくのが見たくないっ……! だから……殺してえ……!」

通常攻撃 (2〜3段)

「えいっ!」「やあっ!」

ダメージ

「はうっ！きゃあっ！嫌あ！」

瀕死

「どうしましょう……………！」

戦闘不能

「きゃああああ！」

アイテム使用

「はいー！」

仲間にアイテム・治療術使用

「大丈夫ですか？」

戦闘不能から復活

「ご迷惑をおかけしましたあ！」

術・技使用

「スターストロークっ！」「マーシーワルツっ！」「ピコハンっ！」「慈悲深き聖なる加護をー！レジストっ！」「いでよ……永久の礎！ピコピコハンマーっ！」「神の守護よ……穢れを滅せよ！リカバーっ！」「私の力をあなたに！シャープネスっ！」「導く光の環よ……闇を包め！フォトンっ！」「聖なる愛の輝き！ファーストエイドっ！」「神の守護をここに！バリアーっ！」「照らせ！命の鼓動！ヒールっ！」「永久の癒しをここに！キュアっ！」「母なる癒しを！ナースっ！」「降り注げ幻想なる閃光！レイっ！」「輝く大地に愛を！リザレクシオンっ！」「聖なる槍よ……敵を貫け！ホーリーランスっ！」

詠唱を妨害される

「痛いですよお！」

オーバーミリッツ

「行きますよ！」

秘奥義

(第1秘奥義) 「闇に閉ざされし世界に……導きと安らぎの光を！セイクリッドプレイムっ！」

(第2秘奥義) 「燃えよ焔……輝け水……吹き荒れる風……轟け地！スプリームエレメンツっ！」

メインキャラ&敵キャラ&サブキャラ集 メインキャラクター紹介

エンデイル・リアステイン

年齢：20歳

身長：165cm

体重：53_ロキ

種族：人間

職業：双剣士

一人称：俺

二人称：お前、呼び捨て

容姿・服装：茶色のショートボブに赤い瞳。緑のコートに青いタンクトップに緑の
ジーンズに白い靴。

CV：石川界人

誕生日：7月8日

本作の主人公でクロトマーガの村長の息子。

3歳の頃に母親が他界し、今は1歳年下の少女リンネと父親と三人で暮らしている。彼の母親は元々敵国フリーゼ帝国出身の貴族であり、クロトマーガの村長（エンデの父親）と結婚するためにクロトマーガへと渡った。

そして仲間達と共に天使世界と人間界の命運をかけた戦いに挑む事となる。ちなみにフェーネス王国の王女とは幼馴染だがどうやって仲良くなったかは詳細不明のままである。

そんな彼の武器は二刀流であるのは、動きやすいのと戦いやすいためである。そして魔術も使えるとてもとは言えないけどバランスの優れたキャラである。また、パーティーメンバーのお世話をするのが好きらしいためであって子供達に懐かれやすい一面もあるので、パーティーのお父さんの存在なのかもしれない。

属性は風。

一

エンデの全身絵です

—
エンデのドット絵です！貫い物です！

—
貫い物その2です！

—
貫い物3です！

リリルテーゼ・フェーラ・ヴァルレーフィン

年齢：17歳

身長：157cm

体重：39キロ

種族：ハーフエンジェル

職業：ヒーラー・プリンセス

一人称：私

二人称：○○さん

容姿・服装：紫のナースキャップらしきものを被った桃色の長い髪に青い瞳に緑色のジャケットに黄色のリボン付きの橙のワンピースに茶色いブーツ。そしてジャケット着てるから分からないが巨乳である。

CV：小倉唯

誕生日：7月12日

フェーネス王国の王女で本作のヒロイン。

エンデの幼馴染で婚約者であるため、エンデの身は必ず心配するがたまに心配し過ぎな所もあり、一度は乳母に叱られた事も。

おっとりしていても心優しく、歌も料理も上手でスタイルも抜群と言う女性の中では憧れるほどのいい守備を持っているが人を疑う事を知らなく、悪人に騙されたり騙されて誘拐されたりもある。

仲間からはリルナと呼ばれて仲良くされている。また、可愛い物と甘い物と動物（主に小動物）が大好きで、休息の時には動物や小動物達に森で手持ちのハープを弾きながら歌を聴かせてあげたりもする。

そんなリルナの武器は杖であり、攻撃魔法やピコハンなどをはじめとする魔法と補助

魔法と回復魔法を備え持っている。
属性は光である。

ー
リルナの全身絵です。貰い物です！

ー
貰い物その2です！

ー
貰い物その3です！

ラディオス・ノスタルジア

年齢：15歳

身長：155cm

体重：51kg

種族：人魚族

職業：槍術士

一人称：オイラ

二人称：君

容姿・服装：青い猫耳帽子を被った黄色の短髪に紫色の瞳で左目の方には眼帯をしている。緑色のYシャツに赤い短パンに橙のスニーカー

CV：羽多野渉

誕生日：7月27日

ノスタルジア家出身の騎士見習いの少年。将来は立派な騎士になる事であり、そのために訓練を積み重ねている。背が小さい事にコンプレックスを抱いているため、「小さい」とか「チビ」と言われると見栄を張ってしまうらしい。犬が大の苦手で、犬を見ただけで逃げ出してしまふ。

そんな彼には憧れの女騎士がいて、名はロゼッタと言う女騎士である。彼はロゼッタに片思いをしていたが、ロゼッタと同僚であり彼の先輩がロゼッタと恋仲になってしまった。それでも彼は二人の幸せを祈りながら騎士学校を卒業して故郷である人魚の里で騎士として働き始めた。ちなみに歴史が苦手で猫が大好き。

そんな彼の武器は槍であり、魔術は小さい頃から使うことが可能。
属性は土。

ルルー・アミフェ・レフォルモ

年齢：16歳

身長：161cm

体重：46キロ

種族：ハーフエルフ

職業：マジカルファイター

一人称：わたくし

二人称：あなた、呼び捨て

容姿・服装：緑のポニーテールに青い瞳に紫のライン入りの橙のワンピースに黒いローファー。

CV：雨宮天

誕生日：8月17日

レフォルモ家のご令嬢でハーフエルフの森の若き領主である女性。召使が淹れてく

れる紅茶と焼き立てのクッキーが好きという典型的なお嬢様である。

仲間達や他の人に対してはツンツとしてはいるが、許嫁であるウイスタリアの領主のヘンリーやラデイに対してはデレデレであるため、ツンデレと思われるが実はかなりの天然ボケである。彼女は妹のリリーに対しては途轍もなく甘い。

許嫁のヘンリーとルルーのやりとりはパーティを和ませるほどであり、特にお笑い好きのあやなが大受けするほどの面白さらしい。サリアが「ルルーだからルーちゃん」と言っていたためにルーちゃんと言うあだ名がサリアによつてつけられた。

ラデイと同じく歴史が苦手で犬が大好き。ちなみに極度の猫嫌いであり、猫が近寄つて来ただけで寝込んでしまう欠点がある。

そんな彼女の武器は扇であり、魔術も回復魔術も幼少期の頃から使用可能だった。属性は水と氷。

プレファシオ・ラーチエル

年齢：16歳

身長：160cm

体重：54キロ

種族：ウイスタリア人

職業：ガンマン

一人称：ボク

二人称：○○さん、○○くん

容姿・服装：橙のショートヘアに黄色の瞳に黒いジャケットを羽織った赤いシャツに紫色のジーンズに青い靴。

CV：豊永利行

誕生日：10月17日

ウイスタリアのフリー傭兵の少年。幼い頃に両親を流行病で亡くし、叔父に双子の姉のプレフィレオと共に引き取られた。そして叔父が事故死した後に二人は家を出て彼自身は傭兵をやりながらのミュージシャンとして、姉は情報屋の踊り子として生きる道を選んだ。幼い頃は極度の恥ずかしがり屋で姉に守ってもらったが、家を出て傭兵になってからはしょっちゅう女性に声をかけるようになった。彼はミュージシャンの割には極度の女好きであり、パーティメンバーの女性陣の風呂とか部屋を覗こうとして何度も失敗しているが諦めてないらしいが、ダンジョンで役立つ事とかを知ってたりするとても努力家らしい。

彼は女性の中でメリーやリルナのように胸の大きくて優しい人が好きであるため、敵の

女性にまで絡んだりもする。

彼の武器は二丁拳銃で、特に空中戦が得意である。

属性は不思議な事に音が扱える。

メリー・フラットコートテッド

年齢：23歳

身長：175cm

体重：49キロ

種族：鳳凰族

職業：モンク

一人称：あたし

二人称：あなた、君

容姿・服装：青色の三つ編みで緑色の瞳に黄色の布付きの桃色のインナーに紫のふわりとしたズボンに白いサンダル

CV：日笠陽子

誕生日：10月15日

鳳凰の里に住む妖艶な踊り子で族長の片腕と呼ばれる女性。

とてつもなく破天荒で戦好きな様に見えるが、本当は踊る事が大好き。

家は族長や他の鳳凰族の人と比べると豪邸並みにデカく、中には男性用と女性用の脱衣所と露天風呂が設けてる。

そして彼女は破天荒なだけであって淫乱であり、プレファシオや多くの男性を淫乱な仕草を使って虜にするのが得意。一度はエンデを誘惑してトイレに起きて来たルルーに怒られた事もある。

そんな彼女の武器はナツクルで、格闘術や治癒功など以外にピクシーサークルやフェアリーサークルと言った回復技も使える。

属性は物理が使える。

チロル・フェリーシエイナ

年齢：20歳

身長：166cm

体重：54kg

種族：フェーネス人

職業：騎士

一人称：僕

二人称：君、○○さん（様）

容姿・服装：黒い髪で青色の瞳に赤と黄色が入った白い鎧に白いグリーブ

CV：堀江瞬

誕生日：1月4日

フェーネス王国の騎士団長を務める青年でエンデの親友。

エンデとリルナは幼い頃からの親友で3人で中庭で遊んでいるぐらいの仲良しでその絆は大人になっても一切変わってない。

実は彼はどうしようもないくらい心の配性でリルナとかに傷が付くとすぐ心配してしまうらしくて、彼自身はそれを直そうとしている。

彼はギルティーツ大陸にあるテリュベア||ヒースという名の雪の降る寒い地域の産まれの人である。彼は旅の途中でサリアに一目惚れをしてしまい、片思いをしているがサリア本人は全く気付いていないらしい。

チロルの武器は剣で幼い頃から実戦に使っていた母親の形見の剣でありとても大切にしている。そして攻撃魔法を少々と回復魔法が二つ使える。

属性は闇。

サリア・スターダスト

年齢：14歳

身長：154cm

体重：43kg

種族：天魔族てんまぞく

職業：魔法剣士

一人称：わたし

二人称：君、あだ名、○○くん（ちゃん）、○○様（相手が偉い人のみ）

容姿・服装：紫色のサイドテールに桃色の瞳。橙のレッグアーマーに黄緑のインナーに黄色のリボンを腰に巻いて赤い布を付けた青いミニスカートに桃色のパンプス。

CV：田中あいみ

誕生日：7月2日

光の大精霊アスカと闇の大精霊シャドウの力を受け継ぐ巫女と呼ばれている謎の少女。服装や喋り方からにして普通の少女に見えるが、パーティメンバーや敵をあだ名で呼んだりするとてもマイペースで陽気な性格の持ち主である。彼女の種族は天使と悪

魔のハーフであり、歳を取らないで生きて行けるらしい。

余談だが、サリアとサニヴィアの母テイリナと叔母クラリスは、二人の祖先であるサニアという女性が残した平和の種だと噂されている。

そんなサリアの武器は大剣だが、魔術と回復魔術も使える。
属性は何故か炎。

一
サリアの全身絵です

一
サリアのドット絵です！貰い物です！

一
貰い物その2です！

レオンハルト・ノーレッジ

年齢：26歳

身長：170cm

体重：55キロ

種族：マケドニア人

職業：戦士

一人称：俺様

二人称：○○くん、お嬢ちゃん

容姿・服装：赤い髪に青い瞳に黄色のベスト付きのYシャツに紫色のズボンに茶色の革靴

CV：前野智昭

マケドニア皇国の騎士である遺跡マニアの青年。

藤林家の跡取りであるあやなの保護者的ポジションであり、あやなを『幼いプリンセス』と呼び、あやなに『レオ兄』と呼ばれるほど仲がいい。彼の優しさは現マケドニア皇国の王でありあやなの姉であるアイラに認められたりするほどである。

彼はマケドニア皇国騎士の姿とギルドに所属する姿の二つを持ち、どう言った目的でエンデー行に近付いたかは不明ではあるが、不審な動きをよくするらしい。

パーティーメンバーの中ではプレファと非常に仲が良く、二人で遊びに行ったりもする。

そんな彼の武器は斧で、どんなに重たい斧でも軽々と持てる。

属性は不明。

藤林あやな（アイエーリス・マケドニア・リングフィード）

年齢：12歳ぐらい

身長：143cm

体重：40キロ

種族：人間（マケドニア人）

職業：忍者

一人称：あやな（アイエーリスの場合はアイリ）

二人称：○○兄（男性の場合）、○○姉（女性の場合）

容姿・服装：銀色のセミロングに橙の瞳に十二単の短い版に白い足袋を履いてベ-

ジュの下駄

CV：徳井青空

藤林家の跡取りの幼いクの一の少女。

彼女はあのかぐや姫の生まれ変わりと言っているが真相は定かではない。そして忍びの里と繋がりを持つ別の忍びの里に住んでいる忍者の華辰巳つばきの許嫁であり、二人はとても仲が良い。

また、くの一のなにお笑い好きでしかも現代の服が好きという和の特徴のわりには洋風が好きという意外な一面を見せる。

義理の母のあやめが死んだ今は、藤林家を支えた二人の老人の孫娘として楽しく生活をしている。

そんなあやなの武器は短剣であり、藤林家と華辰巳家が代々崇めて来たキツネ『狐狗狸さん』を秘奥義に召還する事もできる。それはつばきも召喚可能である。

属性は妖（あやかし）という特殊な属性を持つ。

ロンディア・アルベルト・ランジエギルティーツ

年齢：18歳

身長：176cm

体重：56キ
□

種族：ギルティーツ人

職業：魔術師

一人称：僕

二人称：お前、君

容姿・服装：黒い髪に橙の瞳に紫と赤のラインが入った白いローブに緑の靴

CV：梶裕貴

ギルティーツ公国の皇子の青年。

読書するのが好きで鬱になりやすい一面があり、常に1人である。そして誰よりも猫キヤッツファイア人族をどのギルティーツ人よりも人一倍愛していて周りからは『獣人好き』と言われている。

彼は許嫁である商人ギルド猫キヤッツテイルの尻尾リーダーである猫キヤッツファイア人族の少女ミリーシャの実母ミリーシャの愛弟子であり魔術も占いの仕方も小さい頃に教わった。彼はミリーシャの事を『ミリア』と呼びミリーシャはロンディアの事を『ロン様』と呼ぶほど仲がいい。そして女の子と間違えられる事があるのはミリーシャに対するエスコートが出来ないからである。その事は本人も気にしているらしい。

そんな彼の武器は鞭であり、魔術で援護して前衛に立ち鞭で敵を薙ぎ倒すというとてもいいバランスを持ち合わせている。

属性は何でも扱える。

ミリーシャ・エルゼドール・フオールド

年齢：19歳

身長：150cm

体重：40キロ

種族：猫キャッツファイア人族

職業：爪心格闘家

一人称：うち

二人称：君、あだ名

容姿・服装：白が混ざった感じの薄い茶色の猫耳ツインテールに綺麗な緑色の瞳に宿娘が着そうな赤と青のエプロンドレスに黒いブーツ

CV：豊崎愛生

商人ギルド猫キャッツテイルの尻尾のリーダーである少女。

ギルティーツ公国の皇子であるロンディアの許嫁であり、お互いをあだ名で呼ぶほど仲がいい。女の子だが女の子と間違えられるロンディアに対してエスコートが出来ると言う男の子の様な部分がある。

そして彼女の母親は有名な大占師ミーシャ・エルゼドル・フォールドであり、魔術と占いが出来るとても天才な頭脳の持ち主である。ミリーシャとロンディアは二人とも教え子であった。ちなみに『猫』とか『猫娘』と言うと怒るらしい。皆からは『ミリア』と呼ばれていて、皆の前ではとてもナイスなムードメーカーであるが実は恥ずかしがり屋である。

そんな彼女の武器は爪であり、空中戦もお手の物である。

属性は何でも扱える。

敵キャラクター紹介

ミオウ・プリセツト

性別：男

身長：170センチ

体重：61キロ

年齢：外見14歳

種族：天使

クラス：魔法剣士

武器：剣、弓

イメーჯCV：島崎信長

一人称：僕、我

二人称：あなた、○○さん

容姿・服装：薄緑のロングストレートに赤と青のオッドアイに紫のローブを着て黒いブーツ。片方の背中には黒い天使の羽根が生えている。

フリーゼ帝国に仕える天使の少年。冷静沈着だがイタズラ好きでよくジョルジュをからかったり一度はエンデをからかった事もある

ティエルの忠実な部下で商人ギルド月光つぎびかりのサファイアの水青石で幹部として働いていて幹部名は殺戮天使ミオウと呼ばれている。任務でリルナを主の元に連れて行くためにエンデ達の前に立ち塞がる。彼の黒い羽根は飛ぶ時に抜けるらしい

メアリイ

性別：女

年齢：12歳（外見）

身長：145センチ

体重：39キロ

種族：アンドロイド

クラス：ビシヨップ

武器：杖

イメージC V：小澤亜季

一人称：メア

二人称：○○お兄さん、○○お姉さん

容姿・服装：栗色のツインテールに青い瞳で黒のフードが付いてピンクリボンが特徴の黒のふんわりワンピースにピンクのブーツを着用。

フリーゼ帝国に仕える幼い少女。

彼女もテイエルの忠実な部下で4幹部の1人だ。彼女の幹部の名は魔神人形ドールメア
リイである。

正体はメリーの実子で、父親ジャックと母親メリーと暮らしていたがある日父親がフリーゼ帝国の兵士に殺されてメアリイは研究者達に誘拐されてアンドロイドにされてしまった不幸な鳳凰族の娘なのである。後ろに背負っているクマのぬいぐるみはちやちや丸と言う名前で母メリーがメアリイの誕生日に“友達が出来なくて寂しい思いをしないために”とメアリイを想って編んだモノであるため、肌身離さず持っている。

ジョルジュ

性別：男

年齢：27歳

身長：180センチ

体重：52キロ

種族：フリーゼ人

クラス：大剣士

武器：大剣

イメーজC V：江口拓也

一人称：俺

二人称：お前

容姿・服装：黒い短髪に赤の瞳に青の軍服を着用。

フリーゼ帝国に仕える青年。彼もまたティエルの忠実な部下で4幹部の1人であり、
ジオルジュの幹部名は魔剣ジオルジュであり、その強さはフリーゼ帝国の剣となった彼
に相応しい名である。彼にはセレナと言う貴族令嬢の婚約者がいて、婚約者^{ファイアンセ}セレナのた
めになるなら闘いに…ティエルにフリーゼ帝国に全てを捧げる決意をした。

ナタリー・フレイムネオ

性別：女

年齢：20歳

身長：160センチ

体重：45キロ

種族：ハーフェルフ

クラス：科学者

武器：本、剣

イメージCV：降幡愛

一人称：ボク、私（闘う時のみ）

二人称：あなた

容姿・服装：金長髪に紫の瞳に赤のターゲットルネックにピンクのチェックスカートの上に研究者の白いコートを着るのが彼女の普段着である。

「恥ずかしがり屋な性格の研究員。彼女もティエルの忠実な部下で4幹部の1人であり、ナタリーの幹部名は妖術師ナタリーと呼ばれるほど実験と魔術が大好きでティエルからの命令がない限り研究室から出ない。言わば引き籠りである。」

ティエル・フリーゼ

性別：男

年齢：22歳

身長：175センチ

体重：52キロ

種族：フリーゼ人

クラス：皇帝エンペラー

武器：杖

イメージCV：細谷佳正

一人称：ボク

二人称：君

容姿・服装：銀長髪に赤い瞳。韓国にいなような人が着ている服装に皇帝の証であるマントを羽織っている。

ミオウ達を統べる者にしてフリーゼ帝国の皇帝。元々は優しい性格でネーラ（リンネ）の婚約者ではあるが、ある日フリーゼ城を訪れた聖女アルテミスの言葉を信じ残忍な性格になってしまった可哀想な皇帝なのである。

アルテミス

性別：女

年齢：27歳（外見）

身長：154センチ

体重：？

クラス：聖女

武器：杖

イメージCV：Lynn

一人称：私

二人称：あなた

容姿・服装：薄い黄色のラインが入った白い帽子に薄緑のセミロングに紫の瞳。教会

にいる聖者が着そう^で着なさ^{そう}なスカート^{の丈}が短い白い服に白いブーツを履いている。

フエーンネス王国の聖女。とても優しい性格の持ち主で人や信者達を導くのが得意で各地の人々が神が遣わされた聖女を一目見ようとフエーンネス王国に集まって来る。また、聖女アルテミスの元で働きたいとシスターになる女性も多く人気を誇る。しかし：それは表の姿で裏の姿のアルテミスは魔神を崇拜する黒き闇の聖女で人々を巧みな言葉で操り、自身を最も信頼しているリルナを捕らえてリルナの体内に眠る天^{エンジェルプリンセス}使^{エンジエティア}姫の力を利用してフエーンネス城に眠る天使世界へと繋がる扉を目覚めさせ、リルナを女神として覚醒させてプラネティアを我が物にしようと企んでいる。そのためにフリーゼ帝国皇帝ティエルの心を壊して残忍な性格にして利用したとんでもない悪聖女である。

サブキャラクター紹介

リンネ・リアステイン

年齢：19歳

身長：158センチ

体重：43キロ

種族：フリーゼ人

職業：占い師

一人称：私

二人称：あなた、君

容姿・服装：青いお下げの髪に緑とピンクのオッドアイに紫の宝石が付いたサークレット。黄色のリボン付きの橙のローブにピンクのパンプス。

CV：堀江由衣

クロトマーガに住む少女。

彼女の占いはよく当たると言う噂で、各国からいろんな人が占いをしてもらいに訪れていた。

彼女にはピンクやオシヤレが好きと言う乙女な一面とスポーツ系が好きと言う活発な一面が存在する。

リリー・アミンシフェル

年齢：15歳

身長：159センチ

体重：43キロ

種族：ハーフェルフ

職業：令嬢

一人称：私

二人称：あなた、○○さん

容姿・服装：金色のサラサラなストレートロングに青い瞳。赤いイブニングドレスに黄色のブーツ。

CV：坂本真綾

ハーフェルフの森に住むアミンシフェル家のご令嬢。

ルルーの妹で召使と一緒にクツキーを作る事が好きな家庭的な女性であり、出来上がると召使が淹れた紅茶を飲みながらルルーと一緒にクツキーを食べたりお客様に出したりする。

また、護身用で母親から頂いた弓を身から離さずに持っている。

ディアナ・プロージット・フェーラ・ヴァルレーフィン

年齢：29歳

身長：170センチ

体重：42キロ

種族：ハーフェンジェル

職業：女王

一人称：私

二人称：○○様、○○くん・ちゃん

容姿・服装：銀色のティアラに赤色の長い髪に青い瞳。黄色のドレスにピンクのハイヒール。右手の人差し指には夫の形見である指輪をしている。

CV：井口裕香

フェーンネス王国を統べる女王でリルナとユリスの母親。

穏やかで温和な性格で平和を願っている事から、各国の王族や貴族や民が心を射られ、求婚してくる男性が多いとか。

夫であるクリスと言う人物とは子供の頃に旅をしていて盗賊に誘拐された数日後にフリーゼ帝国に保護されていた際の牢獄で出会い、最初は監視する者と保護の身の関係だったが次第にお互いに惹かれ合い、正体がバレて処刑の日の前日にクリスはフリーゼ王も騎士も帝国も民も裏切ってディアナと共にフェーンネス王国に逃亡して両親を説得して結婚した。

プレフィレオ・ラーチエル

年齢：17歳

身長：160センチ

体重：44キロ

種族：ウイスタリア人

職業：情報屋・踊り子

一人称：あたし

二人称：君、呼び捨て

容姿・服装：黄色のくるくるカールに橙の瞳。白いブラウスに赤と黒のチェックミニスカートに青いブーツ。

CV：南篠愛乃

ウイスタリア出身の有名な踊り子。

プレファレオの双子の姉で共に叔父と共に引き取られ、叔父の事故死をきっかけに情報屋をやりながら踊り子をやる道を選んだ。

メリーとは家を出てすぐに出会って知り合い、踊り子として共演した事がある。

外伝

エンデ編チャプター1：少年の日々

それは遠い昔の事……。

後に英雄と呼ばれる青年時代のエイドは各地を旅して回っていた。

とある街で後に彼の妻となる貴族の娘マリンと彼女を支える使用人ベロニカと出会い、エイドは二人に会いに来ては遊んでたと言う。

だが、彼女は生まれつき身体が弱いためであつて遠くには行けなかった……。エイドは彼女のために一刻も早く魔神を倒す旅に出た。

無事魔神を倒したエイドは英雄となり、貴族の娘マリンと婚礼の儀を挙げた。

その2年後……二人の間に一人息子のエンデが誕生してクロトマーガの村民は祝福した。

しかし幸せは長くは続かなかつた……母親のマリンが亡くなつてしまつた……。彼女を愛したエイドも3歳になつたばかりの息子エンデも村民も悲しんだ。しかし、奇跡の大樹は悲しみに明け暮れたエイドに呼びかける……。『あなたの愛したマリンを私の前に連れて来て』と。次の日エイドは雨の中……マリンの亡骸を抱えて奇跡の大樹が聳え立つ

森の奥に行った。そこで待っていたのはたくさんの華が咲き乱れた場所だった。奇跡の大樹はマリンの亡骸を大樹の前に置いて……と少女の声が聞こえた。振り返るとそこにいたのは、奇跡の大樹に宿るジュリアだった。ジュリアは鶯を使ってマリンの亡骸を運んだ……すると、マリンの亡骸は華になって……大樹を華やかに飾った。

これは、後に女神の夫となる少年エンデの物語である

エンデ「ねえねえ父さん」

エイド「なんだエンデ？」

エンデ「俺に剣の使い方を教えて！俺……かつて英雄と呼ばれた父さんみたいに強くなりたいたんだ！」

エイド「分かった……剣の使い方を教えてあげよう。その代わりに、私の指導は厳しいからな？」

エンデ「大丈夫だよ！父さんがマリン母さんを愛した様に俺にもいつか愛する者が出来たら守るんだ！」

エイド「そうか。使用人！」

女使用人「何でしようか旦那様！」

エイド「エンデに木刀を持って来てやってくれ！」

女使用人「かしまりました！」

女性の使用人は木刀を取りに行く。

エイド「エンデ、剣の使い方の練習が終わったらジュリアに逢いに行くか」

エンデ「うん！奇跡の大樹はジュリア様だもんね！逢いに行くよ！」

エイド「そうか……どうやら準備が出来たみたいだな。始めるか」

エンデ「うん！」

エイドとエンデは中庭に出た。

エイド「剣の持ち方は右手と左手で持ち手の部分を持つんだ。それが剣を握った時の姿勢だ、やってみろ」

エンデ「うん！」

エンデはエイドに言われた様に剣を握った。

エイド「そうだ。それで剣を振ってみろ」

エンデ「うん！」

エンデは剣を振る。

エンデ「父さん……何も出ないよ？」

エイド「エンデにはまだ早いからな……父さんが使っていた技を見せてあげよう。良

く見ているんだぞ?」

エンデ「うん!」

エイド「魔神剣っ!!」

エイドは剣を振ると紫の衝撃波を放ち、訓練用の人形に当てた。

エンデ「すごいよ父さん!」

エイド「お前も大きくなったら使える様になるさ。それまで剣の持ち方をマスターしておくといい」

エンデ「うん!」

エイド「さあ……練習はこれぐらいにして母さんに逢いに行くでしょう。お前達も付いて来るか?」

戦村民「はい!いざとなったらエイド村長もエンデくんも我々が守り抜きます!」

エイド「頼んだぞ。」

エイドとエンデは戦村民を連れて奇跡の大樹が聳え立つ森の奥に行った。

☆

エイド「着いたぞエンデ、この樹が奇跡の大樹ジュリア様だ」

エンデ「大きいね」

エイド「そうだろ？この森がずっと自然豊かなのはジュリア様が枝のあっちこつちにマリソフフラワーと言う青い華を咲かせているからなんだ」

エンデ「マリソフフラワーって華ってどんな効果があるの？」

科学者村民「マリソフフラワーには心の傷や身体の傷を癒す効果が多いが、他には人々をリラックスさせる効果や母の様な優しい温もりで気持ち良くさせる効果があるんだよエンデくん」

エンデ「だから俺の部屋の窓辺にマリソフフラワーを生けた花瓶が置いてあるんだね！」

エイド「そうだぞ。さあお参りをして帰ろう」

エンデ「うん！」

エイドとエンデと戦村民は奇跡の大樹ジュリアにお参りをして、クロトマーガに帰った。

外伝チャプター2へ続く

リルナ編チャプター1：産まれた王女

その昔…フェーンレス王国の姫ディアナは旅をしたいと思っていた。

しかし、当時国王と王妃だった両親に反対される事が多かったため…こつそりと抜け出すしか方法が定まらなかったほどのお転婆姫だったと言う。

抜け出した後は身分をバレないようにしていたのだが、港で盗賊に人身売買の金目当てで誘拐され、そのまま荷物の代わりに袋に詰められたままフリーゼ大陸に上陸してしまい…このまま売られるしかないと思うがまま数日を過ごしていたが、ある日フリーゼ帝国の騎士達よって救い出されて保護された時に夫クリスと出会い…当初は監視する者と保護された者との関係だったが、次第にお互いに惹かれ合って恋に落ちて無事に帰れるはず…だった。兵士の1人が正体を暴き出してしまい…処刑台に連れて行かれた事を知ったクリスは行われそうになっていたディアナの処刑を止めてディアナを連れて逃走し、当時フリーゼ帝国を訪れていた英雄エイドと共に魔神を倒す旅に出た。

こうして無事に魔神を倒したクリスとディアナは英雄となり、喜んだ両親は二人の婚礼を許し…晴れて結ばれた二人はフェーンレス王国の次期国王と次期王妃となった。

これは後に天界の女神になり、後の英雄と呼ばれる妻になる少女リルナの物語である

くフェーンネス王国・玉座く

側近「クリス王様…少しでも落ち着かれてはいかがでしょうか？」

クリス「分かっているさヨハネ…だが…ディアナが無事に我が子を産んでくれるのか心配なのだ…」

クリスの側近のヨハネは落ち着かせようとする。無論落ち着くはずがない。何故なら…クリスは父親になろうとしているからだ。

しばらく無言が続くや否や、赤子の泣き声が聞こえて来た。その直後メイドが走って来た

メイド「クリス王様おめでとうございます！元氣な女の子ですよ」

クリス「分かった！行こうヨハネ！」

ヨハネ「はい王様」

クリスとヨハネが部屋に入るとディアナと眠っている女乳児の寝顔があった。

クリス「ディアナ！」

ディアナ「もうあなたつたら…大声を出してはいけませんよ？折角寝た我が子が起きてしまいますよ」

クリス「そうだったな…」

クリスとヨハネは赤子の寝顔を見つめる。

ヨハネ「ディアナ様、ご出産おめでとうございます！このヨハネもこの日を待ち望んだ事か…！」

ディアナ「ありがとうヨハネ…あなたも一緒に祝福してくれてこの子も喜びますわ」
ヨハネ「私も喜びますよ。ねっ王様？」

クリス「だな、ところでディアナ…名前は決めたか？」

ディアナ「もちろんです、この子の名前はとつくに決めました！ヨハネも笑わないでくれますね？」

ヨハネ「分かりました」

ディアナ「ありがとうヨハネ…この子の名前はリルルターゼと名付けます」

ヨハネ「リルルターゼ様…とても素敵な名前ですね！ねっ王様？」

クリス「だな、俺達呼びやすい様にリルナって呼ぼうではないか」

ディアナ「それはいい考えですね！、リルルターゼ…この方があなたのお父様で私があなたのお母様です」

クリス「初めまして…そしてこれからよろしくなりルナ…お前はお父様とお母様がちゃんと愛情を込めて育てるからね」

こうして無事に産まれた女の子はリリルターゼと名付けられて、民衆はリリルターゼの誕生に喜んだ

チャプター2へ続く